明治三十五年一月一日發兌

女鑑

第貳百四拾四號



女鑑第貳百四拾四號

目録

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一ヶ年分 前金貳圓四拾錢
全國無遞送料

明治三十四年十二月廿一日印刷
明治三十五年一月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎眞衛
印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 蛭木眞雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
發賣元 株式會社國光社出版部 (電話新橋八八番)(電話新橋二六九三番)

本誌發賣所變更

女鑑發賣に關する事務は是迄東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館書店をして取扱はしめ來り候處爾後國光社出版部に於て發賣する事に相改め候間自今代金御送付、御照會、及廣告に關する事件一切の事務は左記宛にて御申越被下度候也

明治卅五年一月一日

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

株式會社 國光社出版部

（電話新橋八八番
電話新橋二六九三番）

謹賀新年



吉沼本店
正札附商品陳列
階下階上は時計及美術品
三四階は諸大家揮毫書畫
無料進呈
（營業要覽）
送料郵券四錢要ス
時計及寶玉類
貴金屬美術品
商
東京日本橋通二丁目
（特電本局三三三）
吉沼又右衛門
大坂心齋橋筋順慶町角
（特電東一八八〇）
吉沼出張店



女鑑改良のしらせ

女鑑の世に出しは今を距る十年のむかしにあり號を重ぬることすでに貳百四十四、世にある女子の雜誌のうちにては母とも姉とも言つべきものなり、さはれ年月に發兌の部數はいやまして已に壹萬余部の多きに達しぬこゝに於きていよ〳〵女鑑の本分を盡さまく來る一月下旬の發兌すなはち第貳百四十五號より新たに諸大家の寄稿を請ひよきが上にもよきを旨として愛讀者諸君の厚意に酬ひ奉らむとす先づ次號に加ふべき有益の文字は

一日本弘道會長文學博士西村茂樹先生の女子教育の講話
一東京感化院長高瀨眞卿先生の實　家庭の教育
一饗庭篁村先生の家庭小說
一寒江振作先生の家政に關する講話
一伯爵東久世通禧君の和歌の話を初めとし茶道、挿花、遊戲、繪

書和文々範和歌軌範等にいたるまで婦人としての必讀の材料一も漏す處なし併せて月並和歌兼題の外に

懸賞和歌の募集をなす

べく其兼題は毎月必ず前號の紙上に於て之を廣告し天地人の三首に懸賞すべし

和歌懸賞

一伯爵東久世通禧先生點評

題 都立春

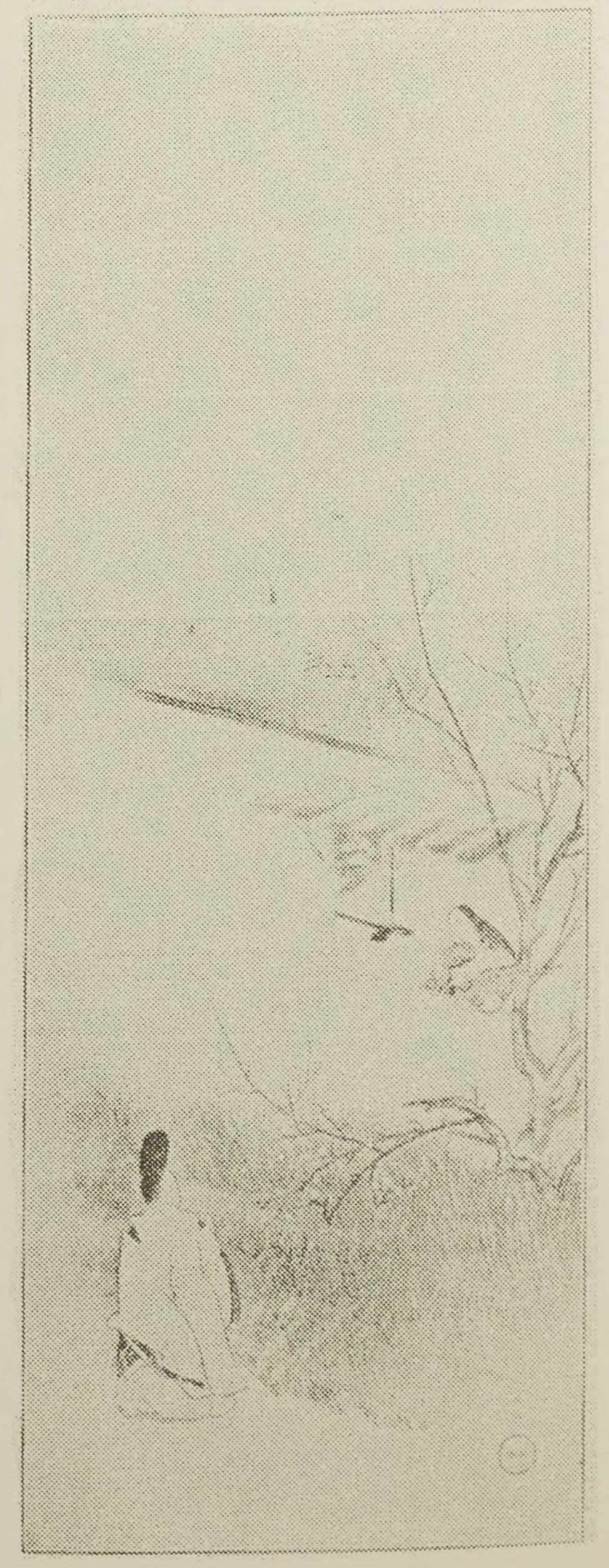
二月五日〆切

短歌一首に限る必ず住所番地姓名を記入あるべし

天 賞品 富士谷御杖述 土佐日記燈

地 仝 指原乙子女史編纂 女子文章軌範

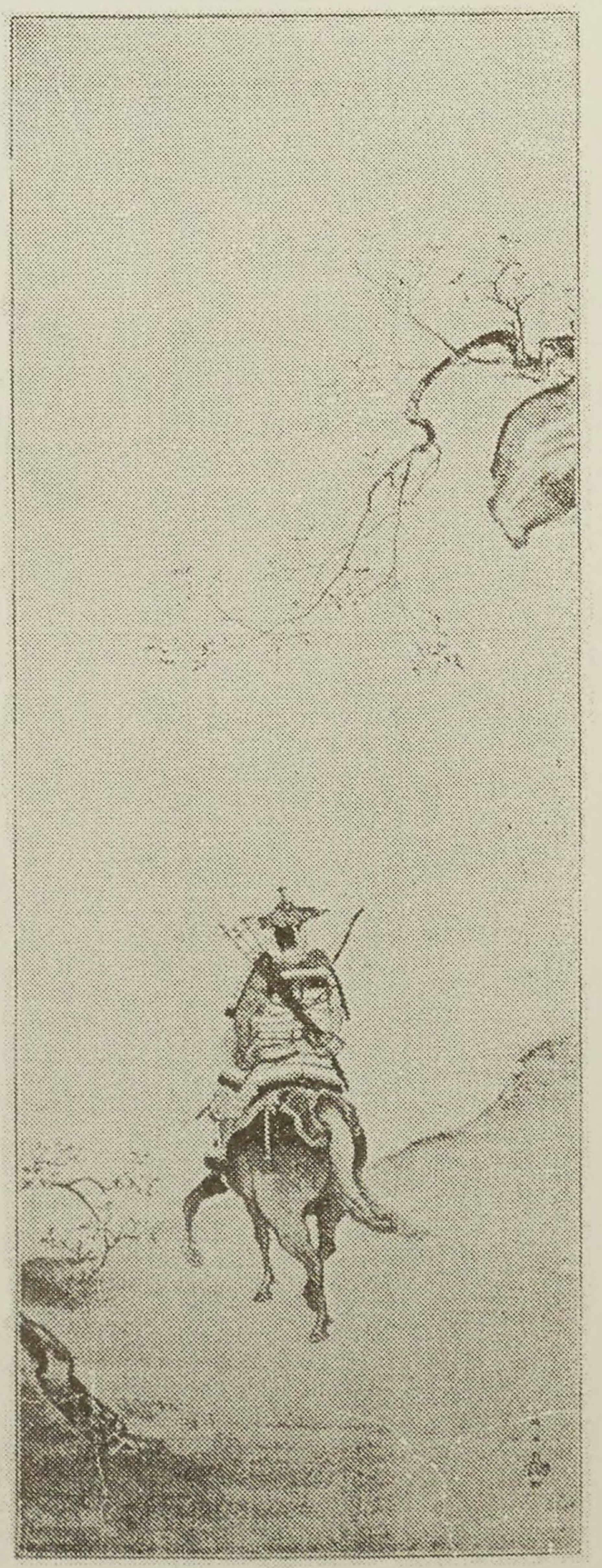
人 仝 三輪田眞佐子著 女子の本分



一月



二月



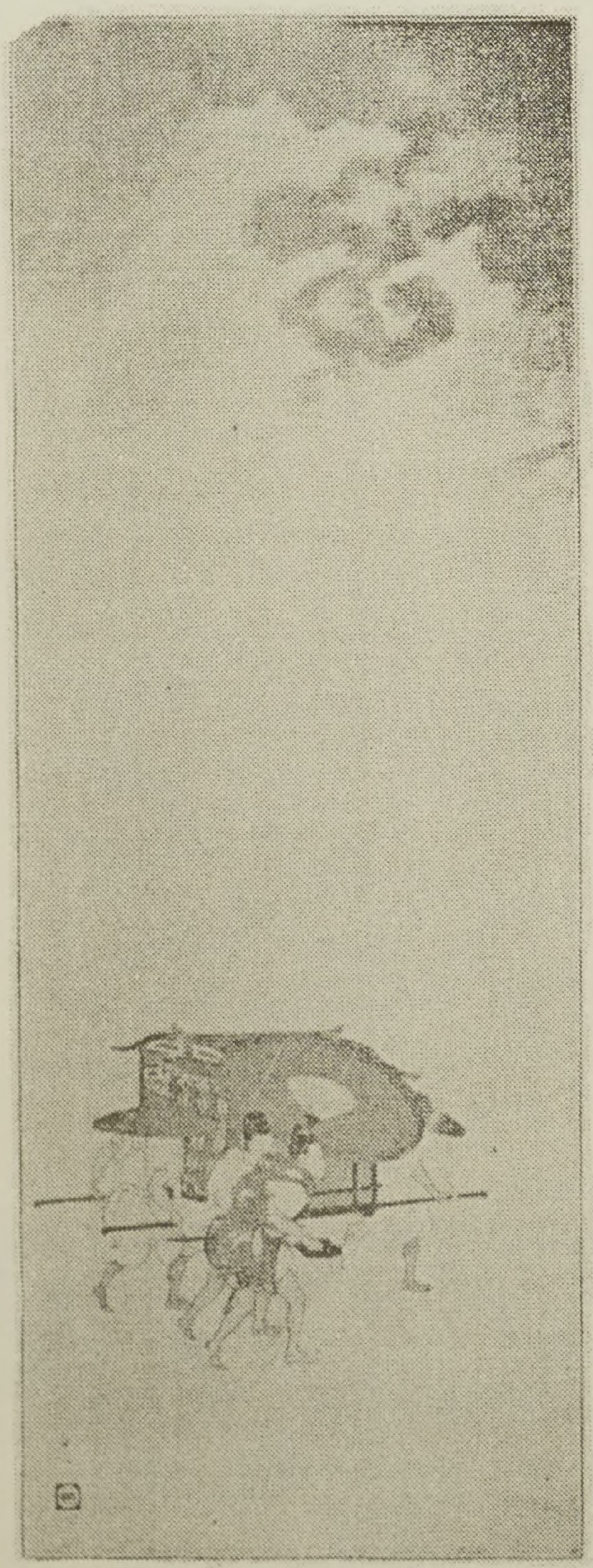
三月



四月



五月



六月

天つ日嗣のみさかえは天地と共にきはまりなくわが日の本の國の光はいや年のはにてりそひなんとあらたまの年の始めのほぎごとと申すにこそ

明治卅五年一月一日

女鑑 第二百四十四號

服裝と品位

服裝は、禮式の一端なれば、餘り疎略にながれ、或は、見苦しき迄に垢着きたるものなどは、之を用ゐる可からずと雖も、左ればとて、華美驕奢に失する如きは又、大に愼まざる可からざる也。

古、封建の代は、人の身分と階級とに從つて、各、服裝に上下の差別ありしが、維新以降は、士農工商の區別廢せらるゝと同時に、服裝も、亦、人の自由に任することゝ爲り、富且つ榮ゆる者は、其の身分の如何に拘らず、巨資を投じて美服を購ひ、以つて己れが榮譽と爲すに至りたれば、左なきだに名聲を衒はんとする人々は、只、其の美を矜らんとして、無理に巨額の金錢を濫費し、果ては、一家の衰頽不和をも顧みざるものあるに至れり。實に慨しきの極みと謂ふ可し。

されば、世の、多くの婦人達も、此の弊風に襲はれ、生活費の幾分を割きて、服裝の贅澤費に投ずるもの鮮からず。殊に、歲末の如き差引出納の頻繁なる場合に際し、新年の晴衣に汲々として、一家經濟の餘裕如何をも顧みざるは、豈に淺陋

の至りならずや。

總じて、歳末は金錢上の關係繁多なりとは言へ、其の繁多なる原因の一は、主として、婦人服裝の請求に存するは、今日社會一般爭ふ可からざるの現象なり。かゝる現象は、一身一家又は一國の爲め、決して、喜ぶべきの現象に非ざるなり。人、動もすれば、品位の眞意義を誤解し、頻りに、外觀的服裝の美を盛んにして、能事茲に了れりと爲すものあり。是、惑へるの甚しきものにして、品位と服裝とは、決して、根本に於いて相一致するものにあらざるなり。何となれば品位の優劣は、もと、心性の高下より來るものにして、即ち、心正しければ、容貌修まり、容貌修まれば、人得て之を犯す可からず。其の人に犯されざる、是品位の高尚なるを證する所以なり。

故に、縱令、服裝を外に盛んにするも、心性内に卑陋なれば、威儀なく、威嚴なく、忽ち、人の侮りを受くるを免れず。人善く此の理を了解せんか、服裝の價値亦知るべきのみ。

されば服裝は、唯、人に對して其の禮を失せざる迄の程度に之を止む可し。華美驕奢に流るゝ如きは、却つて、其の品位を失墜するものなり。新年、まづ、この言をなすもの、これを讀者の左右前後に顧みば、自、首肯せらるべし。



論説

女子教育に就いて

高等師範學校長　嘉納治五郎

近來、女子教育が盛になつて來て、女子も、適當なる教育を受けることが出來るやうになつた。是は、如何にも喜ばしいことである。併し茲に、大いに注意しなければならぬことがあると思ふのは、今日までの缺點を補はむが爲に、輕卒に他國の眞似をしたり、或は、從來と反對の教育法を用ゐることである。假に某の國に於ける女子の教育法は、完備して居つて、其の國に於いて見れば、申分のない有樣であるとしたところが、必ずしも其の教育法が、我邦に適すると云ふ譯にはいかぬ。何せならば、何れの國の教育法も、其の國の他の事情に伴はなければならぬからである。況してや、何れの國に於いても、女子教育の事に付いては、種々論のあることで、或は女子に、餘り男子と同じやうな、教育をし過ぎると云ふ批難のある所があれば、種々の點に付いて、滿足をせぬ人が多くあるのである。それ故に、濫りに、外國の事を模倣することは、宜しくない。又、舊來の教育法が過つて居ッたからとて、急に、其の正反對の事をするのは、却つて弊害がある。それ故に、女子の教育は、其の社會の變遷に應じ、男子の教育と相竢つて、結局一家の幸福を増し、一國の富強文明を增すに、適當なる方法でなければならぬ。ず、我邦の從來の教育法は、男尊女卑に過ぎて、

或る格段ある場合の外は、女子に、人の妻となり、親となり、子となるに、必要なる知識も授けず、唯、其の夫なり、父母なり、長子ありに從ふを以つて、其の勤めと考へしめたやうな有樣であッた。固より、女子も一人の人間である、男子も一人の人間である。從來の如き男女の關係は、一家の幸福を進むる所以にもあらず、國家の文明富强を計る所以でもあらざる譯であるから、其の過てる事は明かである。併し、我邦の男女の關係が過ッて居るに比して、他の國に、女子に一層高い敎育を與へて、我邦の如き弊に陷ッて居らぬ國が、果して一家の幸福を得、國家の文明富强の原因となッて居るか、能く考へて見なければならぬ。一言で申せば、或る形に於いては、一家の幸福を增し、國家の文明富强の基を爲して居るが、或る形に於いては、却ッて、之に反對の結果のあることを見る。我邦に於いて、僅の經驗に依ッて考へて見るに、男尊女卑の反動から、濫りに女子を尊ばむとして、思慮なく女子に智育を爲した結果は、果して、幸福ある家庭を作るに、適當なる妻を出したか、國家の文明富强を爲すに、必要なる女子を作ッたか、眼ある人は目擊したであらう。それ故に、向後の女子の敎育は、濫りに、外國を模倣するにあらず、舊來の敎育法を排斥するにもあらず、如何すれば、幸福なる家庭を作り、我邦の文明富强を增すに、適當なる女子が出來るかと云ふことである。

今假りに、男子の敎育が、十分に行屆いて居ると假定すれば、其の妻となる女子は、ドウ云ふ敎育を受けて居ッたら宜いかと云ふに、少數の女子にして、獨立の職業を營むものは別として、先づ、能く家を整め、子女の敎育に注意し、夫をして家

事に心を勞することなく、專ら、其の力を職業に注ぐことを得せしめるにある。其の夫の職業の種類、一家の資產等に依ッて、固より、其の妻たる者の職分にも、違ひはある譯であらうが、假りに、中等の生活を爲し、夫は、日々一定の時間、外に出で、職務を執るものであると假定すれば、其の妻たる者は、家事萬端の始末、食事衣服のこと、幼兒の躾、學校に通ふ子供に付いての注意、夫の不在中に代ッて爲すべき種々の仕事、又、其の子供の平素の性質を能く考へて、夫と共に、其の將來の方向を定める上に、必要なる事實を確めて置かなければならぬ。又、夫が家に歸ッて後は、其の話相手となる夫の苦樂を分ち、惑ふことある場合は、傍にあッて、虛心冷靜に考へた上で判斷を付け、過ちに陷らむとしたるときは、適當なる注意を與ふることをせねばならぬ。是だけの職分を盡さむが爲には、女子は、普通の知識と、健全なる判斷力とを有し、社會の現狀にも通じ、衞生及び敎育に關する、一般の知識も備へて居らねばならぬ。是だけの職分に堪ふることは、人間としては、ナカ〳〵難事である。同時に、又重任である。

或る人は言ふであらう。女子が家の事のみをなする、男子が外の事をする、と云ふ職分を極められては、女子は、甚だ不幸なことである。女子は、一家の事などを扱ひ、外の事は、皆男子がすると云ふことは、甚だ女子に取ッては、不幸な譯である、と言ふかも知れぬが、併し、假りに、男子も女子も、共に外の事のみして、總ての女子、——少數の女子は、固より取除であるが、若し多數の女子が、外へ出て、共に事をすることであッたら誰が綿密なる家の世話をするか、誰が綿密に子供に注意をするか、誰が外に出て居ッて、過激な勤

をして居る、其の勞を慰めて與れるか、給料を出して雇ふた者には、多く、其の勤を爲す者は無からう。然らば、ドウして、此の一家の整理が出來るか、子供の世話は能く行届くか、内事の勤を果し得るか。若し、これ等のことを爲す者が無かッたならば、夫が家に歸ッて、幸福を得られぬのみあらず、其の妻たる者も、恐らくは幸福を得られまい。唯單に、外向きの事をすると云ふだけのことの爲に、一家の幸福も、又一家の整理も、子供の發達も、皆、犧牲に供して仕舞はなければならぬ。若し斯の如き事を以つて、女子の位置を高めたと思ふ者があるならば、是は、形を求めむが爲に、其の女子の、眞の幸福を奪ッたと同様である。

又女子は、身體の生理上から考へても、男子と異ッた働を爲すべきものである。又、遺傳の力、社會の習慣等の上から、男子は、自から男子に適當なる仕事がある。女子には、自から女子に適當なる仕事がある。女子は、女子の盡すべき道を盡して、始めて尊い。恰も男子が、男子の道を盡すのと同じである。戰場に出て、敵と戰はむとして居るところの夫に對して、郷里の妻の一片の手紙が、如何ある力を爲すであらう。國家の利害と、一身の利害と衝突した場合には、傍に居る妻たる者の意見が、如何に其の判斷を爲さしめ得るであらうか、第二の國民たる兒童は、將來國家の重任を荷ふべきもの、其の兒童の發達の上に、母の力は、如何に大なるものであるか。と云ふことを考へたならば、女子が、其の夫に對して、内事の勤を爲す上から考へたなら、女子たる者の力は、一家の妻として、如何ばかり大いなるものであるか。子供の發達の上に、如何ばかり大いなるものであるか。それで、今日女子の教育は、斯の如き職分を、能

く盡し得る女子を作らなければならぬ。（未完）

結婚は重大事

三輪田　眞佐子

人生に於いて、最も注意に注意を加へ、以つて、他日の憂を醸さゞるやう謀るべきものは、結婚ぞかし。故に、未婚の男女は、各、その配偶者を撰擇するに當り、深く考へ、遠く慮り、決して、異日の恨を作るべからず。亦、父母若しくは、これに代り、結婚の議に加はるべき人々は、唯、自ら一個の好惡、あるは、利害のため、取捨の標準を誤るべからず。須らく、配偶者たるべき相互の關係を參考して、幸福ある結婚をなさしむべし。

何を以つて、結婚はかく愼みて行ふべきか。曰く、一度結婚せし以上は、離婚せざるを以つて本則とすればなり。即、夫婦は人倫の大綱にして、其の目的は、一時に限るものにあらず。必、快樂を共にすべきのみならず、艱苦をも共にせざるべからず。故に、苟も結婚せし後は、富貴烟散して、赤貧の身とならんも、露ばかりも厭ふべからず。疾病來襲して、骨立の姿とならんも、夢にだに嫌ふべからず。否、たとひ、相互の理想相戻り、相反せんも、互に忍び、互に怨むべからず。全く、專心相愛し、相助くるを以つて、夫婦の道と知るべし。古歌に、

女郎花我しめゆひしひともとの
　外にこゝろはうつさゞらなむ

君をおきてあたし心をわかもたは
　末のまつ山なみも越えなむ

とあり。實に以つて、夫婦の心に移すべきなり。

然るに、一朝結婚の式を擧げし後、わが妻より

も、他に良きものあり、故に、離婚すべし。或は、わが夫よりも、他に勝るものあり、由つて離婚せんと思ふものは、あだし心のある人なり。凡そ、物は比較的のものなり。若、比較上より言はゞ、千尋の海も深しとするに足らず、萬丈の峯も高しとするに足らず。されば、夫婦は、天下に於いて、最も秀でたる夫、亦は妻を得て、始めて幸福とせんか。數の上より言へば、僅に、一對の幸福なる結婚あるのみにして、他は悉く、幸福ならざる結婚と言はざるべからず。思ふに、幸と不幸とは、我が精神と我が實行を以つて、相岐るゝもの多し。見よ、夫婦相和し、相親みて、家庭を作らば、期せずして幸來るべし。

おのれの恒に、我が日本帝國に取りて、耻辱と信ずる所は、離婚の最も多きにあり。即、結婚して、一旦、戸籍に登りし上より數へば、年々離婚者の數は、拾壹萬を過ぐるとかや。其は、結婚せしものゝ、約三分の一に當れり。況んや、實際上結婚せし後、數旬にして、未だ戸籍を變更せざる間に、離婚せしものを加ふれば、幾何の離婚者あるかを知るべからず。これ、如何なる原因ありて然るか。亦、これを救ふ方法なきか。おのれ等女子たるものは勿論、男子たるものも、思はで可あらんや。

されば、斯る離婚の多きを憂へ、これを救はんとする説種々あり。即、或は曰く、先づ、西洋の如き風俗を作り、以つて、男女交際の機會を作り、其の未だ結婚せざる前に當りて、豫め、男女相互の性行と、氣質とを知り、また、將來の理想とする所を尋ね、徐に、結婚を議せむも可ならん。或は曰く、わが國に行るゝ離婚の原因は、婦姑同居するのみならず、婦たるものは、其の親兄弟姉妹及び、親戚の滿足をも求めざれば、安堵すべからず、こ

れ、離婚の原因なりと。これ、一理なきにあらず。唯、男女の交際を實行する方法と、婦姑別居の理否如何とを定むるに苦むのみ。抑、男女の交際は必要ならんも、我が國の如く、公徳未だ進まず、男女相互に交際する道則かならざる時代に於いて、直に、男女の交際を自由にせば、恐るべき弊害を生ぜん。加之、血氣盛にして、一切の動作、唯感情のみに依りて、支配せらるゝ間は、決して、自由に配偶者を撰擇するに足ると言ふべからず。故に、漸次に、養成と進歩とを待ち、公明正大なる交際をなすに至るまでは、充分なる監督の範圍内に限り、交際するも可なり。益、往時わが國の普通に行はれし結婚は、頗る、懇に身分と性行を相正し、容易に決せざるを以つて、比較上好結果ありしのみならず、離婚は、大なる耻辱と考へしかば、今日の如く、輕々しく行はざりき。然るに、目下の趨勢は、結婚の容易なると同時に、離婚も容易なり。故に、大に戒めざるべからず。唯、婦姑別居も、家族制度の國なる上に、生活費と大なる關係の存するを以つて、直に實行すべからず。依りて、婦には、舅姑に事ふる道を敎ふると同時に、舅姑たる人にも、新夫婦の心を察し、上下圓滑なる家庭を作る外なかるべし。蓋、完全なる敎育を受けし人が、異日、自ら舅姑の位置に立つ曉に至らば、同情の念も強くなるを以つて、今日の如き、風波は起らざるべし。要するに、我が現今の文明は、未だ、内外の調和を得ざる時代なれば、種々、困難の所あるは免れず。依りて、其の適當なる方法を講じ、順路を示すは、先覺者の任ならん。なほ、男女交際の方法等につきては、稿を改めて述ぶべし。

健全なる家庭

岸田松二郎

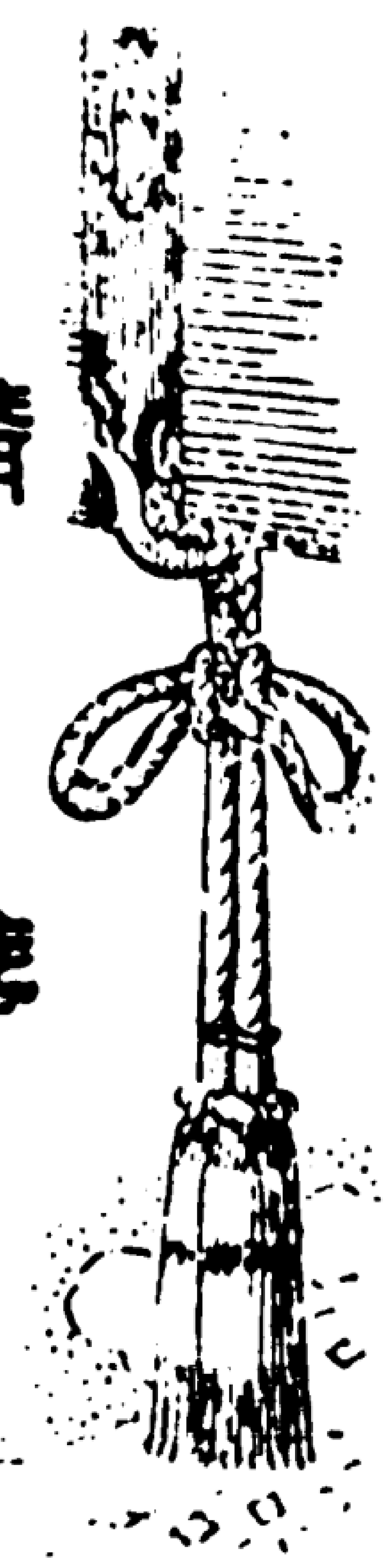
鷄鳴晨を告げて、東天紅を染め、瑞雲靉靆として、乾坤是新なり。千門の日章、翩々として仁風に翻へり、萬戸の蒼松、鬱蒼として繁榮を衒ふ。家族は、渾然として食膳を擁し、椒酒相酬いて、歡聲四隣に傳ふ。嗚呼、是二十世紀に於ける、第二新春の光景なり。惟ふに、讀者も杯を擧げて、我皇の萬歲を祝し、又、其の家庭の健全福祉を祈るあるべし。嗚呼、夫れ、家庭の健全、如何にして得らるべきか。嗚呼、此の家庭の福祉、如何にして求め得べきか。食膳方丈の多きを累ね、侍妾數百の多きを致す、是果して、家庭の福祉あるか。車馬門に待ち、高甍高く啄むもの、即、是家庭の健全を表するか。否、予輩は、家庭の健全、家庭の福祉なるもの、果して、這般の裏に存することを斷言するに、躊躇するものあり。所謂名門右族の家、必ずしも、家庭の清雅を斷ずる能はず。妻妾相鬩ぎて、寵榮を計り、令女令息互に相對峙し、私利を營み、閨門の權勢、或は妾に歸するの時あり。或は、妻に屬するの時あり。一勝一敗未だ決せざるに、醜聲既に内に傳へ、家運茲に傾きて、債鬼の壟斷に委し、空しく榮華の昔を歎じて、涓滴の涙、襟袖を濕し、天運の非を喞つもの、盖其の例尠からず、一代の運命順に來り、年々歲々餘贏を積み得て、家計俄かに巨萬を致し、紳士と呼ばれ、富豪と尊ばれて、社會の上層に立つや、家督益繁榮して、別墅は處々に營まれて、或は、炎々たる暑熱を海濱に避け、或は、凛々たる寒威を暖地に凌ぎで、終歲寒暑の身に及ぶを知らざるもの、洵に是、物質的の幸福なり。然れども、一

たび其の内情を窺ひ見ば、即ち、妻の子は、身に奉ずること厚けれども、妾の子は、全く之に如かずして、貧寠の子女にも如かざるものあり。妾の子は、奉養王侯の如くにして、妻の子は、市井の兒女に如かざるものあり。均しく一家の姉妹、一族の兄弟なるに、其の睚眦の状、仇讐の如く、其の情の疎なる胡越の如く、淡々なるもの甚だ尠からず。室家の怨嗟、須臾も之を忘るゝなきこと此の如くなる時は、身に綾羅錦繍を纏ひ、口に山海の珍味を味ふも、其の精神的快樂、果して何くにあらんや。縦ひ、大封家の閥門閲を濫し、或は、物質的幸福の極にして、歴世の感に打たるゝの餘、煩悶自から遣るの地なく、病魔是がために侵して、身を鴻毛の輕きに擬しもの、頻々として、吾人の耳朶に上れり。數へ來らば、此等彝倫の大綱たる室家の秩序、茫然として亂麻の如く、子、其の親を弑し、弟、其の兄を酖し、主人、酒色に沈溺し、主婦、淫猥に狂するの類、新紙に傳へて、殆ど虚日なきもの、抑また、何の故ぞや。蓋、家庭の健全ならざるがためならずんばあらず。予輩の所謂健全なるものは、家族其の人々等の、身体の健全を意味するにあらず。家庭の情交、秩然として濃厚を致し、精神的の快樂は、春光の花を醸すが如くなるを意味するなり。今夫れ、人体健全の素因如何と云はゞ、内部の諸機關相調和して、序次を亂さず、筋肉相結んで、能く頭腦の命に從ふより來る。健全なる家庭の状態如何と問はゞ、是亦、一家の男子主腦となりて、部下に屬する族人を統理し、長幼の序次、確然として相戻らず、人々、個々の情誼濃厚にして、禍福を共にし、手足相呼應して、家長統理の下に、敢て、怨嗟の聲なきをいふなり。凡そ、吾人が快とする所のものは、極

種あるべしと雖も、要するに、肉體と精神との二途あるに過ぎず。而して、其の最も當然にして、且、永久的の快樂を求めば、必ず、指を家庭の快樂に屈するなるべし。德義の圓滿にして、先天の如き人は、紛亂せる家庭の產物にあらず、心胸恢宏にして、博愛天の如き人は、必ず、健全なる家庭より來り、社會を快樂の宿所として、事を娛しむものも、亦、是家庭の健全に根基し、厭世觀を抱いて、失望不平に沈淪するものは、必ず、冷情淡想の家庭に長じたる人なり。不平觀を有する人は、常に順境を見出すを得ず。快樂觀を抱ける人は、逆境に落つるも、猶且、坦然として益奮勵す。されば、快樂ある家庭の中に長ずるものは、終生の福祉を享受すべき素養を受くるものにして、家庭の健全は、將來、國民の幸福を增すべき一大源泉地たり。

今や、三十五年の春を迎へて、家毎に家族團欒し、老幼壯弱食卓を圍みて、藹然たる笑聲紙窓の外に和し、賀客去來して、滿目和氣ならざるなし。嗚呼、不健全なる家庭、焉ぞ、此の春を迎ふるを得んや。紛糾せる家庭、亦將た、此の情味を味ふことを得んや。嗚呼夫れ、女子は家庭の中堅にして、又、情味の源泉なり。適に椒酒相祝し、松竹榮を衒ふを視て、家門の繁榮隆昌を願はゞ、女子たるものは、深く思ひを是に潜めて、家庭の健全を計らざるべからず。されば、予輩は、將に本誌の餘白を借りて、家庭に於ける卑見を吐露し、以つて、大方の高教を乞はんとす。





精華

日本女訓（未定草）

川崎重陽

四十七、およそ、一家とは、戸主の保護をうけて、そ族人の、一所に生活するをいふなり。さて、その戸主なる位置は、遠く、先祖より受けて、また、これを永く、子孫に傳ふべきものなれば、主婦たるもの丶一家の上につくすべき本分の重きことも、おのづから知らるべきなり。人の妻たるつとめは、たゞに、夫に事へ、子女を養育するのみにては足れりといふべからず。よく、家風をうけつぎ、ますく\、之を顯揚するこそ、我が國風にはあるなれ。

四十八、我が國は、臣民、皆、同じ祖先より分れ出で丶、世々、大宗家の正統とまします、萬世一系の　皇上を奉戴し、限なき御惠の下に生活して、世界に比なき國體を保てり。國と家とは、大小の差こそあれ、その成立、全く、相同じ。されば、一家の風の如何は、やがて、國體の上にも、影響を及ぼすべきなり。主婦たるものは、常に、之を思ひて、夙夜怠ることなかるべし。

四十九、一家、よく齊はゞ、國も、また、おのづから榮ゆべし。皇國に生をうけたる女子は、皇國の風にしたがひ、各、定まりたる本分を盡して、よく、その家をとゝのへ、和樂淸健なる家庭を造り成して、國家の基を鞏固にし、國體の美を發揮せんことをつとむべし。女子の忠

孝、これに過ぎたるはなし。　い（中編をはり）

加藤縫子

指原乙子

縫子は、越前國福井藩士二岡某の女なり。幼き頃より、父母に仕ふる事柔順にして、よくその教に従ひ、長ずるに及び、益々温和にて、容色さへ美しかりしかば、終に、同藩士加藤等虎にむかへられて、其が家に嫁ぎぬ。

これより、いよいよ婦徳を修め、身を愼みて、夫にかしづきしかば、一家の内いと睦じく、程なく長男正敏、次男忠虎、及び、長女ともに、三人の子さへもうけしにぞ、そを教へ導くことに、只管心を盡し、自ら守ることいと正しく、假にも僞り欺くことなく、慈愛深き中に、正しき道を守りしかば、皆よく、その教に従ひ、長ずるに及びて、終に篤行あり。さるに、等虎は、不圖病を得て、終に殁りしかば、縫子が悲歎いはん方なく、厚く之を葬り、之より益々心を勵し、三子を教養することに勉めしにぞ、親戚知人は言ふに及ばず、召仕ふ者どもに至るまで、縫子を敬はざるはなかりき。

やがて、正敏には、小宮山某の女を娶へ、忠虎は、同藩津田氏を嗣がしめ、長女は、渡邊某に嫁がしめぬ。正敏の妻も、亦よく、縫子に事へ、むまごどもゝあまたもうけ、一家は、いよいよ榮え行きぬ。正敏は、拔でられて、勘定奉行となりしが、よく人を用ゐて、其の宜しきを得たりしかば、一藩の内に重んぜられ、且、客を好みしにぞ、日毎に出で入る人もいと多きを、縫子は、いたく欣びて、自ら率ゐて、よく饗せしかば、皆親しみなつ

きけり。又、貧しき者を憫れみて、或は肉類、或は菓物等、折々の物に心をつけて、路の遠近を問はず、屢、恵み與へしにぞ、或人そをいさめしかば、縫子は、唯ゝ笑みて、「凡そ、天地の間に生を受けし身の、誰かは、必しも福に、必しも禍のみあらん。只、其の一時の幸不幸のみ。妾、今かゝる不幸の人を憐むこそ、此の上なき樂しみなれ。」とて、ますゝゝ愛憐を加へしかば、その慈善の名は、遠方近方に聞へぬ。

忠虎は、御側用人より進みて、御供頭となり、こも亦、一部の長となりて重く用ゐられ、數里を隔つる所に住みしも、日毎に母の起居を訪ひ、數十年來、一日も怠りしことなく、正敏は、家に在りて、如何なる宴席に赴きし折も、歸れば必ず母の傍に至り、笑談諧謔、一家和氣靄々として、春の如く、兄弟、各、其の母に仕ふる事異ありて、而も皆、孝を以って聞ゆ。こも亦、母の敎育よろしきにより、かく各、榮ゆるにやと。人皆、語り傳へけるとなん。

縫子、壽七十八才を保ち、明和六年十月九日卒す。即、松岡邑寶岸寺内の、等虎の墓に合葬す。法號を貞春と云ふ。其の碑銘に曰く、

婦徳母義。於外有光。家門雍穆。範諸義方。孫曾所蔭。錫類連號。奉承如在。家聲永長。

と、古人曰く、仁母は、慈祥を以って子に敎ふる者也。一つに陰徳を念ひて、萬姓に及ぼすと。縫子の如きを謂ふなるべし。





家庭叢談

男爵　石黒忠悳

○金を以つて購ふ樂みは、金の竭きると共に盡きる。又、金がなくては得られない。是は、ツマリ金を樂むもので、樂みを樂むものでない。區域の隘い、基礎の危い、趣味の乏しい、さうして、永く續かない樂みは、所謂、浮雲だ。槿花だ。予は、コンナ樂みは眞平だ。

○拙宅では、晩餐後、家族相團まり、彈くものは彈き、謡ふものは謡ひ、談るものは談り、遠慮なく愉快に其の日〳〵の出來事を話し合ふのを、唯一の樂みとして居る。緑酒紅燈も羨ましくはない。金玉寶什も、迚も、この清福には代へ難い。人生の至樂は、兎角、家族團欒の裡に籠つてゐる。

○所謂紳士といふ人々に、よくないところに出入りしないものは無いといふ事だ。何といふ了簡だらう。女中が、ヒョイと頭を垂げると、モウ一圓、女將が入らつしやいとお世辭を播けば、モウ十圓、二十圓や三十圓の金は、咄嗟の間に飛んで了ふ。其の上、罪も無き細君や、小供をして、父樣は、今晩もまた徃つた抔と憤らせる。これで、一家が圓滑に治まらう筈はない。家庭敎育抔といふ事は、思ひも寄らぬ話である。

○予の子息は、昨年、尋常中學を卒業し、今は高等學校に這入つて居る。本郷高等學校に通學させるのは當り前ぢやが、考へて見ると、東都の學風

は、どうも、青年の修學に適しないで、予は、子息をば、特に田舍に遣つた。鹿兒島の高等學校に遣つて置いた。

◎分を知り、分に安んずといふ事は、處世上忘るべからざる金言である。三井は、三井の事を盡るべし。石黑は、石黑丈けの事を盡す。是で滿足するといふのは、予が家憲だ。石黑の身で、岩崎三井の生活に擬するやうでは、夫れは大變だ。何でも人間は、其の分に應じ、其の職に忠なるべし。身分不相應の事をすると、屹度善い事はない。

◎今日の敎育家は、非常に德育といふものを重んじ、學理上餘蘊なきまで硏究して居る。夫れは、別段惡い事ではないが、サテ其の實行如何と問ふと、醜陋暴慢、聞くに堪へざるものがある。學說と實踐とは、いつも反對の方向に向つて、進んでるやうな氣がする。一體、德育杯といふものは、推理よりも、躬行の方が大事だ、躬行の出來ぬ道德なら、硏究しても、一向難有くはないと思ふ。

◎停車場に往つて見ると、赤切符を持てる男女の學生輩は、臆面もなく、上等待合室に踏み込み、新聞を見たり、煙草を吹つたり、傲然談笑するのを屢見受ける。何といふ惡習だらう。下等客なら下等室に居るが可い。下等切符で上等室に入るといふのは、己を欺き、又人を欺くものである。每日、倫理道德の敎を授つてる學生にして、此の事あるは、言語同斷の至りだ。歐米ではかういふ者をば、盜賊同然に看做して居る。

◎予は、古武士の家制を望む。貧乏公卿の生活は、望ましくない。昔の貧乏公卿といふものは、出來ぬまでも外觀をかざつた。然るに、武士の方は、家計裕でも、戰時の準備懈るべからずとし、勤儉に勤儉を加へた。一は、偃然虛勢、他は、餘力綽

緯として、いつでも運用自在だ。手車に乘るは可いが、火の車に乘るのは困まる。一家を治むるに就いても、國家を經營するに方りても、予は、是非、後者の心得で遣りたいものと思ふ。

育兒衞生談

久利軍醫

緒論

抑、小兒を育てます事に就きましては、始めより衞生と申します事に注意しませんと、トンダ結果を來しますからして、小兒を保育する任に在りますものは、よく、育兒衞生の大意を知らなくてはありませぬ。ナゼかと申しますに、小兒成人後の、健康なると薄弱なると、社會に立つて事業に從ひ、熱心なると冷淡なると、或は、名譽を得ると否とは、總べて幼少の時の發育に、悉く關係するからであります。小兒の時に注意行屆き、健全なるものは、終世その健康を保ち、一種名狀すべからざる愉快を有する次第であります。且、小兒は、後來吾々の相續者となる者なれば、その健否は、小にしては一家の繁榮、大にしては一國の強弱に、影響を來すことにもなりますし、又、文明の程度進歩するに從ひ、世の中は、一層複雜になりますからして、腦力や軆力を、強健になさんければなりませぬ。故に、小兒の衞生法は、益々必要ある所以であります。然らば、小兒衞生を守るべきは、幾歳迄であるかと申しますに、先づ、一般小兒の時期を三つに區別します。乃ち第一期は、一歳未滿、第二期は、一歳より六歳乃至七歳まで、第三期は、七歳より十五六歳までと致しまして、此の三期は、小兒の衞生に屬する範圍であります。小兒の時に

は、僅かなる事にも感じ易く、成人に較べまするど、著るしく害を受けますからして、何時でも、他より、十分保護して遣らなくてはありませぬ。又、小兒の疾病は、不注意より起りますのが多くありまして、よく注意さへすれば、概ね、豫防することが出來るのであります。さりながら、注意の方法を知らないと、滿足に出來ませぬ。夫れから、其の方法とは、即、衛生法でありまして、保育者たるものが、常に正しく手當を施し、疾病を豫防して、完全なる成育をなさしめんとするのは、乃ち、小兒衛生の目的であります。

育兒衛生上、小兒健康の有樣を知ることは、國家的にも個人的にも必要でありますが、我が國に於いては、また、其の生死並に原因等に就いて、完全なる統計が見えませんが、小兒衛生の發達せる歐洲學者の調査に據りますと、小兒の强弱存亡は、概ね、左の數項に歸する樣に思はれます。

第一●● 小兒の出産數は、平均千人に付き、三十三人の比例でありまして、國運の進むに從つて其の數を增し、退運に從つて減ずるといふ事が、統計上に現はれて來るといふ事であります。又飢饉とか、物價不廉の時とか、商業の鬱滯せる時とか、或は戰爭抔のあります時には、出産數は減ずるさうであります。

第二●● 小兒の死亡數は、出産の多少には關らぬのでありまして、若し、出産の數多くありましても、死亡數著るしく增加しますときは、小兒の數といふものは減少します。

第三●● 小兒の死亡數は、また年齡に關係します。クエステルレン氏の調査に據りますと、老少死者の數は左の如くであります。

零歳より十五歳まで	千人に付	英國	四二五人	日本	三四七人
十五歳より卅歳まで	同	同	八五人	同	一〇一人
卅歳より六十歳まで	同	同	二三〇人	同	二四五人
六十歳以上	同	同	二六〇人	同	三〇四人

第四　小兒は、外來の氣候に感じ易きものであります。それ故、その死亡數は、氣候に關係を持つて居ります。我が邦には、八九月の頃が、最も多くあると申すことであります。

第五　それから、都市と田舍との關係は、如何であるかと申しまするに、都市は田舍よりも、小兒の死亡の數が多くありまして、且、都市も、また人口の多き程、小兒死亡の統計は、其の數を加へますこと、左表の如くであります。

	生後より五歳まで百人に付死亡數(我國の統計)	生後より十歳までに付死亡數(英國の統計)
都市	三十三人、六〇	五十一人、三九
田舍	二十七人、二八	三十五人、四五

人口	都市 二萬人以上	都市 二萬人以下	田舍
死亡數百人に付	五十一人、三九	四十一人、七九	三十五人、四

第六　又、貧富及び職業に對する關係は、カスペル、クライニ氏の調査に依れば、左の如くであります。

貧富の關係	富者	貧者
生後より五歳まで百人に付死亡數	五人、七	三十四人、[illegible]

職業／生死	小兒一年後の生存者	小兒十年後の生存者	十年間の死亡
富者	百人に付　九十人	同　八十人	同　二十人

商家	同	七十九人	同五十六人	同四十四人
職工	同	六十八人	同三十八人	同六十二人

第七　兩親の健否に對する關係を見るに、父若くは母の飲酒家なるときは、其の兒は薄弱でありまして、死亡數も多くあります。又、腺病家、肺病家、梅毒家並に血族結婚も、矢張、薄弱の兒を產みまして、其の死亡數を增加しますからして、是等をよく考へまする と、子孫の爲に、兩親たるものは、頗る注意せんければなりませぬ。

第八　次に、小兒の兩性の關係を見まするに、男兒は何れの國に於きましても、女兒より死亡數が多く、又、難產のものが多くありますからして、自然、死亡數を增すといふ有樣であります。夫れ故、近來に至りては、女子の職業教育問題が起りて來ました。

第九　養育の善惡に關する死亡統計は、左の如くであります。

小兒の種類	百人に付死亡數	母乳	牛乳	其の他代用品
公生兒	七人、四	七十八人、七	四十二人、一	百廿九人、七
私生兒	十一人	——	六十三人、三	百廿八人、九

	死亡數百人に付一年平均數
母の養育せる者	十八人乃至三十人
他人に托し養育せる者	三十六人乃至四十八人、三

又、或國に於いては、他人に托し養育せるもの、死亡數は、百人に付き、七十五人に達せしものありとのことです。

第十　夫れから、住居の關係は如何と考へまする

と、小兒は、空氣、濕熱、濕氣、光線等に感じ易くありますからして、若し、住居不良なるときは、死亡數の增加する原因となります。故に、家屋抔は、成るべく清潔に、且、換氣や光線の射入を良くし、濕氣を防がなくてはなりませぬ。

以上申述べました通り、小兒の存亡健否は、種々の原因に由るものであるが、然らば、其の死亡するのは、何病に多きかといふ事は、是非承知せねばならぬ事であります。之を解すると、從つて、其の豫防も出來るといふ次第でありますから、簡單に、之を左に說きたいと思ひます。

第一稟賦の薄弱 であります。之は前にも陳べました通りで、其の生存します者は、百人に付き、十人乃至十二人の割合であります。殊に、この薄弱なる小兒は、全小兒中二十人に付き、一人の比例になつて居ります。之を以つて考へますると、實に、その原因に就いては、最も注意せんければなりませぬ。

第二胃腸病 にて、死亡するものが多くあります。病兒百人中、三十一人迄は、この胃腸病であつて見ると、三人に付き、先づ、一人の比例でありますから、隨分多い譯で、その死亡は、十人に對し、一人の割合になつて居ります。飮食物の性質、度數、分量等に意を用ゐ、輕忽に流れざる樣注意することが、肝要であります。

第三呼吸器病 も、亦た多くありまして、小兒百人中、此の病に罹るものが二十四人、その死亡は、十人に付き、一人の比例であります。この病は、氣候の變化によく注意し、少しにても咳嗽などあるときは、速に、手當を施すときは、豫防する事が出來ます。

第四傳染病 に罹るものは、頗る多く、小兒の病

者百人の中、十人は此の病であつて、且、死亡するものも中々多くあるから、切に猛省を要する次第であります。その主なるものは、實扶的里亞、痲疹、百日咳、猩紅熱、小兒丹毒等でありまして、其の他、痲病毒の爲めに眼を失ひ、乳房の清潔を怠りし爲めに、鵞口瘡に惱むものも尠なくない。

第五病(俗にルイレキ)骨軟化病等も、亦、小兒死亡の原因をなすものであります。

右に述べたる疾病に就いて考ふるに、出産後の薄弱なる者を除きては、大概、衞生法の力に依つて、之を豫防することが出來るのであります。されば、世人が、衞生と申すことに十分注意したならば、小兒の死亡數を減じ、愛を殺ぐの悲みなきのみならず、却つて、國家有要の人材を造り出し、國運進歩の基礎を固むる譯であります。故に、此の問題は、決して、醫學上の問題のみとは思はれませぬ。其の結果たる、極めて重大なるものであります。

禮節談片(續)

石井泰次郎

近い例證をあげて示さうならば、子爵織田秀實君の御婚禮の一樣でも、御分りになるで有らう。、禮節の本意には、秘法だの秘傳など稱して、正しき事をとはれた時に、答の出來ぬゝけ道を作つて置くやうな事は、古より無い。有ると思ふのは、正しく無い小笠原流といふやうな、禮法一つを的にして云ひあてた詞に見えるが、今は、其の樣なまとをねらつて、一矢いる樣なむだ事をする人も無い、大御代であらう。もしあつたならば、其の

人を笑ふ事は出來ない、かへつて、かくねらはしめたる、或者を叱りてらさう。此の秘法秘傳を、いまだに守つて居る者は慥にある。さて、秘法秘傳の如何を知る者は少くして、其の秘法秘傳にまよはされて居る者は、甚だ多い。それであるから、禮法と云へば、一も二もなく虚飾にはしつて居る事と、世上の人は思ふのである。實に其の通りであると云ひたいが、さうは參らぬ。夫は、一の虚禮の首領である現今の小笠原流と稱して、伯爵小笠原家に關係のない者が立てゝある教授法が、一大源因で、其の他に、近世の小笠原流の地方流に傳はつて居るのも、夫に附屬て居るばかりで、眞實の所は、其の虚禮といふ事を耳にする事も出來ない禮法が、存じて居るからである。

まづ、其の論は追々として、時も春に向つて居るから、何か目出度い事を云ふて見やう。そこで、御婚禮の一端を話しませう。

御式は、宮家より華族への御婚禮であるから、一つ、後々の例證のためにもならうと思つて、進んで、宮家風の實用の根本を調進したのである。三獻の膳部は、古例からぬきとつて、御臺、打敷、衝重といふ用意で、

御初獻

伸蚫　御酢

御箸

海月　鹽

として、伸蚫、海月をクボツキに盛りて、向におき、御箸を、耳土器にのせて、眞中に横たへ置きて、酢と鹽とを小土器に盛りて、御前の方に置いたのである。

御二獻

鯉

鯛として、白のヒラッキに、梅重と、まつ重の搔敷をして盛りて、御前にすゑたのである。このとゝのへ方がよい、又、此の時の給仕方がよいと云へば、夫は、我田引水であるから云ふまい。又、云ふほどには、恥しながらよくは參らぬのである。けれども、この位の御式には、此の位の程度といふ事は、式者の知るところで、膳部調進の方は、其方にならびて、共に其の程度を斗らひて、無用の虚飾なくして、實用の方につきて、其の法式をわやまらず調進し、式者は、無用の虚禮を除きて、實用の法式を亂さず、といふのが、即、禮法の本意である。

から申しても、定めて御分りはあるまいが、是を無用な虚飾を專一として居る、即ち秘傳秘法に由りて、其の惡しき、否、其の奥のなき事を覆ふてゐる先生の、虚禮、即小笠原流の仕方に合して見ると、直ちに、はゝあ、是が實用の仕方である。小笠原と單に云うて居る者は、虚禮虚飾で固つて居るわい。と云ふ事が御分りになるであらう。

も一つ目出度い嘉例を話しませう。禮法といふのは、禮節教師は、家庭の起居進退、物品取扱、諸祝儀式などの事を教授するのである。其の他に、色々の道々の事を敎ふる者ではない。故に、其の起居進退物品取扱や、諸祝儀についての故實を正して、其のもとをたがへぬやうに、即、君へ對するに、下輩に對するの禮を以つてする事なく、ずるのが本意である。此の本意をたがへぬほど目出度事はない。

そこで、其の目出度い本意にかなつて居る、禮節談を春ながに、やさしく話して見やう。下輩に對

するの禮を以つて、君に對して居る、小笠原流の目出度ない話しは、なるたけ申すまいと思ふて居る。禮法敎授法について居る花結や、包物のやうな、女々しいのを話さうと思ふて居る。

正月のだいどころ

大塚すみ子

近頃は、すべて、名刺葉書などにて、年頭の御祝儀を濟すやうになりたれど、さりがたき親族、または、日頃、しげく往來なかには、まづと、座敷に請じて、お屠蘇一献とすゝむる場合もなきにもあらねば、鳥渡、手がるに、誰にも出來得る正月の料理を、左に。

口取（豆きんとん　かまぼこ　だてまき）

すのもの（なまこ　うど　ぼうふ）

すひもの（かも　みつば　松茸）

うま煮（とり　はす　ぎんなん　くわゐ）

一、豆きんとん

豆きんとんの製法は、先、上等いんきん豆を、一晩水にひやし置き、鍋に入れ煮えたらば、しはのばしの水を入れ、再び、にえたゝば、湯をこぼし水を取かへる事兩三度にて、よくやはらかくなりたらば、凡そ三分の一を取おき、のこり三分の貳をなべにのこし、砂糖に、しほ少々を入れ、よき程になま味しみたる時、前の三分の一の豆を、すり鉢にてよくすり、うらこしにかけて、それを鍋の内に入れ、よく混合すれば、口取の向山となる。

（かまぼこの製法は略す）

二、だて卷（玉子十五　そばつゆ二合程　魚のすりみ（玉子の三分一位））

まづ、魚のすり物をすり、うらこしにてよくこし、

其の中に、玉子一つ二つづゝ、すりながら入れ、猶、そばつゆを入れ、再びよくすり、まざりたるを、焼鍋の中に入れ、七輪へ火を十分におこし、直接に火の上に焼鍋をおかず、両際へかい物をして、空氣の入る様にし、さて前の火を、一つも下に置かず、皆とり、また、鍋のふたをせずに、鍋の上三四寸位おき、これも、鍋より空氣の入る様にして、前におこし置きたる火を、程よくならべ、焼きあげたらば、すだれにてまき、ひもにて、しかと結ひおき、しばらくして、小口より切り始むべし。(猶、味をよくせんとには、前の如く巻きたるまゝにて、そばつゆにつけて切始むべし。鳥渡、風味よろし。)

三、すひもの

例の如くに、だしを取り、かすをさり、鍋に、みりんか酒か、少しばかり入れ、ふたをして、にえたちたらば、前のにだしを入れ、(醤油鹽にて味をつけ、まへの、みつば、松茸、鳥等の種にて、鳥渡、手がるのすひもの出來るなり。

四、うま煮

鳥は、鴨にても、他の鳥にても、味淋、醤油砂糖にて、よき程にあぢをつけ、うどは、かはをさり、長さ随意にきりて、だし味淋醤油砂糖など、あぢよく煮あげ、れんこんは、かはをさり、はすに四五分位の厚さに切り、たてに、まん中を切り、それを丸くむきて、ざつとゆであげ、前とおなじく、あぢをつけ、慈姑も、ゆで、おなじ様にあぢをつけ、きんあんは、ゆで、鳥渡あぢをつけ、さて、皆煮あげたらば、それ〴〵うつはにもるべし。

だいどころ

ケンチン巻

豆腐の水を去り、鍋に湯を煮たゝせ、其の中にい

れ、煮えたちたらば、笊にあげて、湯をしぼり、味淋醤油にて鹽梅し、能く煎り、これを裏漉にかけ、鶏卵を割りていれ、つなぎにおし、中にいれる種は、人參、きくらげ、はす、牛房杯、こまかにきざみ、味をつけ、豆腐へ交せて、板の上に、ぬれ布巾をしき、紙湯葉をのせ、其の上に豆腐をおきて、能き程に卷き、蒸籠にて蒸し、これを、鶏卵燒に油を引き、いためて後、味淋、醤油にて鹽梅し、煮たてたる汁を、まはりにつけて、用ゐるべし。

鳥團子

何鳥にても、骨と皮とを去り、肉につきをる筋をとりて、こまかにたゝき、すり鉢にてすり、食鹽味淋を加へて鹽梅し、裏漉にかけ、能程にまるめ、二番の煮汁の、煮たちたる中にいれ、浮上ればすくひあげ、椀に盛り、花菜杯添へて、煮汁の鹽梅したるものをそゝぎ、出すべし。

蠣のオムレツ

蠣をこまかにきり、其の中へ、鶏卵を割り、能くかきまはしていれ、胡椒をふり、食鹽を加へ、味をつけ、燒鍋にて燒くなり。かたきオムレツを好む人は、蠣をきざむ前に、布巾にて水氣を去れば、かたく出來るなり。

鶏卵製鱠

鶏卵をゆで、水に浸し、冷して、白身をとりて、黄身計を摺鉢にてすり、食鹽に少量の酢と、サラダ油を加へ、能く摺り交せ、これを鉢にとり、こまかに刻みたるサラダと、湯煮したる白魚又は、芝鰕杯、前の白身を、さいの目にきり混せて後、三十分を經て用ゐるべし。



學　藝



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(二十六)

人のつぼね〳〵には、おほきやかなるふくろつゝみども、もてちがひ、からぎぬ、ぬひもののも、ひきむすび、らでん、ぬひ物、けしからぬまでして、ひきかくし『あふぎ、もてこぬかなど、』いひかはしつゝ、けさうしつくろふ。

釋義

この一章は、女房達が、さきごろより、御産の混雑にて、局の取かたづけも、ろく〳〵せず、化粧などもすることなかりしが、御産も御とゞこほりなく、めでたくすみしゆゑ、いづれもいさみて、おのが局々にかへり、取かたづけものをもなし、ひさしぶりにて化粧などをもして、甚、せはしきさうへに、また、御湯殿の支度にもとりかゝれる狀なり。

○人のつぼね〳〵、　女房たちの部屋〳〵なり。

○おほきやかなるふくろつゝみ、大なる袋包は、衣服など入れたる、とのゐ袋の類なるべし。

○もてちがひ、　あちら、こちらに持ちあるく狀なり。

○からぎぬ、　婦人の禮服の上に着る、すそのなきあはせのきぬなり。枕の草子に、そのわらはの着るやうに、なぞ、からぎぬは、みじかき衣とこそいはめ。されど、それは、もろこしの人のきるものなれば、うへのきぬのはかまは、さ

ひ給へし、など見ゆ。
○ぬひものゝも、　種々の縫物をしたる裳なり。裳は、をんなの腰につくるものにて、からぎぬの、したばかまの上に着くるなり。
○ひきむすぶ、　腰に結びつけたるなり。
○らでん、ぬひもの、　らでんは、螺鈿にて、青貝を摺りつけて飾とせるものをいふ。こゝは、ぬひものに青貝を入れたるなるべし。
○けしからぬまで、　けしからぬは、もと、異しくはあらぬにて、異様ならず、悪くはあらぬの意なり。しかるに一轉して、異様なり。悪しくありの意に用ゐたり。こゝも、すなはち轉せる方の用法なり。おぼろけならずに、を、略して、おぼろけに、と、いふと同じく、けしからぬは、異しからぬにあらず、の、略ならん、と、いへり、こゝは、さまでに甚しく、りつぱにせずともよろしかるべきに、目にたつ程、かざりに念を入れたりとの意なり。
○ひきかくし、　異様に見ゆるまで、ぬひものゝ内に、青貝などいれたる裳を以つて、女房たちが、腰などをひきかくしたるなり。
○あふぎもてこぬかなゝど、　かねて、あつらへ置きたる扇を、まだ持てこぬことよ、早くもてこよかし。などいふ意。前文に、あふぎどもの、をかしきを、そのころは、人々もたり、と、見えたるごとく、各、意匠をこらしたる扇を、さそひて、もてあそびたるなるべし。
○いひかはしつゝ、　女房たちが、たがひに、言ひ合ひ／＼してなり。
○けさうしつくろふ、　紅白粉などつけて、化粧し、身仕舞することなり。

このごろぢうは、御産の御事にのみかゝりて、部屋をかたづくることも、化粧をするひまもなかりしが、めでたく御安産わらせられしかば、よろこびいさみて、おのが部屋〳〵に歸りきたれり。されば、その人々の部屋〳〵には、大きなる夜具の袋や、衣服のつゝみどもを、わちら、こちらに持ちあるくさまいそがはしく、かつ皇子の御湯殿の御支度もあれば、女房達は、リッパなる唐衣(からぎぬ)に、種々(いろ〳〵)繡物(ぬひもの)したる裳など腰に引きむすび、または青貝のいりたる繡物(ぬひもの)したる裳をば、甚しく、目だつ程(ほど)に着かざり、または、とくに、おつらへおきたる扇を、いまにもッてこぬか、はやくもッて來よかし。さても、まちどほし。

など、くち〳〵に云ひかはしつゝ、化粧して身仕舞(みじまひ)す。

漢文學講義

佐々木天遊

亡妻川島氏墓表　林鶴梁

亡妻川島氏。名久。號二小香一。江戸人。達馬君第二女。年十六。歸レ余。性婉順。習二詩書一。善二女工一。與レ物煕然無レ牴。事二舅姑一克孝。治レ内克勤。昔余少時游蕩。年二十四。折レ節讀レ書。氏毎曉。先レ余起。洒掃畢。鴉乃啼矣。一日風雪寒甚。余在二臥褥中一。欲レ枕仰見。氏置二火盆於案側一。端坐待二余起一。其勤苦率此類。嗚呼。以二余之疎懶一。尙能至レ今。得レ不レ爲二一二名流所一レ擯棄一者。以レ有二氏之劼助一也。産二三男一女一。曰レ鈞。曰レ鋼。女未レ笄死。晩更産二一女一。夭。氏亦以二是日一卒。悲夫。實某年某月某日也。時年三十三。葬二溜池澄泉寺一。

亡妻(ばうさい)川島氏、名は久(ひさ)。小香(せうかう)と號(がう)す。江戸の人。

達馬君の第二女。年十六にして、余に歸ぐ。性、婉順詩書を習ひ、女工を善くす。物と煕然抵ふなし。舅姑に事へて克く孝に、内を治めて克く勤む。昔、余、少時、游蕩。年二十四、節を折りて書を讀む。氏、毎曉、余に先つて起つ。洒掃し畢りて、鴉乃ち啼く。一日風雪寒甚し。余、臥褥中にあり。枕を欹てゝ仰ぎ見る。氏、火盆を案側に置き、端坐して余が起つを待つ。其の勤苦、率ね此に類す。嗚呼、余の疎懶を以つて、尚能く、今に至るまで、一二名流に擯棄せられざるを得るものは、氏の勖助あるを以つてなり。二男一女を産む。鈞と曰ひ、鋼と曰ふ。女は、未だ笄せずして死す。晩に、更に一女を産す。夭す。氏亦、是の日を以て卒す。悲いかな。實に某年某月某日なり。時に年三十三。溜池、澄泉寺に葬る。

亡妻川島氏墓表　墓表は、墓碑墓碣と同じき文體のもので、即、ハカジルシの文であります。亡妻。死んでなくられた妻の川島氏は、名は於久と申して、小香と云ふ雅號を附けて居られましたが、生れは江戸の人で、川島達馬と云ふ方の、第二番目の娘子でありましたが。(亡妻の父なるが故に、尊んで君と云ふ。)年十六の時に、余、自分に嫁入をして、自分の妻となられたのでありますが、(歸は、穀梁傳に、婦人謂レ嫁曰レ歸。註嫁而曰レ歸、明二外屬一也。とありまして、婦人の嫁入をすることを名けて、歸と申します。なぜ歸と申すかと云へば、婦人の身は、夫の身に屬して居るものでありますから、夫の家を我家とすると云ふ意味にて、嫁入することを、歸と申したものであります。)其の性質は、至つて柔順な人でありまして、(婉も順に同じく、柔順に、おとなしくやさしくして、舅

姑並に夫の命を、善く守り聴くを、婉順と云ふ。)詩經や書經やの、聖人の教の道をも、學び習ふて居られて、又、女の工藝の縫者や、針仕事などの工を善くして、上手でありまして、やさしき性質の人でありましたからして、誰とでも、(物は、人物なり。與レ物は、、與レ人と云ふに同じ義なり。)能く和らぎ合ふて、熈然と、樂しみ和らぎて、(熈然は、和樂の貌なり。)牴れ忤ふて、仲のわるいと云ふことがなかつた。(牴は、説文に、觸也とあり。物にフレサカフの義なり。)舅父や姑母に事へても、克く大層に孝行の道を盡されて、又、一家内の暮し向とか、其の他、萬端の事をも、大層に勤めて、骨を折りて、何事にも氣を注けて居られましたが、昔日、余、自分が少かり時、少年であつた頃には、游びなまけ、放蕩にして、いたづらでありましたが、年二十四の時に至りまして、初めて此ではいかぬと、游蕩放逸の行をくじき改めて、勉强して、書を讀み、學問の道を勵むことになりました。(折レ節の字は、前漢書の呉被傳に、折レ節下レ士とあるに本づく。折は屈なり。かゞめくじくことなり。)氏、亡妻川島氏は、曉毎に、毎朝〳〵、まだ、夜が全く明けぬうちから、自分より前に床より起き出でゝ、室内から門口までも、水を打ち洒ぎ、掃き清められ、其の掃除をされることが、畢りしまつた頃に、ヤット夜が明けかゝりて、晨烏が、乃、其の時分に啼くと云ふ樣なことで、毎朝〳〵、夙に興きて、精を出して、家内の事を勤めて居られました。(矣は、何時も掃除を濟さるゝ時分になりて、初めて、明鴉が啼いたワヨと、截然と、上文を引束めて結ぶ程の助字なり。)

一日、或日のことでありましたが、風が吹いて雪がふり、ヒドク寒い日でありましたが、中々寒い

ものでありますから、床を離れて起出ることが、無勝になりて、余自分が、臥褥、臥し寢て居ります、褥の中にありて、夜具の中に寢てをりながら枕を側てゝ、（欹は、側に同じ。そばだつること。）首を擧げて、夜具の中より首のみを出して、少し仰向いて、ながめてみました所が、川島氏は、此の吹雪で堪へられぬ樣な寒き晨にもかゝはらず、何時もの通りに、已に興出でゝ、掃除などもシマハレテ、火盆即、火鉢を、机の傍らに於いて、（案は、机のこと。側は横なり。）チヤントたゞしく座りて、自分が起出てくるのを、待ちて居れましたが、（端は正也。端座は、正座と謂ふに同じ。）其の勤め苦勞をして、家内のことを、克く治められましたることは、率ね、大凡（率は概なり。オホカタと云ふ程の義と知るべし。）此の通りのことで、其の外、萬事に勤苦さるゝことも、總べて此

の事に類し、似て居りましたが、（此類は、類レ此と同じこと。倒字句と知るべし。）嗚呼、誠に自分の樣な、物事をうつちやりにして、人にも一向に行屆かぬ疎放懶惰、即、禮儀作法などのことにも、ヤリパナシデ構はず、何事にもナマケ勝で、不注意な性質のものでありながらも、尚且、能く今日に至るまでも、一人二人の、當時世の中に有名の人がたの爲に、擯斥されて退ぞけ見捨てられずに、交際推擧されて居ることが、出來てをる所のものは、川島氏の勤め助けて、（劼は力なり。ツトムルこと。）自分が疎放にして、至らぬ所あるを助けて、何事にもオチドのない樣に致しくれられ、又、劼めて内を治めくれられたるの、助力加勢ありしを以つてのことでぢや。それでなければ、とくに、一二名流の方よりも擯斥され、見捨られて居る筈であるのぢや。（擯は斥なり。シリゾケラル、こと。

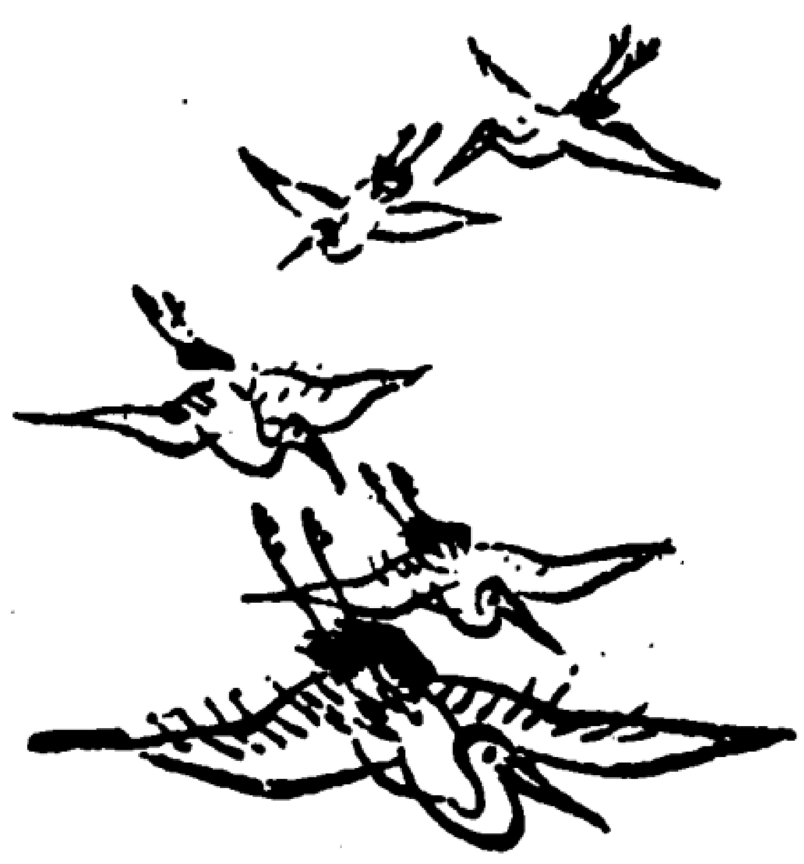
名流は、世に名ある人と云ふこと。玆所の也字は、決語と知るべし。以上力を極めて、久子女史が、內助の功ありしことを、描寫して、氏之劼助の一句を以つて、總て、上文を結束せしもなり。）都合子供が三人ありまして、二人の男子と、一人の女子とを產れましたが、男の兒の方は、一人は鈞と曰ふ名で、一人は鋼と曰ふ名でありました。一人の女子の方は、年未だ十五歲にならぬ前に、死なれました。（未レ笄は、禮記の內則に、十有五年而笄とありて。女子は、生れて十五の歲になりますと、初めて、笄を髮に指したものであります。ソコデ、未レ笄といへば、十五歲以前のこと、知るべし。）が、晚年に、後に更に二男一女の外に、又、一人の女の子を產れましたが、夭、生れた許りで死んでしまひましたが、川島氏、久子も、亦此の一女が、夭死した同日には、卒し、死んでおくなられましたが、誠に悲しきことであります。（夫は、句尾に押するの虛字にて、カナとは讀めども、哉の字などの意とは異り、發語の辭に用ゐる夫の義と同意にて、マア悲しきことであつた。死んだことは、と云ふ氣味にて、故の處に立戾りて、其の事はと。指し言ふ意ありと知るべし。）其の死なれましたのは、實に、何年何月の何日でありましたのぢやが、丁度、其の時の年齡は、三十三でありましたが、溜池町の澄泉寺と云ふ寺の墓地に、埋葬を致しました。とかく鶴梁先生が、自ら御自分の亡くなられましたる奥樣の、久子女史の墓に、表されたのでありますが、此の文に依りて見ますと、久子と云ふ方は、余程お貞女で、賢夫人であつたと見えますが、鶴梁先生も、深く惜み悲しまれました至情が、行文の外に溢れて居りまして、いと哀に思はれます。

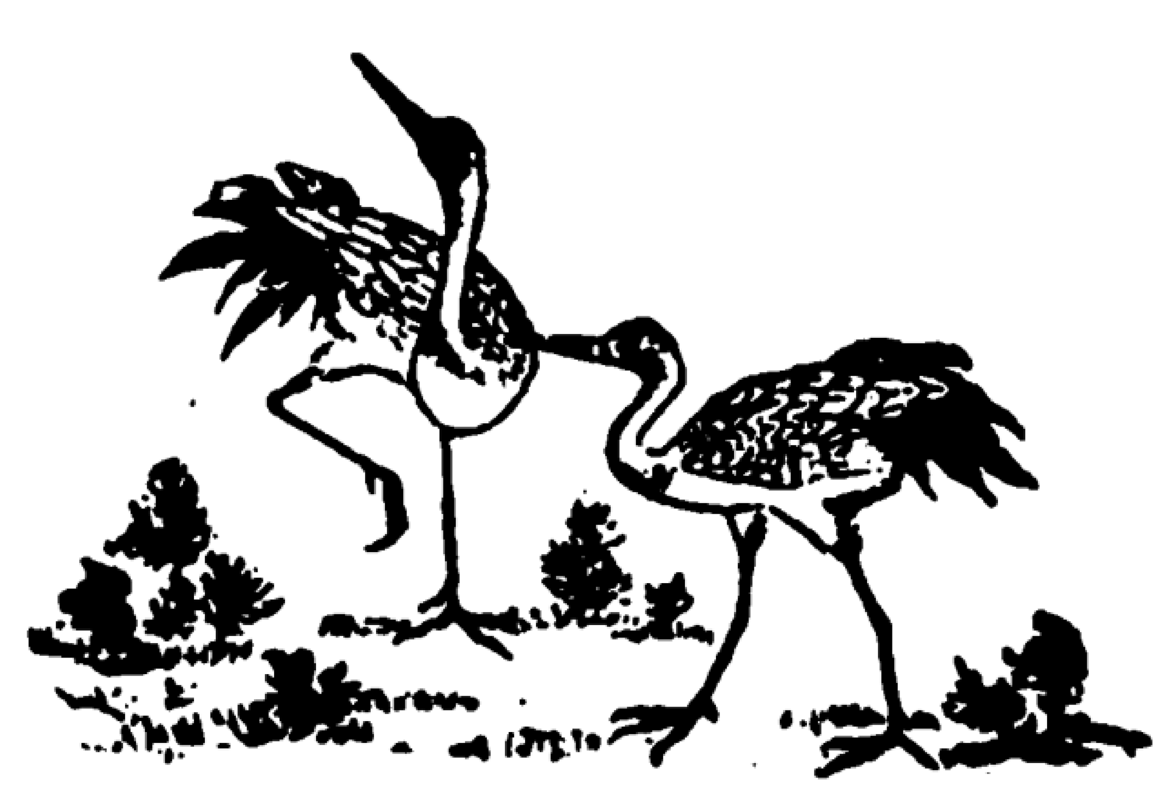
和畫通信講義（第廿一回）

山崎彩峨

鶴頸の如きこの果實は、こぶしの實なり。墨にて畫くには、淡墨にて輪廓をとり、花、被、莖、葉、枝、幹は、通常の淡墨にて畫き、種子と葉脈とは、濃墨にて入るゝなり。

彩色にては、第一より第四までは、墨と胭脂とを和したるものにて畫き、第五は、赭墨の極めて薄きものにて畫き、花被は、赭黃、莖、幹は、赭墨を挾墨となして畫く。葉は黃がち靑色に、墨少しばかりを入れて畫き、乾きて後、濃墨にて葉脈を入れ、朱にて種子を點ずるなり。







漫録

舟木の大神（前々號口繪參照）

師岡須賀子

おのれ歴史を讀む毎に、日本紀を見る毎に、河邊臣の命、即、舟木の大神の御偉徳を慕ひまつりぬ。されど、都よりは程遠き境なるからに、打紛れてのみありき。然るに、某の君、此の度病を故郷に養はんとて歸省せらるゝ折、我安藝國豊田郡舟木の宮は、推古紀の河邊の神にます。代々我家にて仕へまつれば、ひろく人々に告げて、歌奉りてよとあり。然は、豫て慕ひまつりし大神に御座すよと思へば、いと嬉しく忝くて、彼や此やと取りしたゝめて　近きに納めまつるべくなりぬ。さるに、女鑑の主筆來まして、舟木の大神の御姿を口繪とすべければ、そのよし書けと云はる。例の拙きが上に、枯れ〳〵ある硯の海、かひある玉は拾ふべくもあらねばと、幾度も辭びつれど、許さるべくもあらず。されど、又歌、奉るべき縁もあり、將又、未だ知らぬ人もあからずや。とて、岸べのもくずかづ〳〵もかきつけつるになん。

抑、我大皇國の臣民等が、國の爲君の御爲に盡し奉れる美風は、國體の精華として、萬國に比ひなき處にして、かつその數さへいと多し。されば、後世、これを神として祀られ、天地と共に、その功業の朽ちせざる事、いと〳〵めでたき事ありけり。今述べんとする、舟木の大神の御事蹟をしのびまつるも、いとかしこし。そが顯著しきものを云はんに、今よりは一千三百年の昔、推古天皇の御代

しろしめしてより、二十六年になりたる夏の事なりけり。漸々進み行く御代は、支那にさへ交通を開き給ふべくありぬ。船の往來も繁くなりぬ。大きく堅き御船も、數多作らせ給はんとて、國々に詔して、其の材ども召されにけり。其が中に、安藝國豊田の郡に、好材ありと聞召して、川邊の臣に仰事有りて、彼の國に遣したまふ。川邊の臣は、詔かしこみ、急ぎかしこに至りて、船材となるべき樹をさがし求むる程に、いと好き材數多ある山を見出でぬ。いと嬉しくて、人夫とも數多して、其を伐らせんとするに、或る人、此は、霹靂の木とて、古よりこれ伐れば、雷神の祟有りとて、恐れて、あたりだに立寄る人なし。されば、かくは年經たるなり。構へて／＼伐るべからず、祟の程も恐しきを。と云ふに、何れも、我伐らむと云ふ者なし。川邊の臣は、いかでか、其が如き言に、動かさるべき。聲を勵して曰はく、これ、我私事にあらず、大御詔によりて、大御國の爲に伐らんとするなり。雷神、何程の事かあらん。假令、雷神怒をなすも、其の咎我にあれば、先、我その罪に當らん。な懼さそ、な怖ちそとて、神色少しも變ることなく、幣帛數多奉りて、盛に伐らしめられぬ。

とばかりありて、空俄にかき曇り、氷雨ふり來て、雷鳴電光の劇しさ云ふばかりなし。人夫ども、前の言にだに怖おつるに、今は、誰とて人氣色もなく、如何に勵すも、詮あるべくもなし。川邊の臣、劍の手上とりしばり、天に向ひて曰はく、雷神と云へども、豈、皇命反かんや。雷神、人夫をな犯しそ。只、我身をのみ傷れとて、大路の直中に突立ちて、待つ事一時餘、終に、事なくて止みぬ。後、その木を見るに、少き魚の數多、梢々に挾り

たり。やがて、その魚を焼き、その木を伐りて、船をつくりて奉られたれば、甚く、大御心に叶ひたりきとなり。されば、この樹の有りし山を舟木山、その村を舟木村と云ひて、この川邊の臣ぞ、この村の鎮守として祭られたまふ。舟木の大神に御座すなり。

あはれ、鳴りはたく雷鳴、輝き渡る電光の中に立ちて、端然として、「雷神と云へども、豈皇命にそむかれんや。雷神人夫をな犯しそ、我を傷れ。」とて、死生只君の爲皇國の爲につくされし忠誠仁慈今偲びまつるも、いとかしこうなん。我等婦人にしあれど、この忠誠、この仁慈の御心を心として、片時も忘るまじく、怠るまじき事ならずやは。

女子古代の服飾

椎園信成

今の世に在りて、古代の服俗を見んとするのは、中々に容易なことではない。其の中にも、女子の服飾に關しては、世の人が、輕々しく見て居た爲め、代々の歴史を書いた人も、極簡單に記して居るから、史料として今日に存して居るものは、誠に少ない。故に、或る時代を通じて研究した人も、僅か二人か三人位である。これとても、鎌倉や室町の時代ではなく、極下つて、徳川時代の中頃に爲つて、岩瀬京山と云ふ人が、始めて女子の服飾に就いて、いろ〳〵研究して、歴世女裝考と云ふものを作つた。けれども、惜いことには、頭髪の部丈け版に爲て、他の部分は、世に出て居ない。其の原書も多分今頃は、散佚して居るであらう。

次に、生川春明と云ふ人が、近世女風俗考と云ふものを作つたが、表題の如く、近世のみで、上世の事にまで、研究が及ばして居ないのは、遺憾である。此の他には、通じて居るものはない。併し、一時代、一事物を限りて書たものには、隨分立派なるものもある。即、女官飾抄とか、女官服飾圖繪とか、女房裝束着用次第とか、化粧考骨董集、吾妻餘波、我が衣近代世事談と云ふ樣な書物は、誠によくしらべてある。又、明治に爲つても、藤岡さんの風俗史とか、坂本さんの風俗史とか出來て、少しは、女子の服飾に就いて記されたが、何しろこれは、女子のことを專門に書いたものでないから、其の記事も簡單で在て、其の上、見るにも實際不便である。そこで私は、これ等に記してある材料を一つにまとめて、煩しきは削り、其の要點をのみ取つて、夫に、各時代の物語、及び、草子、或は隨筆、及び、繪卷物と云ふ樣なものから、證據となるべき繪畫を加へ、極明瞭に、三千年來女子の服飾が、如何に變化したかと云ふことの、概略をお咄し致しませう。夫に就いて、私は豫め、時代を、上古、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸、の六つに別ち、順次御話し致すつもりですが、何分、未た研究も不行屆なれば、隨分誤謬の點もないとは云へぬ。若し謬りではないかと云ふ點が、諸孃のお目に留つたら、どし／＼御注意を願ひます。

第一、上古

上古と申せば、何しろ、三千年余も昔の事でありますれば、實の處を申せば、其の時代の婆さんや、娘さんは、どんな衣服をきて、どんな姿をして居たか、確かにはわからぬのである。併し、我邦には、御承知の通り、古事記とか、日本紀とか云ふ

上古の家庭（想像畫）



貴重な書物が傳つて居るので、大畧は知ることが出來るのである。故に私は、この二つの書物と、古語拾遺とか、萬葉集とか云ふ本を種として、これに、諸國から堀出した處の土偶などを對照して、其の一班を紹介致しませう。

元來上古は、單に我が日本の國ばかりではなく、支那でも、朝鮮でも、或は西洋各國でも、男と女との服飾は、同じもので在つて、今日の如き差別はなかつたのである。其の着用の順序を、以上の書籍に依つて考へますれば、

一、褌

二、衣

三、裳

四、帶

五、襲

大體此の如くである。

裳及襲を着けざる女の躰



右の圖は、以上の書籍中の記事に依つて、想像したる書であります。

今、一々褌とか、衣とかに就いて、説明致しますれば、

一、褌（ハカマ）

其の製法は、明かに知ることは出來ないが、多分、今日云ふ股引の如き物の、ゆつたりとたしので在つたらしい。今日の、袴の樣なものだと云ふ人もあるが、これは、取るに足らない説で、此の褌と云ふのは、即、襯褌の義で在つて、後世の袴とは、全く別物である。

女子要書解題（志、比、之部）

三浦千畝

將軍外戚傳　五卷

作者詳かならず。此の書は、八代將軍吉宗の祖母、黑川氏迄、德川家代々の外戚を記したるものにして、多少の繁簡はあれども、一々、その系譜を擧げたること、全く、柳營婦女傳に同じ。蓋、兩書編著の前後は、今詳かならざれども、記事の躰裁より見れば、柳營婦女傳、或は、本なるが如し。（然るに、壺範記の引用書中、外戚

傳ありて、婦女傳なし。）兎に角、此の二書は、異名同書と見て可なるべし。

比賣鑑　　三十一巻

中村惕齋の著あり。（群書一覽に、藤井懶齋の著としあるは、誤なり。）自序に、『ゆたけきふみといふとしの名の、あらたまる年の、冬しもつき云々。』とありて、此の書は、寛文十三年、即、延寶元年に成りたるものなり。而して、前十二卷（述言）は、寶永六年の刊行にして、後十九卷（紀行）は、正德二年に上木す。惕齋は、京都の儒者にして、名は之欽、字を敬甫といひ、七左衛門と稱す。後、仲二郎と改む。惕齋は其の號なり。性、廉貞寡欲、功名財利に於いては、泊然たり。常に門を杜ぢ、心を學業に潛め、文を談じ書を論ずる外、敢て、泛交をもとめず。惕齋、博學洽聞にして、天文、地理、尺度、量衡の類に至るまで、皆能く通曉す。最も禮學に精しく、言語苟もせず。起居亦法に合ふ。當時、伊藤仁齋と名を齊うす。元祿十五年七月廿六日歿す。時に年七十四、

この書は、概ね、朱子の小學にならひ、女子の敎訓に資せられたるものにて、其の文は、婦女の通曉し易からん爲に、假名をもて記し、其の事は、女訓とあるべき、和漢古今の言行を書きあつめられたり。文章の温雅なる、材料の豐富なる、實に、吾が國女學書中の巨擘といふべし。蓋、此の書を作れる著者の意は、その自序に見えたり。

上略はかなき後のかたみにもと、おもひなり侍るまゝに、ふるきつたへも、今の世のことわざも、わかちなくとりつどへたるが中にも、はるけき道に出たつ足もと、たかき山路にの

ばるふもとを心ざして、あとさきもなく、書つゝけ侍りにき。其大概は、小學をまねびて、前十まきあまり、二卷には言をのべ、後の卷には、みな行ひを記せり。又、立敬、明倫、敬身のおもむきによりて、その内を書わかてり。すべて、三十卷に滿り。名づけて比賢鑑といふ。下略

目録

述言第一、

此の卷には、子をなしへて、人となす道を述たり。すなはち、小學の立敎の趣なり。

述言第二、

此の卷には、子の父母につかへ、よめの舅姑につかふる道をのぶ。すなはち、小學明倫の、父子の親の趣なり。

述言第三、第四、

此の卷には、婦人の夫に從ふ道を述ぶ。すなはち、小學明倫の、夫婦の別のおもむき也。

述言第五、第六、

此の卷には、おとゝひの中より、とこのはらから、おひよめの間をやはらげ、よめをあはれみ、まゝ子をいつくしみ、親族をしたしみ、婢僕をめぐみ、ひろく世の人を愛する道をのぶ。又、上君につかふまつり、傍輩にまじはる道をつげたり。小學明倫の長幼の序より、君臣、朋友の道、通論までの、おもむきをまじへしるせり。

述言第七、至第十二、

此の卷には、學をつとめ、心を正くし、事をつゝしみ、身をゝさむる道をのぶ。すなはち、小學の敬身の趣也。

紀行第一、第二、

此の卷には、人の母として、子をなしへ、人となしけることをしるす、すなはち、小學の立敎の事、おこなへるあとに、なずらへり。

紀行第三、第四、

此の卷には、人のむすめの、父母に事ありし、ふる事をしるす。すなはち、小學明倫の、父子の親の事おこなへる、あとなり。

紀行第五、

此の卷には、人のよめとして、舅姑に事ありし、ふることをしるす。これも、明倫の父子の親なり。

紀行第六、至第十一、

此の巻には、貞女烈女の、ふる事をしるす。すなはち、小學明倫の、夫婦の別の事おこなへるあとに、なずらへり。

紀行第十二、第十三、

此の巻には、はらからのあひ、よめの中、したしがりしふる事をしるせり。すなはち、明倫の、長幼の序の事おこなへるあとなり。

紀行第十四、第十五、

此の巻には、君のために忠をつくし、義をまもりける、ふる事をしるす。すなはち、小學明倫の、君臣の義の事おこなへるあとなり。

紀行第十六至第十九、

此の巻には、道をあがめ、學をたふとび、心をたゞしくし、身をつゝしめるふることを、しるす。すなはち、小學の敬身のこと、おこなへるあとなり。

はきよせ（四）

在近江　松竹莊主人寄贈

信州更科に長吉といふ者、博奕を好み、酒を飲み、喧嘩する無頼の若者あり。母死して、老父と弟妻の男子一人有り。年中外を家として、家業を爲さでくらしけるが、此の者、その邊の宿に勤めし飯盛女と馴染をかさねけるが、後に、この女を内に連れ歸り、後妻となしけり。さて此の後、妻は舅に仕へ、繼子を愛すること深し。然れども、長吉、常にこの女を、酒狂の上打擲しけるが、あまり無體をいひかけし故、一つ二つ女も答へければ、ますます怒りて、追出すとて曳ずりて、近所の媒人の所へ連れ行きて、暇狀を認めて引渡しける。媒人も、實の親へつれ行きて渡さんといへども、此の女云ふやう、やはり此方にさし置きて下され、自分賃仕事して、御苦勞はかけまじと、いふに任せて、家にさし置きけるに、此の女は、長吉が留守をうかゞひ、賃仕事にて、溜し錢にて、食物を調べ、舅におくり、息子に與ふる事しばしばな

り。或日、又、いろ〳〵の食物を拵へ、持來て老人子供に與へ居ける所へ、長吉歸りければ、致し方無く、押入の物入へ隠れけり。長吉内に入りて見るに、種々の食物、老父の前に並べありしかば、此の品は、何方より貰ひ給ひしぞ。又、女のはきもの庭にあり。如何にと問ひければ、老父詮方なく、しか〳〵の由を語りければ、女を捜し出して云ふ様は、一旦暇を遣しぬるに、何故此の家に、足を蹈みこみしや。但し、我が家財を盜み取らん爲なるべし。と責めければ、女は涙を流し、かく盜などと仰候故に、委細を申候なり。我が身出で丶、後、御身は、外を家とし給へども、舅御の御足不自由なる上、朝夕の飯なとも、定めて御難儀なるべしと存ずる故、媒人の家に止宿致し、種々心を配り、少しづ丶の賃仕事の錢を以つて、舅御の御口にあふべき物を調べ、御身の留守を考へ

て、進ぜしなり。いかで、塵一つ取るべきやと、くどき泣きければ、心強き長吉なれども、岩木ならねば打しほれ、物をもいはで、暫思案の體なりしが、はら〳〵と涙を流し、詞を改め、實にあやまり入りたり、か丶る貞實なる者とも思はず、酒狂の上打擲致し、其の上追出せし事、何共申譯なし。汝が貞心に依りて、我が不孝の程深く思ひあたれり。是より心を改め、禁酒致し、博奕喧嘩等を止め、家業を營み、親を大切に致すべきま丶、これまでの事は堪忍致し、戻り給はるべしと、誠心あらはし申しければ、女も深く歡び、自分が少しの志より、斯の御心を改めさせ給ひぬる上は、何しに否と申すべしと、世に嬉しげなる體を老父見て、共に悅び、長吉に向ひ、汝これまで、我が申す事、一つとして用ゐざる故、何共申さゞりしが、此の嫁が孝行、なか〳〵詞に盡しがたし。

既に、此の家を出しより、一日として、我を問はざる日もなく、人をして食事をおくること、親ながらも勿體なき程の事なり。呉々禮をいひてくれよと、涙を流し悦ぶ體を見て、益、長吉も本心に歸りて、それより業を勤め、孝行を盡しけるも、全く貞婦の貞實より、かゝる無頼の者も、善心に立歸りたる事になん。

やまとめぐり（承前）

井上頼文

唐招提寺

頼文いはく。道の幸に當寺の金堂に、鴟尾あり。およそ、鴟尾の殘りたるは、こゝのみなりとぞ。一つは古物、一つは新造にて、新製のかたには、銘あり。此の御堂、元亨三年癸亥春三箇月之間成上葺畢以其次同六月候西方鵄作賛之作者壽王三郎大夫正重とあるよし、鵄と書るは假借なり。講堂は、平城の朝集堂を賜はりて、寫し立しといひつれども、さるべき故實もみえず。金堂には、鴟尾とあり。凡の搆も、さもと覺ゆること〻もあれば、つたへあやまりやしけんと、物しれる人はいふめり。

と見えたり。

藥師寺の塔

頼文いはく。この塔の擦銘こそ、歴史家にとりては、こよなき貴重品なれ。此の擦銘をして、大日本史修撰の時にあらはれしめば、大友天皇本紀を立てらるゝに當りて、何ぞもの遠さ、懐風藻や、水鏡を引かるべき。直に、この擦銘をひきて、一層灼然たる證明をあたへられけんを、いとくちを

しき事なりけり。いで、この擦銘にかゝりたる、その概略をかたるべし。

嬢たちも知らるゝごとく、日本紀には、天武天皇元年を、壬申の歳となして、たゞちに、天智天皇の辛未の歳につゞけ、大友天皇紀一世をもらされたりき。しかるを、史眼炬のごとき、光圀公は、大日本史編修に當りて、壬申の歳を、大友天皇の元年と定め、つぎの癸酉の歳を以つて天武天皇の元年と立てられたり。しかれども、その當時は、こを誤謬なり、專斷なり、僭濫不充分なり。など、これに反對する議論も多かりき。寛政の頃にいたりて、この薬師寺の塔を修覆したりし時、かの有名なる好古家、穂井田忠友氏が、塔上なる銘文を發見し、抃舞おくことあたはず、搨本となして、普く世に弘められしかば、大友天皇紀の特立を非難せる學者も、遂に口をつぐむにいたりぬ。

そは、現在、日本紀編輯の總裁たる一品舍人親王の、自ら筆とりて、この擦銘に、維清御原馭宇天皇即位八年庚辰之歳と、かき給へりしを以てなり。この干支を推せば、元年は、癸酉にして、壬申にあらざること論なし。案ずるに、當時は、壬申を以つて、大友天皇に係けしが、後に忌むところありて、大友天皇紀一世を除き、壬申を、直ちに、天武天皇元年と定められしものなること疑なきなり。篤學の士、屋代弘賢翁が、この塔にのぼりて、當時を追懷せられつる日記を見れば、あたかも、銘文の文字飛動して、眼前に躍るが如し。

屋代翁の道の幸に、

六日、(寛政四年十一月)空くもる。卯のくだりにいでゝ、薬師寺へゆく。諸堂はむかし炎上せしかば、かたばかりなり。六重の塔のみ、天武天皇の御字に、草創のまゝにてありといふ。(中

路）いかで、この塔の擦の銘は、舎人親王の遊ばされしを、見てしがなとおもへど、六層の塔上寒風はげしければ、父母の遺體をおもはずやなど、彦輔ぬしの、いさめいなひがたくて、ためらひぬれど、ふたゝび來べき身にもあらねば、折しも、小雨ふり出でたれど、かのぬしには、さともしらせず、ねんじてのぼりぬ。新發に案内せさすれば、まづはしごとりよせて、第一重の屋ねに、窓ある所よりはひ出づる。しりにつきのぼりて、第二重の内に入る。これより、第六重までは、うちにあやしの、はしあるにすがりつゝ、からうして、頂上までのぼりぬ。これは、工等が修補の度にのぼるとて、ますぐに立たる板に、さんなどうち、又はすこし、なぞひなるもあり。もしは、たときのはしなどをたよりとして、すはき所をくゞりゆく。すべて、いぶせさいはんかたなし。六重の屋根に、又窓ありて、下より、ふたをおしあげ、屋のふちに手をかけ、ゑい聲をあげて、身をもぬけ出ぬれば、東には、かすが山、わかくさ山、西には生駒がだけなど、いとさやかに見えて、雨中の眺望、又なき折からなるべし。かつまた一池は、ましたにあり。高さ、凡十六丈、空輪の長さ五丈ほど有とぞ。さても、九輪の心柱をくゝみて、屋の上におほひたるを、露盤といふ。方五六尺もあらんか。高さは二尺ばかりあり。露盤のうへに、上のひらきける鉢のさましたるもの、ふちに、手をかけて、いきみて露盤にのぼる。年ごろ、聞きわたりぬる銘文は、心柱の西の方にえりてあり。塔の心柱をば、擦といふよし、順朝臣の和名抄に見えたれば、擦の銘といふべきなり。世人の露盤の銘といふは、あやまりな

り。扱露盤の上に立たれば、九輪の第一、胸の上にあり。銘はその下にあれば、いとよく見ゆ。かねに、ゑりたる物なれば、いとあざやかなり。すべて、此の度のことは、夢のごとおぼゆるに、これはまして、いへはおろかなり。此の銘文は世人も、あまねくしりたることなれば、うつさず。天武天皇即位八年とかゝれたるは、日本紀とたがひて、かの親王の御手にては、いかにやあらんと、いにし年、いぶかりおもへりしが、或人の、是は、その折からの實録ならし。日本紀撰定の時にいたりては、筆をまげさせ給はんも、よりところ有べきにやとぞいはれし。と見ゆ。翁の熱心、實に感歎にたえず。

衝口漫言（十二）

白松園主人

◎田舎の正月に於ける趣味

今は、さすがに如何なる山村水廓にても、太陽暦のおもてによらざるは稀なれども、十六七年の昔、おのれ等の、まだ八つ九つばかりなりし時は、大方舊暦によらぬはなかりき。先づ嬉しきは、元日以前の餅搗なり。今三四日寢なば正月なり、といはるゝがいと嬉しきに、その心構として、近き隣の人、あるは親族うちよりて、まだ夜の明くるには程遠きに、かしがましく罵りて、杵の音勇ましく搗き立つるを、その夜はいねもせで、そこ邪魔なりと叱らるゝをも聞かで、かたへを立ちも離れでうち守れるうれしさは、たとふべき者なんなき。さるは、かしこにも、こゝにも、杵のおと高やか

に聞えて、里のうちいと賑しく、此の時ばかりは、貧しき家もなき心地ぞする。あけのあさ、近き家こと〴〵くうちめぐりて、神棚に供へたる餅を見て、かしこのよりは、おのがうちのが、大きくあめり、かしこのはいと小しなど、品さだめするもをかし。そのむかし、伊藤東涯先生が、まだいと幼くて、原藏といひしころ、父君の貧しくて、餅をもかざりしかば、隣の餅を見て、原藏にもあれたまはれとて、その母君を泣かせたりしも、げにとおもはる。さすがにおのが里にも、貧しき家のなきにもあらねば、わづかに、小餅五つ六つを神棚に並べたるが、いとほしさよと、思ひしこともありにき。我家は、山の麓にあり。山上には、八幡宮の社います。山をば、古來泉の嶺と稱ふ。そは、上にいと深き靈泉あれば、かく名づくるなり。高やかなる石階の下は、廣く長やかなる馬場なり。

元日の朝は、まだほのぐらきに、いととく、神主がうち鳴らす鼓のねに目さめて、おもて戸ひきあけつゝ、霜白く土氷りて、雪さへちら〳〵とふりくるに、ねまきのまゝ、脛もあらはにかけ出でつゝ、息の狹霧をたなびかせて、友の門うち叩き、呼びさますもいと誇りかなり。老いたる人などは、はや、折目正しき衣きて、石階をくつのおと高く咳などして、詣づる者ひきも切らず。車井戸のおと頻りにきしりて、こゝかしこに、拍手の聞ゆるも耳新しき心地せられて、雜煮餅のをはるころ、賀客つぎきて、專なき門も時めきわたる。既に、父君の掟させ給へる、孝經の素讀もはてつれば、母君の織りて給はせつる、漸しき衣うちきるまゝに、くつもはきあへずをどり出でゝ、宮の馬場なる、はま弓の競爭にとうち向ふ。はま弓とは、いかなる事ぞ。東西組を分ちて、葛蔓もて編みたる

毬のやうなる者を、流星の如くに地上を走らするを、弓に矢つがひて待ちうけたるが、おのがまへを過るをねらひて、やりもすぐさず、之を射止むるをもて勝とす。昔は、正月の讀物に、文正草子をものせし由なるが、わが父君は、小說草子やうの者を禁ぜられしかど、軍記者は、事に害なしとて許されたれば、おのれは、三國誌漢楚軍談を、こよなく愛讀したりき。關羽華雄を斬るの段、趙雲が劉禪を抱いて、重圍を出づるわたり、讀み去りてなほ、骨の凜々たるをおぼゆ。男兒正月の讀本として、心ゆくかぎりといふべし。みやこわたりは、此の頃にても、歌かるたといふもの大流行なれども、わがゐなかには、あまり流行せず。我父また、いたく此の如きことを嫌ひたれば、それ習慣となりたるにもあるべけれど、おのれはまた、之れを好まず。かく云へば、無風流ぞと云ふ人もあるべけれど、余は、却りて歌がるたほど、無風流なる者はあらじとおもふ。女どちの、はかなきすさびはするは、まだしもなれど、若き男女のあまた集まりて、禮儀を紊して、妄りなるさまをも厭はず、往々夜を徹してまでに、此の技に耽る者あれども、さまでおもしろき者とは覺えず。また實は、おもしろき者にも非ざるを、かくするは或る賤しむべき胸中の消息によりてなるべし。この無風流なる歌かるたを、おもしろしといふ者は、眞の趣味といふ者を解せぬ人の言にて、はた、男兒の婦人の中に交らひて、したり顏に此の技を演ずるは、いと女々しきことなるを、多くは穢れたる思想の媒介として、する者に至りては、嘔吐の限といふべし。故に余は、圓滿なる家庭を保たんとする人は、この技を廢すべきことを勸告する者なり。

◎風采妓に類す

凡そ、風采は心の寫眞なり。心向ければ、風采氣品も之れに伴はざるを得ず。此のごろ、あらゆる雜誌の卷端に挿入せらるゝ、貴大人たちの容貌風采はいかん。一見しては、文藝倶樂部や團珍に出でたる、新橋柳橋あたりの藝妓と、毫も異なる點を見ず、漸くその上に、何某氏夫人とあるによりて、識別するを得る位なり。心に之を賤しとし、口に之を喋々する者は、などて形の上に於いて、賤婦の風采を學ぶぞや、こはその夫たり、父たる人の注意によりて、制裁を加へられんことを望まざるを得ず。之れと共に云ふべきは、雜誌の肖像畫なり、いかに良材なしとは云へ、下層の視聽に媚びて、社會を墮落せしむるは、半點の慈善心なき者といふべし。少しく無形の者に向ひても、慈善事業を推擴せよ。

◎所謂慈善事業

所謂、慈善事業の樞府として、何の會くれの會とて、有力なる貴婦人方の首唱に成れる者多し。これその性格よりしても、當に然るべきことなれど、遂に、一時の流行に終らざるを得べきか。慈善品を陳列して、之を賣り捌くと稱し、聲を嗄して、客を呼び留め、袖を牽きて之を强賣りするなど、寧ろ滑稽といふべし。令孃貴婦人の深窓に育つ者は、勢ひ、恣に男子に戯るゝを得ざれば、名を美名のもとに借りて、おもしろ半分に、形を崩して、かゝる狂態を演ずる者に非ざるかの如き感を、他人に抱かしむるなどは、まだ〳〵日本婦人の思想、甚だ幼稚と云ふべし。我國の習慣的性格は、中々男女の交際をして、高潔ならしむる能はず、席を同じうすれば、忽ち淑女も狂女となり、情慾の熱火は、直ちに、燎原の炎々たるに等しから

んとす。智識の進歩と、時世の變移とは、未だ、女大學を廢するに至らず。

◎學問は瓢箪の如くにならず

某大名、嘗て、山崎闇齋に請ひて、其の臣下を弟子となし、以つて、有用の材たらしめんと云ひしに、闇齋頭を掉つて曰く、措きね〳〵、學問のなるは、瓢箪の生るが如く成る者に非ず。と、此の頃、各地方に、女學校の多く設立せらるゝは、喜ぶべき現象に違ひなしと云へども、その多くは、學校教師にならんの希望に出でざるはなし、教師となる、もとより不可なきに非ず、されど、女學校は、糊口を凌がしむる道を教ふる所なりといふ觀あるは、果して女子教育の本旨に副ふべきか。さらでも女學校を卒業すれば、一かどの學者となりしおもゝちして、嫁すべき時機をも失ひて、嫁すること能はず、毫も實用の腕なきにより、たとへ嫁すとも、遂には、舅姑と反目せざるを得ざるに至る。女學校の生徒のみならず、女學校の女教師また然り。嗚呼女學校簇出すと雖も、その結果は、悉く瓢箪のなれるが如し。曲めるあり、細長きあり、丸きあり、腐れるあり、その形體の正しき者は、十が一にも及ばず。悲しいかな。（讀出）



一月一日兼題

海邊鶴

天　東京本郷區龍岡町 日本女學校　靡山みゑ子

住の江のきしにしけれる老まつに
千とせをしめてあそふたつかな

評、言葉うるはしく調高し

地

岐阜縣岐阜市大工町　佐藤そう子

あま人かあみほすのきのまつに來て
うらやすけにもあしたつのなく

評、趣向新しく味ひあり

人

肥後國熊本市東寺原町　田代きわ子

二見かたあらふいはほのうへにまた
むつましけにもあそふつるかな

評、所から趣向おもしろし

甲之部

東京　大籔てる子

まかちとる音にきほひてわたのはら
なきこそわたれつるのひとむら

東京　林とし子

あみたてるまつはら見えて朝ほらけ
三保のうら邊にたつそなくなる

東京　山田八重子

のとかなる波のつゝみにうちそへて
よろつ代うたふあしたつのこゑ

東京　武藤あや子

朝日さすうらのまつはらかせたえて
たつかねたかく千代よはふなり

東京　清水てふ子

ゆふ浪につきもよせくる須磨うらや
ともよふつるのこゑもさやけし

東京　中村りき子

見わたせは離れ小しまのまつか枝に
ねむれるたつのやすけなる哉

東京　柏木はるえ子

あさ日かけのとかに匂ふあかしかた
うらへはるかにたつなきわたる

乙之部

眞砂路にむれておりくるあしたつの
なかきよはひはかそへつきせし　沼邊うらき子

うちむれて和歌の浦わにうらやすく
千代よふたつのこゑそきこゆる　佐々木ますの子

あしたつのむれてあそへる眞砂路に
いはうつなみのおとものとけし　藤田つる子

朝日かけつはさにうけてしほひかた
　ゆたけくあそふたつのもろこゑ　河田いし子

ふしのねもさやかに見ねて田子の浦や
　いそへにあそふつるそゆたけき　駒澤松子

ときはなる千代の松はらとことはに
　しほひしほみちたつもなくなる　坂本登子

香椎かたしほひのかたにのとかにも
　ひなうちつれてあそふたつむら　佐々小學子

いはとこに鶴もあそひていそまつの
　こすゑにつるのこゑそきこゆる　田代鶴子

しら雲のかゝると見しはいそやまの
　まつにむれゐるたつにさりける　田村多豆子

ゆく舟のかけものとかにすみの江の
　うらわにたかくたつ鳴きわたる　稲原蕭子

わかの浦にしきなみよするこのあさけ
　むれたつたつのこゑそきこゆる　北島功子

住の江の濱へにたてるそなれまつ
　そなれてたつもむれあそふらむ　横田音羽子

磯邊にはあさりあきてか千代よほふ
　たつかねたかしらうのまつはら　武藤あや子

晴れ渡るおほそらかけて鳴くたつの
　こゑもたかしのはまのあさなき　小室やゑ子

君か代のなからのはまに住みなれて
　千とせかさぬるたつの毛ころも　大石まさ子

うちよする浪もしつけきなかはまに
　きみか代いはふひなつるのこゑ　森田孝子

さしのほるあさ日のとかにわたの原
　なきこそわたれたつのむらとり　松山かずね子

明石かたあはしゝまやまほの見ねて
　たちまふかゝるのかけそゆたけき　村田たみ子

松しまや千とせかはらぬおいまつに
　よはひきそひてつるもすむらむ　大久保伊野子

丙之部

住の江のしまにあそへるともつるは
　おもふことなく千代もへぬらし　金田とみ子

うら〳〵とのほる朝日にさそはれて
　うみ邊のたつもなきたちにけり　小川つる子

ほの〳〵と浪もしらみていそへなる
　まつのこすゑにたつそむれゐる　國府田はる子

ひめしまの小松にすたつひなつるの
　千世のこゑこそたかくきこゆれ　沼井あい子

うら波のはなにむつれてひなつるの
　こゑたかしくもなきわたるかな　堀内ふさ子

くたけちるいそへの浪をはなとみて
　たのしくあそふつるのひとむら　加藤まさ子

沖つかせふくやはま邊にあしたつの
　千代よはふこゑそのとけかりける　安藤ちやう子

さかねゆくわか日の本をいはひつゝ
　うみ邊のたつも千代となくらむ　土生津とく子

たのしさよ濱のまさこちふみならし
　千とせすむへきたつか音そする　加藤まさ子

浪たゝぬきしにおりゐるたつかれも
　きみか代いはふこゑとこそきけ　杉島きく子

あさ日さすいそ邊の松にやすらひて
きみか代いはふあしたつのこゑ　鶴峯やす子

まさこ路にむれ集ひたるあしたつも
わか大御代を千代とうたへり　小川たま子

すみの江の波まに見ゆるしらくもは
千代よふたつのむれにそありける　久保わか子

波のよすはまのまさこにあしたつの
いつれも千代をうたふなりけり　大久保すゑ子

朝日さす田子のうらへにまふたつの
こえ千さとまてきこえゆくらむ　森はつえ子

のとかなる海邊にむれてあしたつは
千代をうたひてまひあそふらん　小野川てつ子

人みなのめてはやしけりのとかなる
うみ邊にあそふたつのもろこゑ　松平鐐子

眞砂路にむれ居るたつのこゑきけは
われさへやすく千とせへぬへし　樋畑えつ子

うみつらにあそへる鶴のおほきにも
くにのさかえは見えわたりけり　小玉つる子

すみの江のはまの眞砂にうちむれて
千代よふたつのこゑそきこゆる　樋口ゆり子

岩のへにおりたちてなくたつの音は
千さとをかけてきこえゆくらむ　津田ふく子

わたつ海のなみにきほひてまな鶴も
きみかみ世をは八千代とそ鳴く　吉田みい子

むれてゐる海邊を見れはあしたつの
千代よひかはすこゑものとけし　田中きみ子

住の江の濱のまさこにうちむれて
あそへるたつも千代よはふなり　初田ゆき子

住の江の濱邊にむれてゐるたつは
千とせかはらぬすかたなりけり　坂本千代子

田子の浦にむれゐるたつのこゑにしも
きみか八千代のはるそしらるゝ　中村いそ子

濱まつのしつえをたちてつるの兒は
ひかたをさしてなきわたるなり　佐々有隣子

わかの浦のなみ路はるかにあしたつの
ゆたかにあそふこゑきこゆなり　佐藤玄子

千代よはふ鶴のもろこゑきこゆなり
なみしつかなるすみのえのうら　野口靜子

白なみのよするはまへにむれたちて
千代よひかはしたつのあそへる　田代綾子

若のうらのまつの葉こしのあしたつを
よせてかへらぬなみかとそみる　瀬戸ゑい子

あしへのみあされるたつは磯やまの
まつの木すゑやれくらなるらむ　上原のふ子

よるなみにこゑたてそへて和歌の浦
おきつすさしてたつなきわたる　竹村竹里子

なにはかた涙かせたねてのとかにも
うらおもしろくあそふつるかな　武田絲子

わかのうらの芦邊のたつはうちよする
なみにいく世かこゝろかけゝむ　村上操子

をさまれるみ代をほきつゝなく鶴の
こゑものとけきいそのまつやま　吹田たけ子

いそやまの松にすこもるひなつるも
みよのさかえをちよとよふなり　鏡山増代子

なみよするちびきのいはにすみなれて　よはひかさぬるつるの毛ころも　藤波玉子

なみよする海邊のまつにちよ〳〵と　すこもるつるのこゑそきこゆる　山崎圓子

鹽かまのうらつたひしてゆくたつは　ちしまのまつや棲くらなるらむ　横田秋子

濱よする三保のまつはらのどかにも　たつかれたかく千代よはふなり　伊勢村花子

うちよする濱にうきことはらはせて　まつに千とせをちきるつるかな　伊勢村春子

うら波のよするなきさにおりたちて　千代よひかはすともつるのこゑ　杉浦いと子

あさ日さす磯へにたてるまつか枝に　きみか代いはふまなつるのこゑ　飯塚ちよ子

朝ひこのゆたかにのほるうなはらに　たかくきこゆるたつのもろこゑ　細井菊枝子

田子のうらなきさにたてる松か枝に　すこもろたつのともやよふらん　藪田とゝ子

わたつみの濱のまさこをかそへつゝ　のとかにあそふいそのあしたつ　松長春江子

むれゐつゝ和歌のうら邊に鳴くたつの　千代よふこゑそたかくきこゆる　寺澤つれ子

うら群れてしほ千の方になく田鶴は　しつけき御代をいはふなるらん　山室やす子

濱よするなきさにつとふたつのむれ　なれはたい古の御代やしるらむ　小花きよ子

ありそうつ波のひゝきもしつまりて　五昧ねい子

住の江の濱へにあそふあし田鶴も　なきさにたつのこゑきこゆなり　湯淺さく子

日の御旗あまのとま屋にかゝやきて　きみかさかねないのるなるらん　北川柳子

しのゝめのほから〳〵とあけぬれは　こゑのとけくもあしたつのなく　淺見とく子

なにはかた海邊にむれてなくたつの　なきさにあそふたつのむらとり　武政すみ子

見渡せはおほうなはらのしらなみに　ともよひかはすこゑそゆかしき　篠塚きん子

あし田鶴の立てるなきさに舟よせて　うちまかひたるたつのひとむら　竹山むつ子

打ちよするあらいそ波もしつまりて　見てこそゆかめうらのまつはら　佐藤ひさ子

いそちかき松のこすゑにきみか代を　いはほのうへにねふるたつかな　大友はつね子

磯ちかく打ちむれてなくあしたつは　千代に八千代とたつそなくなる　高田ふさの子

きみか代を千代と祝ひてもろともに　わかおほ御代を千代とほくらん　小島さた子

初日かけのとかにてらすうみの邊に　うみ邊にむれてあそふひなつる　岩田とみ子

打ちよする女波男なみもしつかにて　千代よふたつのこゑさやかなり　野田ともね子

月かけのさすやうみ邊のゆふかせに　まつはらとほくあそふたつかな　竹内鶴子

たつのなく音もいとあはれなり

そら晴れてなきさに遊ふひなつるの
　千代よふこゑそのとけかりける　寺本ふじ子

あらいその岩打つなみの音たかく
　千とせをかけて田鶴そなくなる　佐原すゑ子

あけ渡るうらのまつはらきりはれて
　千代呼ふたつのこゑそきこゆる　原田ゑつ子

むれつとひ海邉にあそふあしたつは
　をさまる御代をいはふなるらん　關口きぬ子

なみ風もなきになきたるうなはらに
　千代よふたつのこゑものとけし　中村さた子

四方の海なみもしつけききみか代は
　たつもなきさにむれあそふなり　松本はま子

なみよする舞子のはまのあし田鶴は
　千とせさかゆるまつにすむらん　瀬田かね子

さゝれ波よするうみへにきみか代を
　いはひてたつもまひうたふらん　伊藤ふさ子

朝日さすありそにむれてまなつるの
　千代のこゑこそたかくきこゆれ　野村きよ子

たえまなくしら波よするいはきしに
　なれてさわかぬたつのひとむら　渡邊むつ子

なみよするなきさの松にやとりゐて
　千代よろつよとうたふたつかな　島崎いさ子

君か代をいはふひなつるなかはまの
　いそうつなみのおとものとかに　櫻井貞子

四方のうみ浪しつかなるきみか世は
　くにのさかえをうたふつるかな　小野さは子

しろしめす君をことほき千代ませと　阿佐登代子

さゝれ波よするうみ邉にともつるの
　たつなきわたる四方のうみ邉に　人見せい子

しほの山さしてのいそにひなつるの
　きみか代いはふこゑものとけし　木野戸靈子

あさひさす海邉につとふあしたつの
　わかきみか代を八千代とそ鳴く　中島さき子

まなつるの千代よふ聲そきこゆなる
　千代よふこゑもにきはひにけり　桑田たみの子

あしたつの千代よひかはす聲きけは
　かすみわたれるいそのあたりに　關口いく子

波間よりいつる日かけのあきらけき
　よるなみさへものとけかりけり　長谷川松子

海のへのまつの木かけになくつるの
　御代をいはひてうたふつるかな　寺田八重子

朝またきはまへにいてゝなかむれは
　千とせをいのるこゑきこゆなり　二神せつ子

和歌の浦やなきさにあそふあしたつは
　まつはらとほくたつなきわたる　海野桝子

海の邉のあさひさしそふまつか枝に
　千代のこゑこそたかくきこゆれ　坂本さか子

四方の海をさまる御代をことふきて
　むれゐるたつのこゑものとけし　杉村さき子

須广のうらやしらなみよする松かけに
　うみへにたつのなきわたるらむ　大野よね子

君か代のつきせぬさかえうたふらむ
　よろつようたふまなつるのこゑ　藤本しづ子
　いそへにちかきつるのひとこゑ

海へなるる松の木かけにゐるたつも
きみか千とせをいはふなるらむ　[illegible]友初子

うちよする濱もしつけき住の江の
まつの木かけにつるそあそへる　高木ふみ子

おほ海のなみ路をわたるまなつるも
きみか代をこそいはふなりけれ　武田なか子

田子のうらやなきさにたてる老まつに
にむれゐるたつのこゑものとけし　早川はつ子

はまのへになつさひ遊ふあしたつの
こゑものとかにきこゆるかな　柴田ふじ子

わかのうらけ和歌の浦わにきて見れは
千代のともつるなきわたるなり　松下ふみ子

うちよさる濱もしつけきうなはらに
千代よふたつのこゑそきこゆる　田部井ふく子

旅ひともつゑをとゝめてきくならん
まひ子のはまのともつるのこゑ　渡邉かう子

須磨の浦やしらなみよする岩か根に
ちよのともつるこゑかはすなり　岡田やす子

ひさ方のくもゐのとかになきまれる
おほ御代いはふいそのひなつる　齋藤さよ子

汐ひれはうみへにさわくあしたつの
千代よふこゑものとけかりけり　是永つる子

よものうみ濱しつかなるきみか代を
いはひかほなる千代のともつる　瀬尾すま子

四方の海しつけき御代をいはひつゝ
いそへにたかく田鶴そ千代よふ　百瀬まつゑ子

のとかなる青うなはらのいそちかく　[illegible]海すみ子

きみか代うたふひなつるのこゑ

きみか代ははまのまさこの數よりも
なほおほかれとたつなきわたる　堀越まち子

ゆふ月のはまへにさしてみそらとふ
つるのなく音もさやけかりけり　湯本せん子

きみか代をはまの眞砂にたくらへて
いそやまゝつにうたふたつかな　飯沼田[illegible]代子

おほ君の御代なかゝれとひなつるの
はまのまさこやかきかそふらむ　城田しげ子

和歌の浦やふれこきゆけはこゑたかく
むれゐるたつのたちさわくかな　松澤澤子

朝日かけのほるうみ邊になくたつの
ともよひかはすこゑのゝとけさ　益岡もと子

おほ君をちよといはひてあしたつも
いそにまさこをかそへかほなる　鈴木たま子

四方のうみ濱しつかなる君か代を
いはひてたつもまひあそふなり　小貫まつ子

打ちよする波まにあそふあしたつの
こゑもすかたものとけかりけり　桑田すの子

松かけのきよきはまへにあしたつの
ちよゝろつよとまひうたふかな　今井たい子

なみよするいそへにむれておほ君の
八千代をいはふたつのもろこゑ　安藤ひさ子

きみかよを八千代といほふひな鶴の
こゑものとけしいそのまつはら　濱口こゑく子

しら波のよせてはかへるまつかれに
いとやすけにもれふるたつかな　須佐きん子

朝日さすうみ邊はるかになかむれは　なみうちはふきたつそなくなる　宮武てる子

なにはかた潮干にあさるあしたつも　千代とうたひて御代いはふらむ　高塩こう子

あらなみのよするはまへの松か枝に　千代をことほくあしたつのこゑ　林きみ子

うちよするなみしつかなる海の邊も　千代呼ふたつのこゑそめてたき　柴田のぶ子

住の江や千代のまつはらすみかにて　むれゐる田鶴のこゑのゝとけさ　森脇さね子

あさほらけふた見か浦を見わたせは　こゑうらゝかにたつそなくなる　倉田まつ子

住の江のきよきはま邊にひなつるの　千代をことほくこゑそきこゆる　増戸そで子

ぬは玉の夜はあけぬらしわかのうらや　あしへのたつのこゑさわくなり　岩田よれ子

うちよする波のしふきにぬれつゝも　千代よひかはしたつそむれとふ　林みほの子

なにはかたあし邊に遊ふひなつるは　いくち代かけてなきわたるらむ　金井ゐき子

ゆく舟の帆かけとゝもにとふつるの　千世のこゑこそのとけかりけれ　佐藤わき子

まつか枝に千代よふ鶴のこゑきけは　いそのあらしものとけかりけり　關口きせ子

なにはかた汐みちくれはあしたつの　ともよひかはしなきわたるかな　飯塚まつ子

わたの原おきつしほかせ身にしめて　千代よふつるのこゑそのとけき　篠塚たけ子

かせたねて濱しつかなるなにはかた　ともよふつるのこゑのゝとけさ

わたの原いそのしらなみうち散りて　とほくきこゆるたつのこゑかな　正木たね子

のとかなるいそへに遊ふひなつるも　御代のさかねをうたふなるらん　關口きれ子

うみつらにかゝやきわたる朝日かけ　のとかにあそふつるのひとむれ　岡田まち子

見わたせはさゝなみよするはま松に　千代をこめたるたつのひとこゑ　杉山君代子

打ちよする濱のしらはまゆふなきに　いそやまかけてつるそむれとふ　菊地かね子

うちわたす青うなはらをまなつるの　千代よふこゑもくしらさりけり　三輪かなり子

うなはらの濱しつかなるお国御代に　はまへにあそふ田鶴のひとむれ　林あい子

うみ邊なる松にすたちてさやかにも　なきこそわたれひなつるのこゑ　大西悦子

ゆたかなる御代祝ふらんまなつるの　ともよひかはすこゑものとかに　松平ゑい子

年をへていろもかはらぬすみよしの　まつにむれくるあしたつのこゑ　積山鏡子

一月一日兼題

新年の詞

天

東京本郷區根津須賀町二番地富島方　中村りき子

門毎にたちならぶ松のみどりは、御代萬歳のいろをあらはし、みそらに舞ふたづは、君がよはひの千世萬世の後までもと壽きて、實に、年のはじめばかり、目出度うれしきものはあらじ。

そも、ゆきてかへらぬとし月の流れてめぐり來る年の始は、そのむかし、我がおほみおやの、皇國はじめ給ひしより、數へ難きばかり過ぎぬめれども、世々の帝、御仁の御心ふかうおはしまし、民を愛しみ給ふ事大方ならず。如何なる幸にてか、此の御仁心あつき帝の御世に生れあひ、この目出度新年を迎ふらむ。

あはれ、時も長きにかゝる御宇に、土地も廣きにかゝる國に、生を得て、かぎりなき御惠の露にうるほふ、吾が四千萬同胞の諸子等は、如何にして、この目出度としのはじめを壽かんとする。玉の宮居にも、紫の雲たなびき、御庭の松は、祝ひのいろをあらはし、梢に巣くふつるは、千代となくなるを。いざ、我等も共に千代の萬壽をとなへばや。

かぎりななき御世のさかえはときはなる
まつのみどりにあらはれにけり

地

東京本郷向岡彌生町三　横尾八重子

のぼる朝日のかげうらゝかに明け初めて、立ちかへりたる初春は、あめつちの姿かはりたらむやうに、空とぶ鳥の聲さへも、君が代のゝどけき春をは、千代〳〵とことほぐめり。大路にむきて羽根うちかたして女子のたのしげなる、屠蘇にゑひてはむつまじう笑さゞめく聲などにも、治まれる世のさま見えて、こよなううれしきかぎりになむ。

人

肥後國菊池郡城北村　佐々木有隣子

新玉の年のはじめは、昨日にかはりて、むらきもの心をはじめ、ものみな、洗ひあげたる器のごとくになんおぼえぬる。門の松には、旭旗たてそへたるに、朝日影、うるはしくにほひかはし、床上の机には、鏡餅に、うづたかくとりそへたる、千歳ゆ鶴葉をかひしきとして、海老、野老、橙、

するめ、御代をことぶく品種を、横山のごとおきたらはし、先祖の神靈殿にも、かたのごとく供へまつりて、父母兄弟の親族つどひて、神酒に、齒がための餅のあつものを　いや盛にもりて、杯とりかはし、おのも〳〵うたへる歌のうち、いやはてに座をしめつる末弟のを、ひとつことにしるして、新年の詞とす。

日のみはた朝日のかけにかゝやきて
　年のはしめのかせのゝとけさ

（以下原稿到着順）

福原菫子

新らしき、年立ちぬれば、久かたのそらにはたゞよふ雲もなく、ほの〳〵と霞わたりて、さしいづる朝日の影いとうらゝかに、御旗に映づる長閑けさ、さすがきのふに似ず、めでたさかぎりなき、今日といへば、都も鄙もおしなべて、さかゆ行く御代を仰ぎことほがぬ者はあらじ。老も若きもうちとけて、屠蘇汲みかはす、よろこばしさ、うらやすの民と生れ來し幸なるも、大君の深き御惠みによるにこそと、いとゞ貴く、かしこくてなん。

杉山君代子

新玉のとしたちかへりぬれば、東の海をいつる初日いとうらゝかに、たちならぶ松のみどりは、千とせの色をあらはし、うめにこづたふ鶯も、治る御代をことほぎつ。實に、年のはじめこそ、目出度ものにはありけれ。昨日まで、よき年むかへなんと、行き通ふ人、足繁き町々も、一夜に新まりぬ。あはれ、今日は、一とせの始めにて、萬のわざもあらたまりぬる日ぞと思へば、心に望もかずかずおこりて、樂しさとゞめ合へず。かゝる日なれば、老若男女おしなべて、君が御かげを仰ぎつゝ、千代萬代といはふなり。かしこくも、御國は、上には大君おはして、深き御めぐみの下に、四方の民草うるほひて、五穀ゆたかにみのり、四海波おだやかに、君臣の分あきらかなる大御代に生れあひて、此のたのしき初春を向へたるうれしさ、はた、何にかはたとへむ。おのれ、此の目出度き日にあたり、拙き筆もて、一ことかくなん。

霞山・みゑ子

年たちかへる雲井の空も、きのふとかはり、心もそひてのどやかなり。朝まだき、若水くむ頃より、門ごとに松竹たてゝ、ことぶくならむ。旭さす軒のたるひもうちとけて、ゆかしくにほふ梅も、何となう春めきて、鶯のひとこゑきかまほしきに、いづこならむ、ひなつるの千代よぶこゑかすかにきこゆるも、たぐふべきかたなくぞあるや。高き賤しき小女子が羽子うちはやしたるも、一しほをかし。夕べになれば、燈のかげあきらかにて、この年の幸なむこもりける。

堀内ふさ子

うぐひすのこゑより明けし初日影、ゆたかにさしのぼり、民草は萬代の齡をほくとて、日の御旗高くかゝげて、榮ゆく御代萬代と、年ふる松竹のみどりを植ゑ添へ、しめ縄を軒に引きはへ、千年をかされて住む田鶴の萬代かれて舞ひ上り、軒端の梅も、開けゆく御代に後れじとかほるに、うぐひすの初春をうたひ、千代こめて打だす祝砲の勇ましく、都もひなも、おしなべて、汲みそむる若水に心を清めて、千代に八千代を重れ、君が代を祝ひつゝ、祝ひを盃にたゝへて、屠蘇の香にゑひつゝ、小女子は、羽

羽子つきあそび、男の子等は、いかなあげて、をちこちのおほぢ、こちに祝ひつゝ、ひとつむしろに、親しきかぎり打つどひ、かるた、双六よと興じ、波しづかなる君が代の初春を、祝ふ今日こそ楽しかりけれ●

林[illegible]美子

ほのぼのと明け行く空とゝもに、新らしき年は來ぬ。吹き通ふ風も、なんとなうのどかにて、門の笑竹をもてあそび、ものみなはおくれがちなりと、ほこりかに、軒の梅が香、ほのめき來つ。たたひらひらとなびける御旗も、操をかへぬ松かざりも、皆、新玉の年を祝くが如し。遠くちかく聞ゆる幼子が手鞠のうた、羽子の音、皆、治まれる御世のしろしとぞ聞かるゝかし。あなうれし。此の大御代に生れしぞ幸なる。己れも、白雲の上に千代をことほぐあしたづとゝもに、此の大御代の、八千代までもさかえまさむことを祈るになむ。

金田とみ子

年ごとにすゝみゆく大御代のすがたを、いはふにや、門邊につゞく松竹は、百千年のいろをふくみ、かゝぐる御旗は、かぜになびきて、いとたのしげに見ゆ。幼きわらへは、けふをはれとや着かざりけん。羽子つくにも、こゝろ置かるゝふぜい、いとおかし。ひろき都も、所せまきまでに、あるは行き、あるはかへり、祝賀の辈みちみちたり。そも、今日はいかなる日ぞ。我等、幸にして、此の治まれる大御代にうまれあひ、憂うき事もなく、すぐすぐとおひたちし事のうれは、そのたのしみ、何にかたとふべき。代々の帝の御めぐみ深きは、今更いふもおろかなれど、かしこくも、國の父君とも母君とも仰ぎまつるきみぎみのみめぐみは、いくひろのみなそこよりもなほふかきに。いかにむくい奉らんとおもふとも、其の萬が一も叶ふまで。さはいへ、われ、其の分をしり、學びの道をいそしみて、己が務を忘れず守り、高く深きみめぐみの幾分をむくいたてまつらでやはと思ふも、愚なる身には、いとをこがましうや聞ゆらむ。さはれ今日のあゝうれしさよ。あはれ今日のよろこばしさよ。

小野はま子

明治三十五年おそしとまち居りしに、月日の過ぎ行くは早きものかな。早や今日ともなりぬ。古語に、月日は水の流るゝが如しと云ひしごとく、今より四十年五十年とならん迄は、年久しからんと思へど、皆、夢の間にすぎなん。されば、今よりは、一時たりともあだにすごす事なく、はげみ學ばんな。

今井勢以子

秋去りて冬來り、昨日までは、歳暮と過ぎたりしが、明けて、卅五年の新玉の春を迎へぬ。今日は、風靜にして、一天の曇りなき長閑なる元旦なり。門口に松竹たてかざり、家毎に國旗を立て、市中は賑ひ、貴き賤しき小女子が、樂しき遊びに餘念なく、實に快き目出度今日の日は、いつの世までも此の日の如く、君が代は、千代八千代まで榮ゆくくて、國家安穩なる年を祈り、一年の計り事は、春にしあれば、今日の目出度日より、一年の計を成し行ひて、益繁昌たらしむる事を祈るになむ。

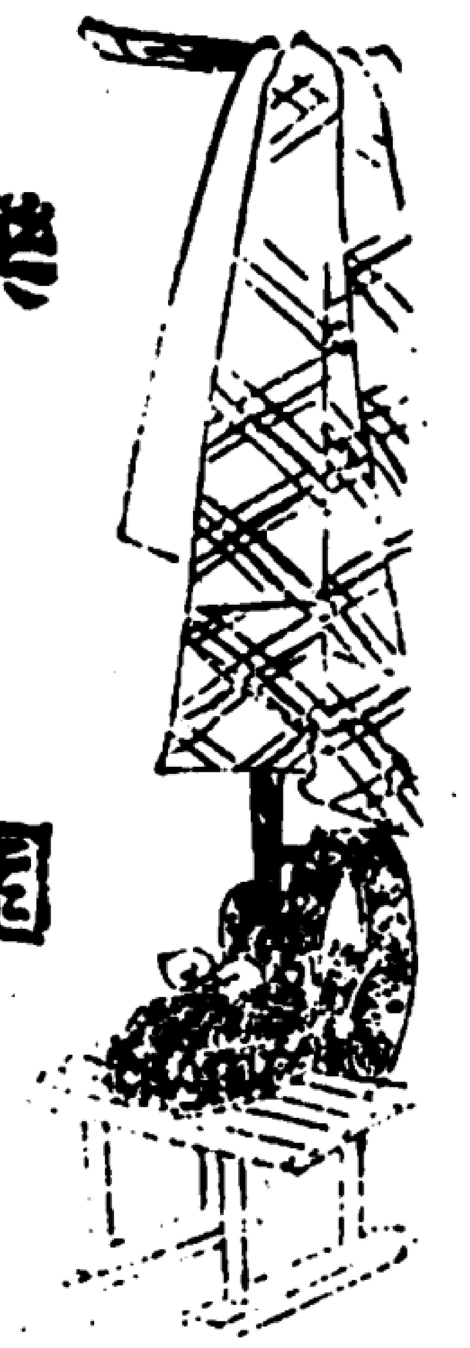
佐野よれ子

とよさかのぼる天つ日の御旗の、なびくかどごとに、千代の松竹をかざりて、家々にては、餅屠蘇など祝ひ、童女の羽子つき、鞠つきて、餘念なきも見るさへのどかなるに、かしこかれど、宮城にては、我大君諸々の臣等の、拜賀を受けさせ給ふ。御門邊には、車をかけ、馬をはせゆく、やんごとなき人々のきらきらしさは、これみな、大君の光なり。故に、人もをほ、たがひに、新玉の年を目出度賀するとゝもに、一年の計を立つるこそよけれ。

樂 園

川野峰子

あら玉の年たちかへる今日の日は、四方の景色も、いとゞのどやかに、のき端に立てる日の御旗は、朝日に輝き、門には松竹を立て、都も鄙も、貴きも賤きも、人毎に悦の色あらはれ、空にあがれるいかのぼり、戸外にきこゆる羽子の音に、自ら、いくとせ變らぬ御世をことぶくごとし。われ等は、かく目出度き御世にうまれあへることこそ、うれしくも忝けなけれ。



天津籠城中の鄭夫人（六）

森林生記

今回は話頭が少しく枝葉に渉るけれど、此に、聊か述べて置きたいことが二件ある。一つは、前回の終りに、一寸記したる、天津の新聞國開報の記者、方若夫妻が、日本領事館に籠城せることで、まう一つは、天津に籠城せる英國の二少年が、鄭領事に頼つて、救を日本軍に求めんとしたる譚である。

さて、方若と云ふ人は、一度清國政府から、捕縛しやうとした事があるさうで、それは、清國政府のことを新聞紙上に、攻撃したからのことで、其の時などは、我が領事鄭永昌君が、頗る骨を折られて、自ら天津知府の許に到り、

「方若は、日本へ歸化した人である爲に、清國政府の手に、捕縛されるの理由なし。」

と迄論じて、遂に、其の捕縛を免れしめてやつた位ゐであるげな。それであるから、彼等夫妻は、領事夫婦を徳として、其の恩義に服して居たのであるが、俄に、故郷なる浙江寧波府へ歸りたいと云ふから、濱子夫人は、之を止め「今御出發になるのは、危險だから、最う暫らく、お竢ちなさい

まし。貴夫妻方は、日本へ歸化したとなつて居て、皆支那人が、爾思つて居ますから、此の居留地を一歩出れば、義和團や支那兵のために、何樣目にあふか知れません。最う其の中には、日本を始め、各國の救援軍も來ませうから。」

と云つて、良人領事と共に止めましたゆゑ、方若夫婦も、濱子の忠告に從つて、一時は思ひ止まりましたが、此の小豹と云ふ婦人は、日本で育つたから、普通の支那婦人と異り、足が大きくて、それで、氣象が雄々しいから、中々活潑に働いて、看護の手傳ひなどをして居る。或る日、小豹は、濱子に向ひ、

小豹「奧さん。繃帶にする布切れが、最う無くなりましたが、何かありますまいか。」

濱子「宜しうムいます。何か見付けませう。」

と、暫し考へて居たが、良あつて、濱子は、莞爾と笑ひ

「眞とに好いものがありますよ。五月十日の、皇太子殿下御慶事の節、領事館でも、皇室の御慶事をお祝ひ奉つたとき、張た幕がありますから、彼れを截つて、負傷者に繃帶して遣つたら、誠に、皇恩負傷者に及ぶやうで、患者も、定めて、滿足するだらうと思ひますが。」

小豹「それは、成程宜いお思ひつきでムいます。此樣な有難いことはありません。」

と云ふから、そこで、濱子は良人に此の事を謀ると、領事も至極宜しからうと許されたので、早速、白金巾の幕を取出し、濱子夫人と小豹と、之を截り裂きて、繃帶に用ゐることになつた。此の時分には、勿論、軍醫や看護手が居るから、其の人々に繃帶の仕方も敎へられましたが、始めから、爾巧妙は行きません。

小豹は、右の手で、自分の左の手頸に、繃帯の布片を卷いて見ながら、之を濱子夫人の前に差出し、

小豹「奥さん。詰り斯う云ふ風に爲れば、宜しいでムいませう。」

濱子「小豹さん。それでは貴姉、餘り緩ひぢやありませんか。」

小豹「だつて奥さん。自分の手に自分で繃帯するのですから、爾上手には出來ません。何誰か、繃帯のお草紙になる人があると好いですがねえ。」

濱子「それは、誰れも厭がりませうよ。」

と云つてる所へ、恰ど、小豹の良人方若が來たから、小豹は、幸ひと笑ひながら、

小豹「チヨイと阿郎……。オホヽヽヽ。」

方若「何を笑ふ。」

小豹「阿郎のお身體を、暫く貸して下さいな。」

方若「吾れの身體を借せッ……。如何する。」

小豹「チヨイト、阿郎のお頭を借りて、繃帯のお稽古を爲たいと思ふんですよ。」

方若「では吾の頭を、繃帯の草紙にするのか。それア酷い。」

小豹「マア何でも好いから、其處へ掛けて在らつしやいな。」と良人の方若を、無理に側らの倚子に掛けさせ、布片を取つて、其の頭をグル〳〵卷き始めるから、

方若「コレ〳〵、何をする。コ之は、ひ酷い。」

と云ふ中に、ハヤ頭から顔から、一面に繃帯を卷かれて仕舞つたので、方若先生繃帯の中から、目許りパチクリ〳〵。

「ウムー〳〵。ア、苦しい〳〵。」

その風體、恰も眞實の負傷者の様であるから、見て居る濱子夫人も、思はず失笑したことがあるげな。

當時は、居留地中不潔のものが多く、我が領事館などにも、大變に蠅が出來まして、それが患者に群集ので、安眠が出來ない。其の蠅を追ふばかりでも、餘程な看病になるのであるから、籠城者の一人、遞信書記官谷榮太郎氏の令閨、辰子抔いふ人は、姙娠して、已に臨月であるのにも拘らず、「妾しも蠅位は追ひませう。」と云つて、支那團扇を持つて、患者の側に立ち、惰りなく看護をして居たさうであるが、實に、殊勝なる志であります。又、天津の海軍用達商をして居る洗濯屋、伊野佐一郎氏の妻君なども、中々活潑で、最と忠實に立働いて、患者を劬つたさうですが、殘念にも記者は、此の婦人の名を、記臆の外に逸して了つた。

斯くして、辛くも、其の日を送る中、廿日となつた。此の日は、一寸、敵の砲撃が緩やかになつたが、英吉利の工部局に殘つて居る婦人の中にも、病人が出來たと云ふから、濱子は、其の方へ見舞に行き、領事鄭永昌君も、其の迹から參りましたが、此處に避難して居る婦人も、今日は、少し砲撃の緩やかなためか、前日に比ぶれば、皆容貌にも、幾分か喜びの色を顯して居る。スルと、一人の英人が、領事の傍に來り、丁寧に禮を爲して、「尊官は、日本領事でありますか。」と問ふから、鄭領事「ハイ小官は、日本領事であります。」と應へた。

田舍莊子

金津常十郎

明治三十四年は、もはやすぎ去りて、三十五年は來れり。實に光陰は矢の如く、なすわざもをへずして、新たなる年を迎へぬ。されば、年の始の徒然に、[illegible]等の笑を催す種にもなら

んかと、何人のものせしかはしらねども、わが幼年のをり、寫しおきけるまゝ、おくりまゐらすになん。

雀蝶變化

雀蝶に謂つて曰く、汝の俗姓を見れば、菜虫なり。汝がむかしは、畠にまろび、自由にかけまわることもならず、漸く、菜の葉にとまりつきて、蠢々としてありつらん。今化して蝶となり、花をたづね、香をおひ、飛行自在の身となりぬ。むかしに比すれば、其の樂幾何ぞや。今われ小鳥なりといへども、翅あり、足ありて、心のまゝに飛びあるく。しかるに、われ、九月は、海水に入りて、蛤に成るといふ風聞あり。彼の蛤を見るに、目鼻もなく、手足もなし。甲をかぶりて、おり／＼舌を出せども、何を喰ふといふことも知らず、極寒にも水中に轉び廻り、砂に埋もれ居るばかりなり。われかかる身に成りたらば、如何せん。憖に生れながらの蛤ならば、此の筈とおもひ居るべけれども、一度雀に生を受け、山林の樂を極めし身の、又變化して、水中の艱苦を凌ぎ、潮の大小にしたがひて、瘠せつ肥えつするならば、いかばかり、むかし戀ひしく、迷惑ならんと、今より、このことおもはれて、歎きかなしむのみ。汝は、如何なる善果ありてか、菜虫より立身して、かゝる自由の身とはなる。われは、如何なる惡因ありて、飛鳥より下落して、異なるものとなることよ。と涕を流せば、蝶聞きて曰く、歎くことなかれ。汝が下落にもあらず、わが立身にもあらず、それ／＼氣ありて集り、物となる。變化して形を替ふる、われ何の心かあらんや。菜虫より化して蝶となるといへども、そのとき、如何樣して變化したることをおぼえず、まして、菜虫のときのことは、忘れ絶えて

たり。今思へば、定めてそのときは、桑虫相應にくらしたるなるべし。むかし、莊子といへる人、夢中に蝶となりて、飛あるく。莊子は、われは、もと人なりといふことをしらず、夢さめて本の莊子なり。却つて曰く、莊子、夢に蝶となりたるか、今又、蝶が夢に、莊子となりたるかと、變化の理、またかくのごとし。汝九月變化して、蛤になるときは、天氣自然に動きて、覺えず海に入るなるべし。このときに至りて、何の心かあらんや。思ふに、醉ふて眠るが如くなるべし。既に蛤と成りて後は、今の雀の心は、絶えてなくなり、自からの蛤になりて、極寒にも水中を家とし、寒きこともなく、轉びまはりて、相應に世を渡るならん。形變すれば、心氣共に變するは、理の常なり。理は形象なく、氣中に存す。既に雀の形あり、雀の氣あれば、雀の理存す。又、蛤の形あり、蛤の氣あるときは、蛤の理存す。形の心は、その形に從ふものなり。形滅するときは、この形の心なし。むかし、老夫あり。臨終に及びて、旦那坊主來りて、念佛を勸めければ、老夫眼を開きて、萬物無より生じて、無に歸す、何ぞ輪廻流轉することあらんやといふ。坊主の曰く、萬一ありたるときは、如何し給はん、唯、理をまげて、念佛を申したまへと。老夫頭をふりて、假令、生れかはるといふことありとも、さして苦にもならず、御坊は、母の胎内に在りしときのことを、おぼえ給ふか。生るゝときは、如何樣の心持にてありしぞ。語りたまへといふ。坊主腹を立て、誰か一人これを覺えたるものあらんや。其方は、おぼえ給ふかといふ。老夫曰く、われもおぼえず、近く生るゝときのことをさへおぼえたるものなく、まして、遠き前生のこと、誰かおぼえしものあらんや。しからば、この後、ま

た何に生れたりとも、今の心は、絶えてなくなり、蟻になりとも、鼠になりとも、その生れたるもの丶心になりて、相應にくらすべし。一生は夢の如しとのたまふ。來世も亦一生なり。是又、夢の如くにてぞあらん。然らば、生を隔て、しれぬことを今より苦勞にするも、愚痴なり。唯死ぬと思ひて死ぬるが、當下の一念ならむ。これ即ち成佛なりといへば、坊主、言葉なくして退きぬ。
今、薯蕷變化して鰻となり、腐草化して螢となる。試みに、鰻と螢に向ひて問へ。何ぞ、薯蕷と腐草との心を知らんや。薯蕷腐草、又何の業報かあらんや。陰陽の氣集りて形を成し、その氣この形の內を運りて、動止語默の用をなす。生氣盡きて、形を離る。これを死といふ。この形に生氣あるゆゑに、喜怒哀樂好惡の心あり。この形死して、後は生氣盡きぬ。何によりてか、この心殘らんや。

火の熾なるも、薪につきて燃ゆるなり。薪盡くるときは、火おのづから滅す。餘煙ありといへども、久しきこと能はず。此の火滅すといへども、又、金石の中より出で、火猶傳はる。既に消えたる火、又金石の中にかくる丶にあらず、汝默識すべし。言說の盡すところにあらず。

家庭童話

五十園德文

二　たまや〳〵（二）

春雄『たまや、目をおさましよ。今、皆が、お前の事をお話してゐるではないかね。』

母『たまは、眠つてゐるのではありません。今ここは、猫の眼には、明すぎるから、幾分か、光線をさける爲に、瞼を閉ぢてゐるのです。もし、

こゝが、こんなに明くなくば、其の光線を、殘らずとりいれる爲に、瞼を、十分に、開きませう。猫は、光が消えて、私共には、眞闇で、何も見えない時にも、よく、物を見ることが出來るのです。』

お花『さうでなくては、たまは、鼠を、澤山に捕ることは出來ますまいよ。鼠は、晝間は、穴のなかに匿れてゐて、夜になつて、あたりが、すつかり靜りますと、食物をさがしに出かけるものでございますから。』

母『どうして、猫は、鳥を捕りますか。猫は飛ぶことが出來ませんのに。』

春『いえ、しかし、おつ母さん。猫は、飛ぶことは出來ないでも、木には上られますよ。私は、たまが、櫻の樹に上つてゐるのや、うちの家根の上にゐるのを、度々見ました。それで、鳥が、地におりると、そつと這ひ寄つて、急に飛びかかつて、爪でひつかけて捕るのです。』

母『それで、たまの體は、どこでも、それ〳〵に、用があるといふことが解りましたらう。何でも、知つてゐる人に、物を尋ねることを、鬱苦に思つてはいけません。きゝさへすれば、直におばえられます。』

春『私は、猫のひげが、何の用の爲に、ついてゐるか。合點がゆきません。』

母『そのお話をしませう。猫は、よく、藪生のなかや、木の間などをかけまはりませう。猫のひげは、口の兩側につきたつてゐて、物に觸るので、其の通り道が知れるのです。丁度、お前たちが、手で、物を觸つて見るやうなものなのです。何によらず、ひげのある動物は、自分の、通りぬけられる穴か、通りぬけられぬ穴か、直

に知られるのです。もし、其の穴が、自分のひげの通るだけ、十分に廣ければ、身體の通りぬけるにも、また、十分なのです。』

母は、たまを、下におろしました。すると、猫は、敷物の上に歩いていつて、すわりましたが、やがて、自分と、身體をあらひはじめました。

母『あら。たまをごらん！。たまは、毛皮の美しい上衣を着てゐることを知つてゐるのでせう。なぜといへば、それに、ほこりや、汚れめのつくのを、ひどく嫌ひますものを。……それで、自分の體を洗ふのを、決して怠りません。また、ごらん！。私共が、海綿や、手拭をつかうやうに、あの、舌と前足とをつかふのを。』

『お前たちは、猫が、泥道を歩いてゐるのを見たことがあるでせう。どんなに、氣をつけて、水たまりの間を、ひろひ道をして歩くでせう。さうして、又、汚すまいとして、一足々々に、どんなに、足を振るでせう。』

『泥をはねかして、履物や衣服をよごしたり、又は、髮も梳かず、手も洗はないで、御膳に就いたりする子供には、これが、どんなに、よい教訓になりませう。』

春雄は、母の話を聞きながら、自分のは、どんなかと、そつと、足をふりかへつて見ましたが、ひどく汚れてゐるに、氣がつきましたので、如何にも、はづかしさうな顔色に見えました。それで、又、心の内には、「どうぞ、この、自分の頭の髮の毛が、たつた一度でも、ひとりでに梳れるものならよいが。」と思ひながら、穢い兩手を、そつと、袂のなかに、匿さずにはゐられませんでした。丁度、その時が、食事の時刻でございました。春雄も、立ち去りましたが、やがて、お膳についた

時には、髪も、手足も、清潔としてをりました。



雪中祝　東久世通禧

こん年もゆたけさしるくふる雪に
うたへやうたへふゆ籠りして

國旗　高崎正風

國民のわかきこゝろをかとことに
かゝくとみゆる日のみ旗かな

新年梅　蜂須賀茂韶

新らしきこよみと共にひらきたる
梅にみそむるはるのいろかな

山影寫水　久我建通

よとゝもになかれ絶えせぬ谷みつに
動かぬやまのかけそうつれる

翠松　池田政禮

二葉より千枝も榮えてとことはに
みとりかはらぬ松のいろかな

窓前梅　水野忠敬

窓の戸をあくれは梅のかほりきて
こゝろのとけき朝ぼらけかな

松有歡聲　宮地嚴夫

ひさ方の雲井のたつもこのにはの
松にやとりて千代よはふなり

天城山　北郷久政

富士のねにつゝきて今か積るらん
天城かやまのみねのしらゆき

社頭杉　坂正臣

みつ垣の久しき世よりいはひきて

根さへにたかしもりのはこ杉

寒樹風　加藤義清

夕からすねくらもとむるこゑ寒し
あらしにさわく岡のかしはら

江水鳥　蜂須賀随子

厚こほりむすふ入江にうちとけて
ねむるはをしのつかひなり鳬

藤原百川公　近衛貞子

動きなき君かまことのこゝろもて
くにの御はしらたてかへに鳬

池雪　鍋島榮子

池にゐるをしの羽白くみゆるまて
ふりこそかゝれけさのはつ雪

初雪　前田朗子

中々にふかゝるよりもおもしろし
かれ木にかゝるけさのはつ雪

船中雪　南郷柳子

隅田川きしをはなれしゆきみふね
つゝみにみるも面しろきかな

氷　柳原愛子

夕風のふきかたよせしもみちはも
そのまゝこほる池のおもかな

夕雪　日野西廣子

吹風のわきてさむけきゆふくれの
そらより雪もふりいてにけり

車中雪　松平健子

花ならは嬉しからまし小くるまに
ちりくる雪のさむくもあるかな

水雷艇　佐藤艶子

日の本の小鷹てふ名もしるきかな
なみわけてゆく舟のすかたは

磯雪　服部磯子

はる〳〵と船こきいて、磯さきの
松の上しろきゆきをみるかな

新年の梅をよめる歌並に短歌

渡邊龍子

睦月立つ、今朝のあさけに、軒端には、みしめひきはへ、門邊には、松竹立て、よことほき、いやことまをす、我やとの、若木の梅も、松竹に、枝さしかはし、みしめ吹く、風そ匂ひて、うるはしく、咲初めにけり、みやひなる花そこの花、おもかしき、花そこの花、朝さらす、見れともあかす、夕さらす、見れともあかす、いや日けにつきて咲かなむ、梅の初花。

しめはへし軒にかをりてあら玉の
年立つ今朝は梅も咲きけり





雑報

雲のゆくへ

●迪宮殿下御種痘　大磯なる鍋島侯爵邸に在らせらるゝ迪宮殿下は、舊臘十四日、左の御腕に御種痘あらせられ、同十八日までは、五日目に渉らせられしが、至極善感の御模様にて、御體量も一貫八百九十五匁に増させられたる由。御乳人一名の後任は、白根中郡長へ御下命ありて、小林某女御採用になりしが、何故か御馴染なき爲め、御免になり、更に同郡長より、神田村の石塚はな、土澤村の石黒ぬひの二名を推薦し、其の內、一名御採用の爲め、履歴血統等を御取調あらせられき。

又、御召用の牛乳は、神奈川縣片野監督獸醫に御下命あり。去月十三日、片野氏は、岡本獸醫、神力技手と共に、大磯に出張し、長養舍飼養の短角種、デボン種の乳牛に就き、牛體理學的診斷、及び、ツベルクリン注射試驗、並に、乳汁の化學的檢査を行ふ、何れも佳良なりしにより、其の後、御召用に供しつゝありとぞ。

●小松總裁宮殿下大阪下向　小松總裁宮殿下には、舊臘十四日午前九時過ぎ、大阪陸軍地方幼年學校に賁臨あり。校長の御案内にて、生徒の授業、并に日課御覽あり。樓上にて、暫時御休憩の折、校附の武官に謁を賜ひ、十一時御歸館遊ばされたり、午後は、偕行社に開かれたる高野山興隆會に臨ませられ、九鬼副會長の御先導にて、式場に於いて、令旨を賜ひ、各宗信徒總代奉答し、次に、九鬼副會長の演說、高野山管長原大僧正の諭告ありて後、御退場、午後四時よりは、平野堺卯樓に開かれたる、同會の宴に臨まれ、一條の令旨を賜ひ、菊地知事は、來賓總代として、感謝の意を奉答したる後、御歸館あらせられしは、八時頃なりしよし。

●閑院宮殿下の御移轉　載仁親王殿下には、騎兵第二旅團長御拜任に付き、昨日、妃智惠子殿下と共に、千葉縣千葉郡津田沼村久々田御邸へ、御引移りあらせられたりと承りぬ。

●御陵祭　紀元七百八十三年、日本武尊の東征後、東國の都督に任せられたる御諸別王、即ち、景行天皇の御孫の御墓は、埼玉縣北埼玉郡樋遣川村と決したるにつき、昨年十二月二十日を以つて、祭典を行ひ、山車花火等の催しあり。村君村には、御父彥狹島王を祀れる横沼神社あるにより、御父子の禮を以つて、神輿渡しの神事ありたりとぞ。

●衆議院より献納の御花瓶　東宮御婚儀奉祝の爲め、衆議院より献納すべき一對の御花瓶は、高さ一尺三寸にて、一方には鶴、一方には鹿の素彫あり。いづれも、上部に、花喰島を金象嵌とし、其の下繪は、川端玉章氏、彫金は、海野勝珉氏にて、美事に出來したれば、さる廿五日を以つて、献納する筈なりきといふ。

梅のかをり

●良民の表彰　公共の事に勉めたる廉を以つて、今回賞勳局に於いて、藍綬褒章を下賜されたるもの、左の通り。

栃木縣下野國下都賀郡絹村　大橋東太

資性篤實、夙に村政に從ひ、尋て、村長に選まる〻こと三回、力を殖産に用ゐ、結城物産染業組合を起して、結城紬の聲價を擴め、養蠶傳習所を設けて、蠶絲業の發達を努め、小學校を改築して、兒童就學の便を與へ、樋門を新設して、絹川氾濫の害を除き、避病舍を建て〻、傳染病を防ぎ、殊に、居村大字中河原の地、水田稀少、米穀欠乏の嘆、絶へざるを視て、新に溝渠を鑿ちて、水利を通じ、以て、良田三十餘町歩を獲るに至る。洵に、公共の事務に勤勉し、勞効顯著なりとす。依て、明治十四年十二月七日、勅定の藍綬褒章を賜ひ、其善行を表彰す。

●四歳の小兒褒狀を受く　去年九月二日のことなりき。紀州海草郡紀三井林、小川勝次郎の次男、賢三（四つ）神前藤藏の孫、大造（四つ）外二名の小供、無邪氣に遊び戲れ居りしが、如何なる機會なりけん、大造は、誤つて水中に落ち、折しも滿潮なりしかば、其の儘押流されて、溺死せん有樣なりしに、他の小供等は、唯だ、アレアレと叫ぶのみにて詮術を知らざりしに、賢三は、斯くと見るより、逸早く、大造の宅に走り行き、其の由を告げるにぞ、皆、驚きて、同村の滿原久太郎と云ふ者、眞先に駈付けて、川の中へ飛入り、之を救上

げ、さまぐ〜手當を加へて蘇生せしめたるが、此の事、縣知事に聞え、四歳の小兒あるに、頓智の程感ずべきものなりとて、左の褒狀を與へたりといふ。

和歌山縣海草郡紀三寺村　小川賢三

明治三十四年九月二日、同村神前藤藏孫、大道なる者、同大字大門川に於いて、遊戲中、誤つて水中に轉落の際、幼稚の身を以て、之を急報せし段、殊勝に候事。

明治三十四年十一月十六日

和歌山縣知事從六位勳五等　椿泰一郎

●●美擧　山形縣南置賜郡にては、赤貧者の不就學兒童をして、就學せしむる目的を以つて、郡長以下共同貧民保護會を設置し、有志者の醵金を求め、貧者の程度を見計らひ、金錢を惠與し、且、弱者を救護する方法を立てたりとぞ。世上の好模範といふべし。

花雪紛々

●●●遺芳會　吉野山如意輪塔を再建し、之を永遠に保存する目的にて、組織せし遺芳會は、贊成者多く、漸次盛大に赴く由。遺芳會趣意書に記す所、『かへらじとかねて思へは梓弓なきかずに入る名をそとゞむる』と。嗚呼、是れ小楠公が、正平二年十二月二十七日、我大和の國吉野なる行宮に詣りて、陛辭し畢りて、後醍醐天皇の御陵に拜別し、去るに臨み、如意輪塔の扉板に、鏃を以つて題したる和歌にあらずや云々と。また、美擧といふべし。

●●●●●●●●帝國敎育會女子講習會　帝國敎育會にては、從前より、中等敎員講習所を設置したるも、女子の爲めに遺憾なしとせざるにより、特に、女子講習會を開設し、毎日曜日午前に於いて、其の講習を行ひ、以つて、高等女學校初級の敎員たらんと

する女子に、相當なる學力を附與せんことを期し、這回の講習は、教育(篠田利英)國語(岡田正美)數學(森岩太郎)の三科なれば、一方には　小學校本科正教育の資格ある女子をして、別に中等教員の免狀を得ざるも、高等女學校の正當なる教員たるを得しめ、一方には、小學校尋常科本科正教員、又は、高等科本科准教員の資格を有する者をして、高等科本科正教員の資格を得せしむる上に於いて、大に便宜を與ふるといふ。講習の場所は、教育會講堂にして、講習期限は一ヶ年、講習日は毎日曜日、講習科は毎月六十錢、入會料五十錢、入會申込は、來年一月三十一日までありといふ。

●●●●●●日本赤十字社職制變更　日本赤十字社に於いては、社團法人の組織に改め、其の筋の許可を得たるものにつき、職制を變更し、社内に總務部、會計部、準備部の三部を置き、總務部に、部長一人、副部長一人、會計部、準備部に、各部長一人を置き、而して、總務部を分ちて、庶務課、記錄課、社員課、會計部を分ちて、主計課、出納課、用度課、準備部を分ちて、人員課、材料課、教育課とし、總務部長に平山成信、副部長に笠原光雄、會計部長に佐和正、準備部長に清水俊の諸氏を擧げたりと。

●●●●●●學生體格の不良　大學生以下にして、相當の學力を有する學生が、一般に體格の薄弱なるは、恐く可きものあり。其の原因の何れにあるかは、最も研究す可き事にして、殊に、今日各學校に於ける體育上の點に至つては、最も注意を要するに拘はらず、一昨年に於いて、徴兵檢査の結果を見るに、體格にて、甲種を得たるもの、僅に一名なりしとぞ。今、本郷聯隊區司令官平石信壽氏が、大學生以下の學生に對し、體格の良否を調査した

る結果は、左の如くなる由。而して、甲、乙、兩種は、合格者にして、丙丁は不合格なり。

△三十三年徴兵検査表

受検者人員　三十人

内　甲種　無し　乙種　五人
　　丙種　十七人　丁種　八人

△三十四年同上

受検者人員　七十六人

内　甲種　一人　乙種　十八人
　　丙種　四十四人　丁種　十三人

△三十三年一年志願兵受検者

受検者人員　六十三人

内　甲種　九人　乙種　廿八人
　　丙種　廿六人　丁種　無し

△三十四年同上

受検者人員　五十人

内　甲種　八人　乙種　十五人
　　丙種　廿七人　丁種　無し

●露國人の西藏探險隊　露國地理學協會は、此の程、駐清公使レッサーの手を經て、西藏探險隊の指揮者、コヅロッフ中尉よりの音信に接したる由なり。此の探險隊は、一昨年、右の地理學協會に依りて、編成せられ、中央亞細亞に向け、出發したるものにして、一時、其の消息を絶ちたるより、死滅したりと傳へられたるなり。然るに、一行は、去年六月十三日、無事ツアイダンに着し、西部西藏のチヤムドを經て、黄河の水源ある露西亞に達し、去年八月一日、キヤクタに向ひ、今十二月初旬、同地に着する筈なりとぞ。

●高貴の婦人と射撃の高手　高貴の婦人中に、射撃の高手と稱せらるゝもの少なからず。葡萄牙王后は、其の一にして、嘗て、狙を誤りたることなく、此の程は、人命を救助して、獨逸より勳章を得られたり。又、伊太利の王后は、モンテーリスト島に於いて、屢、遊獵せられ、頗る妙手と稱せらる。バウアリア公夫人、及び、夫人の妹、ルクセンブルグ公夫人、ヘッス大公夫人も、亦、遊獵を好まれ、英國王后、及び、王女等は、釣を好

まぜらるゝ由。

●瑞西の平民的教育　瑞西の女兒は、四歳にして幼稚園に入り、十八歳を以つて、教育を終る制度なるが、生徒の家計如何に依りて、學校に區別あることなく、都市たると僻邑たるとに論なく、皆、同一の教育を受け、寄宿舍の如きも、何等の差別を設けず。全然平民的なりとす。而して、瑞西の女兒は、毫も仕事を厭はず。其の仕事は、如何程賤しきものにても、甘んじて之に從ひ、富貴の家に生れたる女兒と雖も、仕事を爲すを人に見らるゝを恥とせざる由。

●暖國と長命者との關係　氣候溫暖なる土地は、高緯度の土地よりも、長命者多きが如し。獨逸は、人口五千五百萬を有し、百歲以上の人、七百七十八人あり。佛國は、人口四千萬、百歲以上の人、二百十三人あり。英國は、百歲以上の人、百四十五人、瑞典は十人、諾威は廿三人、白耳義五人、丁抹二人、西班牙四百一人、セルヴィアは、人口三百廿五萬人に過ぎざれども、百歲以上の人、五百七十五人を有す。而して、瑞西には、百歲以上の人、一人もなしと。

●露帝と西比利亞鐵道の開通　露國皇帝は、同國大藏大臣ウイツテより、西比利亞鐵道の完成を報ずる祝電に對し、去年十一月九日、「朕は卿の喜ばしき報知に接して、誠實に感謝の意を表し、合せて、卿が、斯る短年月の間に、百難を排して、世界の一大鐵道を完成せしめたることを祝す。」と返電せられたるが、ウイツテの奉りたる電報は、トランスバイカル地方より、浦斯鹽德、及び、旅順に達する二千四百ウエルスト(凡そ千二百哩)の距離の、鐵軌敷設を終らば、滿洲に於ける露國の經營は、全然と稱し能はざるまでも、實際上、完

了するものなり。目下の所、一時の運輸は、全線路通じて、爲し得べく、一個年内には、永久の運輸せらるべしと記せる由なりとぞ。

●年中塗替を要する橋　目下、紐育に架設中なる釣橋を除きては、世界第一の長橋と稱せらるゝ、英國のフォース橋は、三十五人の人夫を使用して、一方の端より他の一方まで、ペンキを塗るに、三年を要する由にて、此の三年は、ペンキの有効期限なれば、橋の全部を塗り終る頃には、再び、他の端より塗り始めざるべからず。されば、同橋は、間斷なく、塗替居れりとぞ。

●光線の自動器械　銅貨を投じて、自動裝置に依り、體量を測り、或は、菓子を求め、甚しきは、靴を磨かさしむる等、所謂ペンニー、イン、スロット器械は、近來、著しき程度にまで發達したるが、頃日、紐育には、一個の白銅貨を投ずれば、自働裝置に依り、X光線を發して、手又は腕の骨を、見得る器械發明せられ、市街繁華の場所に据付ありと。

●倫敦と紐育の人口　倫敦の人口は、千八百九十一年に、四百四十二萬二千二百二十人なりしが、今年は、四百八十萬三千三百四十二人となり十年間に三十七萬〇百二十二人を增加したり。紐育の人口は、千八百九十年に、二百四十九萬二千五百九十一人たりしが、千九百年には、三百四十三萬七千二百二人となり、十年間に、九十四萬四千六百十一人を增加したり。又、十五年前、倫敦の人口は、一年に、五萬人を增加する割合なりしが、既往十年間に於ける平均の增加の割合は、三萬七千人に過ぎず。之に反して、紐育は、十年前に、增加の割合三割一分なりしもの、既往の十年間には、三割七分餘に增加し、次の十年間には確に、倫敦の人口を、凌駕するに至るべしとぞ。

●落葉籠　紙面の都合により休載

●新刊寄書

偕行社記事	第二百七十七、八、九號	東京	偕行社
兒童研究	第七、八號	東京	教育研究所
東京經濟雜誌	自第千百五號至第千百十三號	東京	經濟雜誌社
越佐教育雜誌	第百六、七號	新潟	越佐教育社
東京教育雜誌	第百四十三、四號	東京	東京教育會
山形教育雜誌	第百三十、一、二號	山形	山形教育社
出版月報	第二號	東京	出版月報社
山陰之教育	第七十八號	鳥取	鳥取教育會
高知教育	第百十三、四號	高知	高知教育會
日州教育雜誌	第二十九號	宮城	日州教育會
東京感化院月報	第六、七號	東京	東京感化院
法政新誌	第五十一、二號	東京	法政學會
兵事雜誌	第二十一、二、三號	東京	兵事雜誌社
岡山教育雜誌	第四十六號	岡山	岡山教育會
大阪教育會報	第百八十四號	大阪	大阪府教育會
島根教育雜誌	第百七十九號	島根	島根教育會
體育	第九十五、六號	東京	日本體育會
教育公報	第二百五十三號	東京	帝國教育會
埼玉教育雜誌	第二百三十四號	埼玉	埼玉教育會
大日本山林會報	第二百二十六、七號	東京	大日本山林會
大分教育雜誌	第二百號	大分	大分教育會
琉球教育	第六十一號	沖繩	沖繩教育會
愛媛教育雜誌	第百七十一、二、三號	愛媛	愛媛教育會
國家學會雜誌	第百七十七號	東京	國家學會

紀伊教育	第百三、四號	和歌山	紀伊教育會
東洋	第三號	東京	經濟社
千葉教育雜誌	第百十六號	千葉	千葉教育會
長崎教育雜誌	第百十一號	長崎	長崎教育會
京都教育雜誌	第百十四號	京都	京都教育會
大福帳	第三、四號	愛知	山田丹心館
家庭	第十一號	京都	大日本佛教婦人會
少年世界	第十六號	東京	博文館
女子のとも	第百三、四、五號	東京	東洋社
心の華	第十一、二號	東京	大日本歌學會
令德	第九、三號	東京	令德會本部
國學院雜誌	第十一號	東京	國學院
日本婦人	第二十四、五號	東京	帝國婦人協會
をんな	第十一、二號	東京	大日本婦人會
婦人と子ども	第十二號	東京	フレーベル會
大日本婦人教育會	第百三十九號	東京	大日本婦人會
大八州雜誌	第百八十五號	東京	大八州館
愛國	第八十一號	岐阜	愛國社
眞信	第四十七、八、九號	愛知	眞信會
刀劍會誌	第十三、四號	東京	刀劍會本部
學生新聞	第一、二、三、四號	東京	學生新聞社
裏にしき	第百八、九、十號	東京	尚綱社
婦人の生活	全一冊	東京	伴鶴堂
日本人	第百四十九號	東京	政教社



新年

附録

流水記

一 [illegible]

女鑑第貳百四拾四號附錄

流水記

小林四絃

第一、

「ねえ、所夫、所夫だつて、少たァ察してお呉んさいな、私しァ本統に厭なんだわ。」とぢれる様に言つて、火鉢に踏める様に身を突き出して、夫の顔を見上げたのは、お京と云ふ女で、漸う二十歳に爲つた位の、極く邪氣無い方である。顔は稍面長な、色の白い、眼の切れ上つた、愛嬌の乏しい容色で、物を云ふ度に眼の極めてよく働くのである。着物は絹二子の袷に、黒繻子と鼠の僞ひ緞子の腹合せの帶を、引掛けに結んで、瓦斯糸の前垂を締めてゐる。

火鉢の向ふに、考へ込んだ様に默つて座つて居るのは、お京の所夫の今井良助と云ふので、年配は三十歳を越したらしい、色の淺黑い疲せた病身らしい男で、鼠の獨逸ネルの單衣の上に、新銘仙の袷を着て、絹緞の帶を寛くぐるぐる巻きにしてゐる。

「然しい、」と、男は何か考へながら腕組をして、

「一概に其様、お前の樣に言はれても困るなァ、」

「困るッたつて、所夫、何だッて其様な事請合つてらしッたの、私だつて、取締の奥様が、元の私のお友達だつてえ事知つて居りァ、此様してるのさ、へ厭な位なんだわ。其いだのに、好い氣になつて遊びに行かれたもんぢやないわ。」

「ぢやア、お前、何樣言つて辭る積りだ。己ア奥樣に是非連れて上ると言つて來たんだから、如何も今更辭り樣が無いんだなア。」と男は腕組の手を解いて、火鉢の猫樣に乘せてあつた、長煙管を取つて莨を詰め初める。

「だつて、私ア困るわ。所夫だつて大抵解つてるぢや有りませんか、外出の物ッたら、せい〲糸織位ッきや、無いんですもの。其も、最う派手で着られやしないわ。」と濕みを持つた眼で所夫の顏を見上げてた。

「なアに、派手な事アあるもんか、隨分三十にあつても、彼の位の物ア着て居る人ア有るさ。」と煙管に火を點ける。

「着てゐる人ア着てゐる人ですよ。私ア彼樣な物着る位なら、死ぬ方が好いわ。」

「まだ、其樣な馬鹿な事を言ふ。」と少し笑を含んだ聲で言つて、「ぢやア、お前、如何しやうッて云ふんだ。」

「だから所夫に相談してるぢやありせんか、」

「其樣さあア、今更如何するッて事も出來ないんだし、……如何だ。あア、此樣したら、何樣だ、」

「何樣するんですよ、」

「お前のまア、氣にや入るまいけども、小梅にでも行つて借りる樣にしちやア如何だ、」

「小梅の姉さんですか、」とお京は熟と所夫の顏を見詰めて、「姉さん所も好いんですども、姉さんあア、私、後で、やれこれ云はれのが、辛いんだわ、人に物を貸ッてえあア、誰だつて厭ですからねえ、」

「あに、姉さんは、其樣な事、思やしない。ねえ、如何だい、其樣しちやア、」

「エヽ、だけども、女つてもなア其樣はいかないわ、」

とお京は氣の進まぬ樣に、「其りア、私だつて昔のお友達に遇ふんですもの、嬉しく無い事ア無いわ、だけども、向ふが向ふだから、此方も見くびられるかア、厭ですからねえ、」

「だから、其樣したら如何だ、なんなら己が行つて遣つても好いが。」と良助は喫ひさしの煙管を、ほんと火鉢の端で叩いた。

良助は王子製紙場に勤てゐるのである。月給は僅かに二十圓足らずで、お京と自分の母親を養つ行くので、月々の暮しも不足勝で、中々外見を張る所までは行かぬのである。其に良助が今度出てゐる工場の取締の家に行つた所が、其の細君は、お京と高等女學校時分の、同窓の友達だと云ふ事がわかつたのである。で、此の週の日曜日一日、夫婦連で遊びに來て呉れと、招かれてゐるので、元來、意地張の強いお京の事であるから、招ばれたとても 眼下に見られるのが厭なので、苦しい中にも外見を張つて、何所までも立派にして見せ度いのである。

お京と良助とは遠縁の又從兄弟で、お京が未だ十七歲の春、辯護士で名を賣つてゐた父は、急性の腦充血で此の世を去つて、母も間も無く跡を追つた。で、只一人取り殘されたお京は、通つてゐた、高等女學校も、中途で退學する樣になり、其から遠縁と言ふので、良助の父が引取つて、息子の娵にしたのである。

お京は今此樣云ふ塲合で、昔の友達に遇ふのであるが、向の人は良助よりも上の、取締をしてゐるのさへ、口惜しいのであるから、所夫が優しく姉の處に借りに行つたらと云ふのも、齒痒い樣で、寧そ招待を辭つて了はうかとも思ふのである。

「其樣、所夫の樣な事ア言つてられやしません

よ、」とぢれた樣に口を曲めて、「姉さんだつて、私ア義理がありますわ、自分の物を自分が着る樣に行きやアしませんし、其樣な思してまで行き度かアないわ。」

「其樣かつて、お前、辭る積りぢや無からうな、今更其樣な事云はれんぜ。」

「私、最う厭だわ。所夫、好い樣になさいよ、私なんか、何樣せ、何樣でも可いんだわ、」と情無さ相に言つて、首を垂れて、はつと嘆息をした。

「いかんなア、如何も、ぢやア、お京、お前は己が松原に(取締の名)約束して來たのが氣に入らんのだな、」と良助は少し憤として云つた。

「わら、其義ぢや無いんだわ、」とお京は周章て顏を上げて所夫の顏色を伺つて、「所夫ア直き彼樣な事をお云ひなさるんだもの、私ア何時行かないつて云つて、」

「其んなら、好い樣になさいなんて云はんが可い、」

「エ、、最う云ひやしませんわ、」とお京は潤んだ眼を世話しく瞬いた。

二人は暫時默つてゐるので、何となく白けて了つた。丁度、午後三時頃でも有らう、南緣の障子の裾樣に近く、斜にうつる日影は、明るく部屋の中に反射して、暖かな風につれて、庭の丁子の花が、甘つたるい樣に香ふて來る。

而ると、表を通る工場通ひの荷馬車が、地響きをさせて近寄つて來て、鈴の音がちやらり〱通り過ぎると、不意に製紙場の三時の笛が鳴り初めた。

お京は時々、上眼で所夫の樣子を伺つては考へ込んで、垂頭いてゐたが、此の時急に顏をあげた。

「所夫、……………わあた、」と、途切れ〱に聲を懸けて「所夫、怒つてらつしやるんですか。」

「む……」と良助は首を曲げて、お京の方に向いた。

「うむ、あァに、怒りアせんよ、」

「だつて、何だか變にして居らつしやるわ、」と言つて「所夫、本統に、姉さん所へ、行て下さいますか、」

「其りア、行て遣らう、己が行く方が好からうな、」

「エヽ、其りア、所夫からあら、」とお京は落付いた樣に靜に云つた。」

「まァ、其の中にやァ、一つ拵へてやらうよ、はヽヽヽ、」と良助は何氣あく笑つて、垂頭てゐるお京の丸髷を見た。

「所夫、本統に、氣樂ねえ、」と淋しく笑つて、所夫の顏を見上げた。

第二、

向島は小梅の奥、引船通りに近い田畝に向つて、名倉と表札のある冠木門を、今しもくゞつたのは今井良助である。飛び〳〵に置いた花崗石の敷石を、一つ〳〵跨いで、引き違ひの格子戸を、がらがらと開けると、中から出て來たのは、良助の嫂である。

「おや、まァお珍らしい事、さァ、お上んあさい、」と先に立つて坐敷に案内をする。

部屋は南に向つて八疊の客間で、花毛氈が一面に敷き詰められてある。床に掛けてあるのは景文の花鳥の幅で、其の下の青磁の花瓶は、櫻の花に覆はれた樣にあつてゐる。

良助は庭に向いて、床の間に斜に坐つて居るので、其れに向い合つて火鉢を中に、嫂のお高は坐つた。

年配は三十一二の、一寸見には未だ、二十台にも見へる若作りの女で、大丸髷に牡丹花の手柄を掛けて、白つぽい新秩父の袷に、黄八丈の書生羽織

を着て、右の指には、赤のルビー入の金の指環を嵌めてゐる。

「や、何樣も申譯ないお無沙汰致しました。なんですか、兄貴は、今日は何處か出かけましたか、」

「エヽ、最う此の節は何だか、家にゐる事ア無いんですよ、ほら彼の羽田さんね、彼の方が來て、始終一處に釣に出かけるんですよ、」

「へえ、其奴ア不思議だね、兄貴ア其樣な事やりますかねえ。私なんか道樂し度つても暇がありません、」と言つて、袂からゴールドの箱を出した。

「其樣でせうよねえ、お多忙しくつちや、其樣な事お遣んなさる間も無いでせう。其樣言やア、お京さんも此の節大さうお丈夫の樣ね。此の間一寸お留守にあがりましたの、」

「ふア、其樣だつた相ですね、何日も何樣もお愛想が無いんで、」と良助は、話の間を見てゐてお京からの頼を言はうと思つて、樣子を伺つてゐる。

お高は立つて次の間に出て、頻りに下女の名を呼んでゐたが、軈て茶を入れて良助の前に出した。

「やア、最う姉さん、其樣になすつちや困りますよ、實は今日、一つお願ひが有つて上つたですが、」と口を切つて良助は、卷煙草を火鉢の火にかざした。

「まア、改つて、大層六づかしいんですね、私でも解る事ですか、」

「なアに、姉さんにお願ひするんです、實は、此樣云ふ譯なんです、今私が勤とる工場の、取締の細君ですな、之がお京の學校時分の友達だつた相で、」

「はえー、まア其樣ですか、矢張り高等女學校の方の?!」

「はア、左樣だ相で、其れが此の日曜に是非お京

を連れて來て呉れと云ふんですがな、まア、其に付いちやア、着て行く着物が無いと云ふ仕末なんです、」

「此の日曜と云ふと？」とお高は一寸眼を瞬いた。

「エヽ、明後日になります、」と一寸語を切つて、「で、如何でせう、實にお願ひ憎いんですが、何か拜借する譯にはまゐりますまいか、」

「エヽ、其りア最う、私ので好いんなら、何時でもお持ちなさい、其のかはり碌な物は無いんですよ、」と言つて考へる樣に、「ぢや、何が好いでせうね、風通か其とも紋お召でも、」

「何でもまア、姉さんの好さ相なのにして下さい、」

「ぢや、良さん、御覧なすつて下さいな、」

お高は立て、次の間に行つた、而ると、軈て、簞笥の開く音がして、暫時經つと、下着から上着、帶、帶上と幾度にも運んで、其處に並べたのは、未だ一度も袖を通した事の無い、新調の品ばかりである。

「姉さん、之ぢや、何樣も立派過ぎますよ、姉さんの殆の着替へ位で好いんですから、」

「だつて良さん、元がお友達で、今向ふが羽振りが好いのに、余り見すぼらしい姿をしてつちや、見識が無いぢやありませんか、」

「其りア、まア、其樣ですな、」

「ぢやア、之になさいよ、遠慮しちやア却つて氣まづいぢやありませんか、」

「いゝや、其樣云ふ譯ぢや無いですよ、」と良助は周章て云つて、「只まア、余り立派なもんですから、何樣かと思つたんで、では拜借して參りませう、」

「エ、其様なさる方が好いわ、」とお高はしきりに進めた。
「だが、姉さん、之りア、母様にやア默つてゝ下さいませんか、彼様云ふ昔気質のなんですから、また何様だ此様だ云はれのも面倒ですからな、」
「エーエ、其りア、最う、私だつて知つてゐさアね。……でも此の節ア、母様は家にゐらつしやるんですか、」
「いゝや、二三日泊り掛けで田舍に往つてます、」
「まア其様ですか、其りア丁度好いぢやアありませんか。おはゝ、まア此様な事云つて母様の罰が當るでせうよ、」
「あはゝゝ、なアに、最う當り様もありません、」と良助も共に笑つた。

第三、

空はうつとりと霞んで、日の光も何處と無く柔かに射る椽端に、汚點のある赤毛布を敷いて、其の上に立つてゐるのはお京である。
見渡す限り、遠く飛鳥山から、王子權現の森へかけて、四五日前から吹き初めた彼岸櫻は、夢よりも淡い日の光に霞んで、遠ざかり行く汽車の汽笛の、遙かに廣い田圃に消える樣に聞えるのも、何となく穩かな朝であつた。
お京は四邊を見廻しながら、飛鳥山の方に眼を移すと、丁度製紙場の高い大きな三本の煙突から、黑い雲の樣な烟が、眞直に立ち昇つて、中空から薄くなつて、横に流れる如く靡いている。
「所夫、最う叙々お仕度なさいな、」とお京は帯を解きながら部屋の中を覗いた。
良助は日の射し込んでゐる、疊の上に胡坐を組いて、白シヤツの襟を取替へてゐる處なので、思は

す顔を上げると、お京の眼とぱつたり出會つた。

「如何だ、風も出さうも無いか、」と意味も無く笑つて、お京の前にある今日の晴衣に眼が止つた。

「エヽ、好いお天氣よ、」とお京は邪氣なく笑つて、うつとりと眼の前の衣物を見詰た。

而して、日に温つた色無し友禪の長襦袢を取つて、するりと着てゐた平常着を脱ぎかへると、生温い風につれて、幽かに闍香の匂ひが漂ふて來る。

良助は不圖眼を見張つた。

お京は其の上に、薄鼠に賫ろく櫻と水を染出した友禪の下着に、紋お召の寂革地の鶉の三紋の給を、裾長く引いて、ヅッと裾先を眺めた。

「如何だ、好さ相ぢやないか、」と良助は手を休めて見てゐるので　お京は顔を赧めながら微笑んでゐる。

「おい、如何したんだ。己の方ばかし急がせて置いて、眺めてちや爲かんよ、」

「あら眺めてゐや爲ないわ、」と前をぐつと合せながら裾を蹈まへて、下に有る淡紅色縮緬の腰帶を取つて、腰に廻した。

「サア、己の洋服は何處だ、」と良助は衝と立上る。

「あら、其處に出して無くつて?」とお京は部屋の中を覗いて、「所夫、有るぢやありませんか、其處に、」

「むゝ?　と後を振向いて見て、「うむ、よろしい、」

良助は軈て白シャツを着て、黒メリトンの兩前の背廣を、窄袴から初めて暫時の間に着て了つた。

「さア如何だ、襟は曲つてるか、」と首を動かしながら云ふ。

お京は今漸く、媚茶の龜甲つなぎの、繻珍の丸帶を締め終つた處なので、がつかりした樣な顔をし

た。

「エヽ、曲つてや為なくつてよ、」と云つて、椽端に倨んで着物の仕末を初めた。

「おい、最う九時過ぎだ、遅くならん中出掛け様ぢやないか、」

「エヽ、跡ア此様しといて、歸つてから為りやア好いわね、」

「うむ、其様しろよ。」良助は最う立つて、彼方此方の戸を締め初めた。

而るとお京は、手土産の小包を持つて、先に立つて門口に出る、良助は後から出て戸締りをして、二人とも今往來の眞中に立つた。

眩しく射す日の光を顔に受けて、門をはなれて二三歩行き出すと、ゆるく吹く風が静に肌に當る。空は雲も無い青空である。お京は孫叓衣摩れのする仕立下しの衣物の色ゆ、我ながら眩い許りなのに氣臆れがして、足元もたど〳〵しく思はれる。二三間行くと、直ぐ道は左へ曲るので、お京は良助と並んで、今丁度曲らうとする時、後の二階家から、何か云つたものがある。

お京は、はつと思つて振返つた。

「いよう、素敵〳〵、」と御下宿としてある點燈の、丁度上の二階の窓に腰を掛けて、家根に足を投出してゐた職工らしい男が、大聲で言つた。

「何だ〳〵、」と又一人、窓から首を出した、「へッ、畜生甘く遣つてやがらア。」

「若し〳〵奥様、何か落ちましたよ、奥様、」と先の男が故意と冷かす様に言つた。どつと崩れる様な笑ひ聲が聞える。

お京は上氣せる様に顔を眞赤にして、衝と良助の傍に寄つた。

「あら、其様に逃げちやいけませんよう、」と又一

人變つた聲で厭らじい女の假聲をしたものがある。

「ふん、何云つとるんか、愚らん者だなア、」と良助はお京を顧ッて云た。

「本統に厭らしいぢやありませんか、」とお京は良助の顏を見上げる。

道の兩側は一面の櫻で、二人は今其の花の隧道に這入つた、花の枝は兩方から覆ふ樣にかゝつて、其の間から日の光が漏れて、其と無し匂ふて來る香の、我ながら我身の怪しまれるばかりに清いのである。

而ると、向ふから月琴と琴と尺八の亂れた音が、賑やかに聞えて來て、近在を廻る法界屋の一群が、派手な紫色の衣裝をつけて、門から門を流して來る。其の中から透き透る樣な、癇高な女の聲が一段高く聞えて來る。

なんと無く、切れて呉れえと物やはらかアにい、眞綿でえ、首の强ア意見、アラ八千八聲のねえ時鳥、鳴いて、血を吐くより辛い。

二人はうつとり眼を見合した。

第四、

八疊の座敷に對向つて、膳を前に笑ひ興じて居るのは今井夫婦と、松原大五郎と、其の妻のお禮とである。

酒が初まつてから間が無いので、左右に置かれた空氣洋燈は輝くばかり光つてゐる

「さア今井君、今日は最う、此樣して内輪同士の樣な者だから、遠慮せんで寛然飮つて呉れ給へ、」

「はア、何樣も此樣な御厄介に成つちやア、實に恐縮ですな、」と良助はまばゆい光に顏を照らされて、前に置いてあつた猪口を取つた。

「お禮、お酌して上げんか、」と大五郎は妻を顧つ

て言て、扨て良助に「處で、君、如何だね、近來、社の方も面白く無い樣ぢや無いか、」
「へえ?、其れア如何いふなんです、」と良助は膝を進めた。
「ふう、君ア、未だ知らんかね。まア其樣さな、我輩も昨晩聞いた樣な仕末だからな、」
「はヽア、……、」と暫時考へて、良助は、ぐつと猪口を飲み乾して大五郎に献しながら、「何樣も、一向知らんですな、何か社の方でありましたかな、」
「左樣、社も近々大改革を遣る相ですよ、」と良助の猪口を受取つて、お禮に酌をさせてゐる。
「大改革を?、はア左樣ですかなア、」と良助は何か考へながら云つた。
「然し君、如何考へるね、まア此の際、我輩の考へなやア、此樣な處に何日までぐづ〳〵爲とるのも、言つて見りやア詰らん話しだから、何處か好い處に轉じ樣と思ふんだね、」
「いや、其りア、其樣ですよ、何處か好い口さへありやア、私も轉じ度いたア思つとるです、」
「其りア、丁度好い、如何です、我輩の友人に生命保險に行く者があるんで、昨今頻に地方の遊説員を欲しがつて居るですがな、如何です、一つ遣つて御覽なさるか、」
「其樣云ふのなら是非お願致し度いですな、」と良助は傍にゐるお京の顏を見て、靜かに答へた。
「實はな、」と大五郎は飲み乾した猪口を返しながら、
「我輩も其に這入らうかと思つとるです、では早速、云つて遣りませう、無論、なんですよ、報給の處はきまつて居る譯では無い相ですが、旅費やら何やらで、兎に角三十圓位には成らうと云ふんで

す。」

「否に、最う、初めから其樣餘分の事ァ思つては居らんです。」と平常の口數の少いには似合はず、酒の廻るにつれて、多辯出して、良助は稍膝を崩し初めた。

大五郞は酒氣を帶びた眼で、四邊を得意氣に見廻した。何と無く物靜かな春の宵の、華かなランプの光りは酒の香の入亂れた、温かな空氣の動くのに連れて、部屋の隅々まで達いて、今日を晴れと着飾つたお京の姿は、水際立つて優しく見えるのである。

ふつくりと大きく結つた丸髷の、鬢の出方から、襟足の柔かい毛の、艶々と黑く美はしいのに、さらぬだに上品な顔は、色の白い上に稍上氣せて、淡く櫻色になつた、口元に言はれぬ愛を含んでゐる。好く揃ふた衣紋の、肩から腕へかけて、撫でた樣に着こなした紋お召の寂革色が、燈火に照らされて、一際うるはしく冴え渡つた。

大五郞はお京の顔を見て、「何樣もお呼び申しといて、何にもお愛相が無いんで。如何です、貴女も、少ッたァお飮んなさるでせう、なァお禮、お前、お相手でもしてあげないか。」

「い丶え、最う、何樣か。」とお京は押へる樣に云つて、「私ァ最う、本統に無調法なんで御座いますから。」

「あら、私だつて一口位飮くんですもの、まァ一口位。」

「あら、貴女、いけませんよ。」とお京は身を退らす樣にして、「貴女、御存知なのに、本統に無調法で、戴け無いのですから。」

「でも、貴女、なんばなんでも、お一つ位。」とお禮は大島紬の袖を一寸口に啣へて、徳利を持つて

摩り寄つた。

「否え最う、本統にいけませんよ、」

「いゝや、まァ其樣仰らんで、お禮もお相手をします。左樣やつてお居でゞすと、何だか貴女一人、お客樣の樣でいかん、わはゝゝ。」と大五郎は聲高に笑つた。

「まァ貴女、其れぢやァ酒はづれになりますわ、」とお禮は莞爾しながらお京の顏を見た。

良助は默つてお京の樣子を見て居たが、「お京、其樣御辭退しても、却つて失禮だ、いけなけりやァ、お猪口丈でも戴いたら可からう、」と傍から口を出した。

お京は最う〳〵餘儀無いので、兩手で恐る〳〵猪口を捧げた指環のルビーがきらりと光る。

お禮は徳利を持つ手を伸して、猪口に當てがつて、注がうとすると、お京は周章てゝ猪口を上げた。

「あら、其れぢやァ貴女、」とお禮は怨ずる樣にいふ。

「否え、最う之で澤山なのよ、」とお京が猪口を下に置かうとすると、お禮は其に酌がうとする。」

「あら、いけませんよ、」と周章てゝ手を引くはずみに、注ぎ掛けた酒は溢れて、ばら〳〵とお京の膝にかゝつた。

「おや、まァ飛んだ事しましたね、」お禮は驚いて立たうとする。

「エ、、否え、」とお京は急いで猪口を下に置いて、袂から絹の白ハンケチを出して、膝を拭いた。

良助は思はず眼を見張つた。

「まァ、貴女、本統に濟まない事ね、私、まァ何樣したら好いでせう、」とお禮はうろ〳〵して大五郎の顏を見る。

「やァ、何樣も飛んだ事だな、貴女、汚點にでも

ありや為ませんか」

「否え、何樣もありアしません、」とお京は苦しさを隱して、濡れた處をハンケチで押へて、ちらと良助の顔を見た。

良助は其となく下を向いた。

今まで賑やかに笑つてゐた席も、何と無く白けて、時々顔を見合せる計りである。

暫時すると良助は、お京と眼配せして暇乞ひをするので、松原夫婦も最う此の上止める事も出來ず、二人を玄關まで送つて來た。

「實に何樣も、今日は非常に長坐いたしまして、」と良助の挨拶するのに連れて、お京も同じ樣に首を下げる。

「まア、何樣か之にお懲り無く近しくなすつて下さい。だか、奥樣にや實にお氣の毒でしたなア」と大五郎は、お京の方を見て云つた。

「本統に最う何と申して好いんですか、」とお禮はお京の傍に寄つて「其の中、私、お宅へお詫にあがりますわ。」

「否え、最う其樣な御心配なすつちやア、」とお京は僅に其に答へた。

良助は先に立つて門を出るので、お京も後から續いて出た。

空は一面の星明りで、彼此夜は九時頃である。門の左は直ぐ黒板塀で、吹くとも無く吹いて來る春の夜風の、冷と醉醒めの肌に染み渡つて、近く聞える製紙場の夜業の蒸氣の音が、靜かな空に響いてゐる。

良助は塀に添つて默つて歩行いて行く。

お京は門を出ると、堪へ切れずに良助の傍に駈け寄つた。

「所夫……、」と濕んだ聲で云つて、しつかり良

助の手に縋り付いた。手の先はぶる／＼慄へてゐる。

良助はがつかりした樣に太い嘆息を吐いた。

第　五、

「おや、母親かお歸んなすつた樣だ、」と獨語の樣に云つて、良助は格子戸の前で立止つた。

家の中は明るく洋燈が點いてゐて、火鉢の前には何樣やら人がゐる樣である。

「おい、母親の樣ぢやないか、」と小聲で、後にしよんぼり立つてゐるお京を振返つた。

「エ？」とお京は何か考へてゐる樣に云つて、何氣なく家の中を見て、燈火の點いてゐるので急に驚いて、「まア、母親でせうか、」とおど／＼した樣に、良助の手に縋つた。

「其樣だ、………、然し此樣しとつても仕方が無い、さア入らう。」とがらり格子を開ける。

「誰だ、」と奥から老人らしい聲が聞えた。

「はア、私です、」

「あゝ、良助かえ、」と云ふのは、二三日田舍に泊りに行つてゐたと云ふ母親のお牧である。

良助は先に立つて障子を開けて、母のゐる納戸に這入つた。お京は思案に餘つて、格子戸の中に立つた儘、未だ上らうとも爲ないのである。

「お前まア、後お締めなね、」

「あに、今お京が締めます、」と良助は母親と對合つて火鉢の前に坐つた。

お牧は年配五十七八の痩せた、眼のきよろ／＼した小作りな女で何と無く人は好さ相ではあるが、昔氣質の氣むづかしい處もある樣で、襟の掛つた古い紬の袷を着てゐる。

「まア、お前、何處へ行てお出でだ、」とお牧は不常出厭の良助が、自分の留守に珍らしくお京を連

れて外出たので、稍不快の調子で云つた。
「今日ですか……、」と云つて暫時默つてゐる。
「お京は門口で、最う如何したら可いかと當惑したのである。現在所夫と一所だとは言ふもの丶、母親のゐる時に、今迄餘り外出した事の無いのに、此樣して二人で氣樂らしく、夜遲くおつて歸つて來たのであるから、母親の留守を幸と、思はれた所が仕方が無いのである。然も自分が晴衣らしい物の一枚も無いのも知つてゐるので、今着てゐる之が、姉の所から借りて來たと云ふ事も、姉が持つてゐる大抵を知つてゐるので、察して了ふであらう、其樣すれば此の膝の汚點を咎められたらばと、此樣先から先を思つて來ると、最う居ても立てもゐられぬのである。
「お京は、まア、其所で何してるんだねえ、」と障子の方を見て、お牧は呟く樣に云つた。

お京に漸う上に上つて、障子を締めて、母親からは疊一枚ばかり手前で、丁寧に座つて首を下げた。
「母親、お返りなさいまし、」と氣臆れがした樣に言ふ。
「あ丶、先刻歸りましたよ、」とお牧は眼早く、お京の着物を見詰めてゐる。
「まア大層お早く、」と俯向き勝に母親の樣子を伺ひながら云つた。
「あアに、早かア無いわね、」と云つて「今日はまア、何所へお出掛けだつた。良助も珍らしいぢや無いか、」
「否、母親、實は此樣なんです、」と更つて、「母親も御存知でせう、彼の取締の松原ですね、彼の細君がお京が學校にゐた時分の友達だ相なんで、態々今日遊びに來て與れッて呼ばれたもんですからね、上役であつて見れば、方々なア、行つて惡い

事ア無からうと思つたのです、」

「へーえ、まア、其様かい、まア、私ア珍らしい事だと思つたよ、」と云ひながらお牧は、お京に向いて、「お前の着てゐるなア、大層まア、立派な物ぢやないか、ついぞ、見掛けた事が無かつた様だね、」

「エヽ、之れは、彼の小梅の姉さんに拝借したんで御座います、」

「おや左様かえ、どれ、猶と傍に來てお見せな、」

とお牧は直と膝を進める。

お京は僅に一膝進めた丈である。

「もつと傍にお出でな、其所ぢやお前、燈火が遠くつて解りやアしないわね、」

「はい、」と仕方無く傍に態と寄つた。膝にハンケチを乗せてゐる。

お牧は袖口に両手で觸つて見て、「何と云ふ物だらう、矢張、お召縮緬の様だね、」

「紋お召だ相で御座います、」

「紋お召？、」とお牧は袖を丁寧に見たが、其からお京の身の廻りを、穴の開く程見廻して、不圖膝に置いた手のルビー入の金指環に眼が付いた。

「おや、其も姉さんのかえ、」

「はア貸して遣ると仰るもんですから、」

「まア奇麗だね、矢張、水晶なんだらうねえ、」と云つて手を出して「一寸お見せ、」

お京は指環を抜かうとして手を上げた、とたんに、膝のハンケチがするりと落ちる。

「おや。まア其りア如何したんだえ、」とお牧は顔を突き出して、膝の汚點を見る。

お京ははッと吐胸を吐いた。

「まア、其様な汚點の有るのを貸したのかえ、」とお牧は稍激して云つた。

「否え、つひ、あの、過失を致しまして……、」とお京は身を縮めて、手はわなわな慄へてゐる。

「まァ、お前がかえ、………、」とお牧は呆れて眼を見張る。良助はお京の樣子を見て、「なァに大した事ァ無いでせうよ、」と其と無くなだめる樣に言ふ。

「大した事で無くつても、お前、物が物ぢやァない か、」とお牧は、最う破れでもした樣に、恐しい顏付をしてお京を見詰めて「其れで何かえ、お酒でも溢したのかえ、」

「はい、」

「一體、まァ何だね、向ふだつて取締位の人なら、元々此方等たァ、身分からして違ふんだしさ、何も其樣御方で、大層にして行かないでも、好さゝうなもんぢや無いか。姉さんの物だから、汚しても可いわぢやァ、居られませんよ、」と不快な調子になつて來る●

「否え、其樣云ふ意ぢやないんですけれども、」とお京は疊に兩手を突いた。

「其れァ知れてるぢやないか、其樣言ふ意で居られて堪るもんかね、ねえ、お前だつて知つてるだらう、姉樣だつて、此樣して何も彼も惜氣なく、お前に貸して呉れるのも、お前への義理も有らうけれど、私が始終、お前の世話になつてると思やァこそするんですよ。ねえ、其樣ぢやないか。」

「エヽ、其りァ最う、姉さんの御恩は大變でございます、」と聲は最うゝるんでゐる。

「また此樣して離れてゐりやァ、私だつて彼女に義理がありますよ。其に、母樣が付いてゝ見りァ、借りたからつて、只突返す譯には行かないしさ、おまけに、汚點まで附けて返されて、姉さんだつて好い顏をしてゐられますまいよ、ねえ、良助、お

前、如何お思ひだ、」と傍にある煙管を取つて煙草を詰めてゐる。

「其りア姉さんにや、實にお氣の毒です、然し譯を云つて、お謝りする外は無いでせうね、」と良助は顔を上げて云つた。

「お前はまア、お京の事で言ふと、何日も其樣だけども、」

「エ、何です、母親さん、」と良助は憤として母親の顔を見た。

「お前の樣に言つちや仕樣が無いよ、」と語を切つて、

「私の思ふにや、只謝る位ぢや濟むまいと思んだね、其ア彼女の事だもの、汚點が出來ましたからと言つて返したつて、眼の前ぢや何とも言ひは爲ないだらうさ、しないだらうけれども、其樣されて見りやア、猶更、私ア切ないんだよ、」

「何も母親が知つた事ちやないんですから、關つた事ア無いです、」と良助は最う語の言樣が違つてゐる。

「其ア、其樣はいかないよ、知ら無いからつて、母親が付いてゝ、見りやア、一應は何とか、母親から、言はないぢや置けませんよ、」

「母親にまで、お迷惑をかけて、何樣も、濟みません、」とお京はふるへる聲で言つて、眼は一杯涙を含んで居る。

「濟みませんたつて、其いちやアお前濟みアしないやね、」と冷やかに言つて、お牧はすつと傍を向いて、莨を喫つた、

「私が、皆惡いんで御座いますから、……、」とお京は母親の顔を見上げる。涙はほろりと落ちた。

「泣いたつて、お前、仕樣が無いやね、」と荒かに言つて、煙管を火鉢の端でぽんと叩いた。

「エ、イ、最う知らん、」と吐鳴る様な大聲で言つて、良助は不快な顔で突と立上る。

「あれ、所夫、……、」と立上る所夫の袖をつかんで、お京は涙をはら〳〵溢した。

「何だね、十五や十六の者ぢやあるまいし、」と呟いてちらと良助の顔を、横目で見たまゝで、お牧は傍を向いた。

「何？」と良助は母親の顔を見下したが、其の儘衝と戸外に出やうとする。

「所夫、まア母親に其様な、」とお京は握んだ袖を堅くにぎつたまゝ引摩られた。

「エ、、退かんか、」良助はお京を振切つて、手荒く障子を開けた、

「良助、何處へお出でだ、」とお牧は後から言つた。

「何處だつて好い、」と不快に任せて、がたつと格子を開ける。お京も續いて土間に下りた。

「あなた、所夫……、」と泣き聲で「何様か〳〵、短氣な事、なさらずに。」とわな〳〵ふるへて良助の手に縋つた。

良助は、はッと思つて立止つたが、家の中で又一つ煙管を叩く音が鋭くしたので、振切つてぷつと戸外へ駈出した。

お京はぐつたり格子に倒れて、わつと聲を立て、泣き崩れた。

第　六、

其の夜、良助は、何處で飲んだか、酒を十分に飲んで、遲く十二時頃歸つて來た。が、母が寐て了つた後なので、默つて床に就いて了つた。

夜の更るに從つて、お京は泣いてゐるので、神經は愈々鋭くなつて、何様しても睡る事が出來ぬのである。

傍を見ると夫は高鼾で、酒臭い呼吸をしながら熟

く睡つてゐる。其を見てゐる中に、樣々の事が種々頭に集つて來る。

今日の事の元はと云へば、只自分一人の見得が爲たさ、昔の友達に此樣も零落たかと、見下られるのが辛さに、姉の着物を借りた許りであるが、其が此樣も一家の中に不快の感じを漲らせて、母子の間に隔てを拵へ樣とは思はなかつたのである。

さし當つては、彼の着物を持つて、小梅に詫に行くのに、何と言つて謝つたものであらう、若し彼の汚點の拔けない時は、兎ても自分が償ふ事も出來ず、母親に迄好い耻をかゝせる樣なもので、之から姉さんに合せる顏も無い次第である。其に自分の樣な不束な者がゐる爲めに、今迄爭た事の無い家が此の先、彼樣言ふ具合になつては、兎ても此樣してゐられる場合では無いのである。着物を償ふ事も出來ず、母親の機嫌を取る事も出來ず、家中が

何となく氣まづくなつて、厭な思をして毎日〳〵暮さねばならぬ樣になつたら、如何であらう、其も皆な自分の爲であると考へて來ると 胸は最う一杯になつて了つた。

然し所夫が今日行かうと、約束さへして下さらなかつたら、今日行くにも及ばなかつたので、母親の留守に、故意出た、樣に察られ無いで、濟んだものをとも考へるので、すると又、母親も彼樣までお言ひなさらないでも好さゝうなものだ、何も自分ばかり惡い樣に、思はれる筈は無いのにと、此樣身勝手な事も思ふ樣になると、松原のお高さんが、彼樣なにさへして呉れなかつたら、此樣な思をしないでも濟むものを、無理に厭がるものを進める人も人なれば、其を見てゐた大五郎も餘りだと、人を恨むばかりになつて來る。

暫時すると又、あゝ自分が溢しさへせねば好いの

に、行きさへせねば好かつたのにと、我身ながら、我身が恨めしくなつて、思はず嘆息を吐いて、はッと聞えはしなかつたかと聞き耳を立てた。

あゝ母親が彼樣お言ひなさるのは、さぞお怒なすつたからであらう、親も無し、兄弟も無し、此樣して、頼りに思ふ人に、捨てられる樣になつて、其も誰ゆゑだと胸に問ふと、只最う情無い計で、涙は湧いて頰を傳つて來る。

「あゝ頼りに思ふ人たら、本統に有りアしないんだし、最う如何したら好いんだらう、」

お京は密と夜着をはげて、四邊を見廻した。薄く戸の隙から射す月の光で、何處と無く明るく部屋の中が見える樣に思はれるので、耳を立てると、赤羽根の方でゞもあらう。荷物の滊車の音が幽かに遠く響いてゐる。

「最う何樣しやうもないんだわ……。寧そ私がゐなかつたら……、」と不圖考へると、自分ながら哀れに悲しくなつて、又も涙が湧いて來る。

お京は音せぬ樣に立上つて、夫の顏を覗いたが、暗いのでよくは解らぬのである。で、便所に行く樣に障子を開けて、椽端に出て、雨戸の桟に手をかけた。

而ると、母親の寐てゐる方で、何か音がした樣に思つたので、はッと身を縮めた。胸は動悸が高まつて波を打つ樣である。

暫時經つても、何とも人の起きた氣合も無い。

お京は密と雨戸を開けた。

冷ッとする風が裾をあをつて、夜は彼此二時近くである。見渡す限り、一面の月夜で、何處も彼も烟つて、寂しさは胸に應へるばかりである。

お京は跣足の儘、下に下りた。

「母親、最う、お目にかゝりませんから、……、」

と小聲で呟く樣にいつて、手を合した。身體はぶる／＼慄へる「私が惡いばかりで此樣なつたんですから、所夫も母親を好くして上げて下さいまし……」と涙のあふれる眼で熟と家の中を覗いて、齒を食ひしばつて、歔欷へつた、

暫時して、ふら／＼とよろめく樣に、立上つたが、其の儘足に任せて何處とも無く迷ひ出した。

＊　＊　＊

王子停車場から北に當る、二番目の蹈切より先に、鐵道線路に添ふた大きな原がある。

見渡す限りは、王子から赤羽根に續いた、平らかな田で、霞みに霞んだ景色の中に、悄然立つて考へてゐるのはお京である。

夜は二時過ぎの事であるので、荷物の終列車も、最う通り過ぎた跡で、吹くとも無い靜かな風が、只夜肌に冷たく當るばかり、何時迄待つても汽車は、來さうにも爲ないのである。

「最う私ア、死ぬ事も出來ないのかしら。」と月に光る長い鐵道の線路を、うつとり眺めて獨語の樣に言た。で、顏を上げて四邊を見廻すと、眼の前に暗い王子稻荷の森があつて、幽かに瀧野川の水音が、物靜かな空に響いてゐる。

「あゝ、彼處が好い、……」と胸に答へて、又ふら／＼と歩き出した。細い道を出て、稻荷の森に這入ると、眞暗な木の下の處々に月の光が漏れて、水の音が次第に近づいて來る。で細い溝に添ふた道を辿つて森を出過ると、其處には瀧野川の流れが、ゆるやかに流れて、右手に突當る處に大きな堰がある。其の瀧をおして流れ落る水が眞白く泡立つて、月に輝いてゐて、石に激する音が、右と左の山に響き合つて、いとゞ寂しさを增すば

かりである。
お京は四邊を見廻した。
遠く飛鳥山のあたり迄、立込めた水蒸氣に包まれて、川の兩側に崩れる樣に、咲き滿ちた櫻の花は、蒼白く月に霞んで、水を打つた樣に靜かに眠つてゐる春の夜深の景色は、鋭くあつてゐるお京の神經を、稍鈍らせた樣である。
「あゝ、本統に女なんて情無いもんだわ、」と熟々言つて、空を仰いだ。

* * *

其の夜が明けてから、良助とお牧は、お京の居ないのに驚いて、心當りを種々探して見たが、何樣しても行衞が知れなかつた。
四五日經つてから松原のお禮は、土產物をしたゝか持つて、お京を尋ねて來たが、お京がゐないのですご／＼歸つたとの事である。
良助は其の後、社の方を退いて了つたが、生命保險の口もかゝらず、家にゐては只默つて口も言かず、酒に身を持崩して、母親も最う居ないとの噂である。
其の後三四年經つて、お京が東京の或る料理屋へゐるのを、見掛けたと言ふ人もある。（完）



ひとゝせものがたり（上）

（口繪參照）

正月　良岑宗貞

良岑宗貞、ある年の正月十日、こゝろざす所ありて出行かれける道に、五條わたりにて、雨のふり出でければ、暫し雨やどりせんとて、荒れたる家の軒にたゝずみながら、奥のかたを見入れけるに、五間ばかりなる檜皮ぶきの家にて、人影も見えねば、宗貞、何となく、門内にあゆみ入りて見れば、はしの間の軒に、梅の、いとおもしろく咲きたるに、鶯も鳴居たり。人ありげにも見えぬみすのうちより、色こき衣の上に、薄色のきぬをきて　たけたちよきほどなる女の、髮いとながくみゆるが、

よもぎおひてあれたるやどをうぐひすの
　人くと鳴くや誰とかまたん

とひとりごとに吟じたれば、宗貞、これをきくより、そゞろに心うかれて、

來たれともいひし馴れねばうぐひすの
　君につけよとをしへてぞ鳴く

と聲うるはしう吟じかへせば、彼女、うちおどろけるけしきにてはづかしきさまを見られたる事よと思ひがほにて、物もいはず、内に入りたり。

（百人一首一夕話）

宗貞、後に出家す。僧正遍照即ち是なり。

二月　那須與市

あけぼの生

數多き關東武士の中に召し出されて、沖なる船の扇を射よとの御諚、弓矢執る身の面目この上もなきものから、さても、また、射損じたらむ曉には、武士の恥辱この上やはあるべき。與市が、浪定まらぬ駒の上に、神佛を念じつゝ、弓ひきしぼりたりけむ折の覺悟は、いかなりしぞ。要を射きられて舞へる扇の、時ならぬ紅葉と散るを見て、舷をたたき、艫をうちて、したりや〳〵と賞め罵れるやからの中、與市の心をくめるもの、幾人かありたるべき。げに、世を隔てたる人なりながら、佐野天徳寺入道やうの人は、まことに、ありがたくぞありける。

平家物語の一節

去る程に、阿波讃岐に、源氏を待ちける侍共、十四五騎二十騎打列れ〳〵出來り、三百餘騎に成りけるが、日も晩じたれば、源平、互にひき退く處に、澳より、尋常に飾りたる小船一艘、渚より七八段迄漕ぎ寄せ、船を横ざまになす。あれはいかにと見る所に、齡十八九許の女房、柳の五つがされ、紙の袴着たるが、船屋形より立ち出で、日の丸の扇を、船の背峽に挾み立て、陸へ向つて招きける。判官、後藤兵衛を召し、いかならんと問ひ給ふ。射よとに候はめ。大將矢面に進んで、傾城を御覽ぜらるれば、手垂に狙はせて、射落せとの謀と覺え候。扇は射させられ然るべくもやと申しければ、御方に射ん仁は誰ならんと問ひ給ふ。某らより後れ着て、軍の間に合ひかれ候面々の内に、別けて、下野の國の住人、那須太郎資高が子に、與一宗高、小兵ながら、手利にて候。判官、證據はありや。さん候。掛鳥など爭ふに、三つに二つは射落し候。さらばとて、與一を召さる。いまだ、二十歳ばかりの若冠なり。黄黒に赤地の錦を以て、壬紅粉たる直垂に、萌威の鎧着て、足白の太刀を帶き、靫を負ひ、薄截生に塗の羽割り合せはぎたる鏑差添へ、滋籐の弓を手挾み、兜を高紐に掛け、判官の前に畏まる。いかに與一あの扇の正中射て、敵に見物させよと宣ふ。與一答へて、これはたやすからず候。射損ぜば、御方に御弓箭の瑕に候ふべし。一定、仕らん仁に、仰せ付けられ下されかしと申しければ、判官怒つて、今

及西國へ向ひし者共、皆、義經が下知を背くべからず。少しも、子細作せば、疾く鎌倉へ歸るべしと宣ふ。與一、重れて辭せば、身の大事と、御諚の上は、仕りて見候はめとて飛り立ち、黑馬の逞しきに、梨子地金覆輪の鞍置いて、うち跨がり、手綱搔い繰り、汀へ歩ませける。御方の兵共、遙に見送り、此の若者、一定仕らんと申す。猶、扇の交ひ七段ばかりみえたりし。二月十八日酉の刻近く、折節、北風吹いて、磯打つ浪も高かりけり。船はゆり上げゆり居ゑ、漂へば、扇も串も定まらず、ひらめきぬ。沖には、平家、船を一面に雙べて見物し、陸には、源氏、轡を列て是を見る。天晴曠がましき業なりけり。與一は、弓矢八幡大神、我が國の神明二荒の權現、宇津宮、那須湯泉大明神、願はくは、あの扇子を射さしめ給へ。射損ずるものならば、弓切りなり、自害して、人に再び面は向くべからずと、心の中に祈念し、暫く眼を閉ぢ、鏑矢を打ち番ひ、活と眼を見開きたれば、風も吹き弱り、扇も正にみえけるとき、能く彎いて、切つて放てば、鏑高く響き鳴りて、扇の要際一寸ばかりて置いて、はつしと射切り、鏑は海へ入り、扇は空へ揚りたるが、海原のそよぐに任せ、ひらり／＼と、高く舞ひ昇り、海へさつと散りにける。源平兩陣これを見て、射たりやいたりやと、譽むる聲、暫らく鳴りも止まざりしが、扇の傍に立ちし女房、高らかに、

時ならぬ花や紅葉を見つるかな
　よしの立田の麓ならねど

と詠みて、屋形に入れば、船は、忽ち、漕ぎ去りぬ。

三月　八幡太郎

唐扇生

姉さんは、弟の鐵坊を呼んで、昨日敎へた修身の話を問ひ試みて居ます。

姉「八幡太郎てえのは如何な人だつけね。」弟「賢い人だよ。」姉「どんな風に賢いの。」弟「戰に强くつて情深くつて。」姉「おゝさうですよ。能く覺えて居るねえ。天子樣の仰せを蒙つて東の夷を征伐したとき、敵の大將貞任を追ひ駈けて、一矢で射殺さうとしたけれども、歌の下の句を詠みかけたら、上の句で答へたから、許して、一時命を救けて遣つたの、ね、それからもつと何だつけ。」弟「獸狩に行つて、狐を射たから、從者が行つて見たら、矢は頭をかすつたばかりで、體に刺つて居なかつ

た。變に思つて聞くと、殺生はせん、弓の狙ひをためすんだと言つたよ。」姉「それからもつと。」弟「そんなに無いや。」姉「あら澤山あるんぢやないかね、それ、雁の亂れて飛ぶのを見て、野に伏勢あるを知つたつて敎へたよ。なんでも人は、人が惡くいふても怒らずに、その惡い處を聞いて、能く勉强しなくッてはなりません。でなくては賢い者になられませんよ。」弟「あゝさうだ、あのう姉さん、小童が昨日野へ行つて、雀の飛ぶを見て、下に稻のはしてあるのを知つたよ。」姉「オホヽヽ鐵ちやん可笑しいよ、いや然し善かつた。何でもさう覺りを能くしなくてはなりません。それから義家は何が上手だつけ。」弟「歌だア。」「何處でどんな歌を詠んだの、鐵ちやんは必と忘れたね。これは難かしいから忘れても仕方アない、姉さんが敎へて上げるから能くお聞き。勿來の關を通るとき、櫻の花が路一杯に散つて居たので、吹く風を勿來の關とおもへども、路もせにちる山櫻かな、分つたかえ。どれいふてごらん。」弟「ひく風を泣く兒の咳とおもひしにウトー、ウト〳〵、何だつけ。」姉さんはアッと吹き出して「ハハハハア鐵ちやんまア、御母さん御聞き遊ばせ。あのう鐵ちやんが……。」

四月　清少納言

田山とり子

はるかに香爐峯の雪を思ひやりて簾を捲げし才は、あはれ、いみじの人やと、かつは褒らるれど、死馬の値を說きて、郎署年少を恥しめたるなど、人をも人と思ひたらざりきと、いたくも、そしらるる少納言のおもとこそ、いとはしけれ。紫式部、

赤染衛門、さては和泉式部のおもとたちにつきては、寛裕の雅量ある世の人の、如何なれば、この人にのみ峻酷なるらむ。

門のかぎりを高くつくりける人も聞ゆるはといひては、大進生昌を驚かせ、五千人の中には入らせ給はぬやうもあらじといひては、權中納言義懷を啞然たらしめし如き、諸共に、朝夕仕奉りなれし間には、まして、史記、漢書、法華經といふものをさへ、諳におぼえし女も珍しからざりし世には、かばかりのこと言ひたりとて　才學を衒ふものと後言いふ人あらむとだにも思ひかけざりけむよ。ひたすらに、疵をのみ求めたらむには、顏回といへども、惡人たらざること難かるべきをや。ひとり、この少納言のおもとにおいてのみ然らむ、やは。僧といはず、俗といはず、人は皆、權勢をおひて趨り、さしもに時めかせ給ひしも夢とさりて御父關白死せて後は、御病といふにさへ、加持すべき僧も來ず、宿直せむとする殿上人も稀になりし定子皇后に仕奉りて、終始渝らざりし志のほど、あはれならずといふ人やある。これを紫式部の貞靜温讓ありしに比べて、劣れりといふべからず、彼は德によりて其の名を傳へ、是は亦、其の志によりて、ながく忘らるべからず。遂に出で、仕ふることをせず、御堂殿のいきほひ天の下及ばぬくまもなき世にかくれて、猶、これを抑へ、我が仕奉りし御方の人々を、はゞかりもなく稱譽へし草紙一部、もしやは、式部のおもとの筆ならましかば、彼の春秋とやらむの筆づかひにも比へけむを。と、あまりに、さもなきことまで言毀さるるがいとはしさに、あやしう、ひが〳〵しき心さへぞ出來るぞかし。

枕の草紙の一節

五月の御精進のほど、しきにおはしますに、ぬりごめのまへ、
ふたまなる所をことにしつらひしたれば、れいざまならぬもお
かし。ついたちより、雨がちにて、くもりくらす。つれ〴〵
なるを、郭公の聲尋ねありかばやといふをきゝて、われも〳〵
と出でたつ。賀茂のおくに、なにがしとかや、七夕のわた
るはしにはあらで、にくき名ぞきこえし。そのわたりになん、
日ごとになくと人のいへば、それは、日ぐらしなりといらふる
人もあり。そこへとて、五日のあした、みやづかさ車のことい
ひて、北のぢんより、さみだれはとがめなきものぞとて、さし
よせて、四人ばかりぞのりてゆく。うらやましがりて、いま一
つして、おなじくはなどいへば、いなとおほせらるれば、きゝ
もいれず、なさけなきさまにて行く〳〵、馬場といふ所にて、人
おほくさわぐ。なにごとするぞといへば、てつがひにてまゆみ
いるなり。しばし御らんじておはしませとて、車とゞめたり。
右近の中將みなつきたまへといへど、さる人も見えず。六位な
どのたちまよへば、ゆかしからぬことぞ。はやくすぎよとて、
ゆきもてゆけば、道も、まつりのことおもひ出でられておかし。
かういふ所には、あきのぶの朝臣いへあり。そこも、やがて見
んといひて、車よせておりぬ。ゐ中だち、事そぎて、馬のかた
かきたるさうじ、あじろびやうぶ、みくりのすだれなど、こと
さらに、むかしの事をうつしいでたり。屋のさまも、はかなだ
ちて、はしちかくあさはかなれど、おかしきに、げにぞ、かし
がましと思ふばかりに、なきあひたるほとゝぎすの、聲を口をし
う御前にきこしめさず、さばかり、したひつる人々にもなどお
もふ。所につけては、かゝる事をなん見るべきとて、いねとい
ふものおほくとりいでゝ、わかき女どもの、きたなげならぬ、
そのわたりの家の、むすめなんなゝどひきゐてきて、五六人し
てこかせ、見もしらぬくるべきもの、ふたりしてひかせて、う
たうたはせなどするを、めづらしくてわらふに、郭公の歌よま
んなどしつる、わすれぬべし。から繪にあるやうなるかけばん
などして、物くはせたるを、見入るゝ人なければ、家あるじ、
いとわろくひなびたり。かゝる所にきぬる人は、ようせずは、
あるもなどせめいだしてこそまゐるべけれ。むげに、かくては、
その人ならずなどいひて、とりはやし、此の下わらびは、てづ
からつみつるなどいへば、いかで、女官などのやうにつきなみ
てはあらんなどいへば、とりおろして、れいのはひぶしになら
はせたまへるおまへたちなればとて、とりおろし、まかなひさ
わぐほどに、雨ふりぬべしといへば、いそぎて車にのるに、さ
て、このうたは、こゝにてこそよまめといへば、さばれ、みち
にてもなどいひて、卯花いみじくさきたるを折りつゝ、くるま
のすだれそばなどに、ながき枝をふきさしたれば、たゞ、うの
はながさねを、こゝにかけたるやうにぞ見えける。ともなるを
のこども、いみじうわらひつゝ、あじろをさへつきうがち
つゝ、こゝまだし〳〵と、さしあつむなり。人もあはなんとお

もふは、さらに、あやしき法師、あやしのいふかひなき物のみ、たまさかに見ゆる。いとくちをし。ちかうきぬれば、さりとも、いとかうてやまんやは。此の車のさまをだに、人にかたらせてこそやまめとて、一條殿のもとにとゞめて、侍從殿やおはします。郭公のこゑきゝていまなんかへり侍るといはせたる。つかひ、たゞ今まゐる。あがきみ〳〵となんのたまへる。さぶらひにまひろげて、さしぬきたてまつりつといふに、まつべきにもあらずとて、はしらせて、つちみかどざまへやらするに、いつのまにか、さうぞくしつらん。おびは道のまゝにゆひて、しば〳〵とおひ來る。ともに侍るざうしきものはかではしるめる。とくやれど、いとゞいそがしくて、つちみかどにきつきぬるにぞ、あへぎまどひておはして、まづ、此の車のさまを、いみじくわらひたまふ。うつゝの人のゝりたるとなん、さらに見ねぬ。猶、おりて見よなど、わらひたまへば、ともなりつる人ども、興じわらふ。歌はいかにか。それきかんとのたまへば、いま　おまへに御覽ぜさせてこそなどいふほどに、雨、まことにふりぬ。などか、こと御門のやうにあらで、此のつちみかどしも、うへもなくつくりそめけんと、けふこそ、いとにくけれなどいひて、いかで、歸らんずらん。こなたざまは、たゞおくれじと思ひつるに、人めもしらずはしられつるを、あういかんこそ、いとすさまじ、けれとのたまへば、いざたまへかし。內へなどいふ。そ　もゑぼうしにてはいかでか。とりにやりたまへなどいふに、まめやかにふれば、かさなきをのこども、たゞひきに引きいれつ。一條よりかさをもてきたるをさゝせて、うち見かへりうち見かへり、此のたびは、ゆる〳〵と物うげにて、卯花ばかりをとりおはするもをかし。さて、まゐりたれば、ありさまなどとはせたまふ。うらみつる人々、こんじ心うがりながら、藤侍從一條のおほぢはしりつるほど語るにぞ、みなわらひぬる。さて、いつら歌はととはせたまふ。かう〳〵とけいすれば、くちをしのことや。うへ人などのきかんに、いかでか、おかしきなくてあらん。そのきゝつらん所にて、ふとこそよまゝしか。あまりきしきき、事さめつらん。そあやしきや。こゝにてもよめ。いふかひなしなどのたまはすれば、げにと思ふに、いとわびしきを、いひあはせなどするほどに、藤侍從の、ありつるうの花につけて、卯花のうすやうに、

ほとゝきすなくねたつねに君ゆくと
きかはこゝろをそへもしてまし

かへしつらんなど、つぼねへすゞりとりにやれば、たゞ、これしてとくいへとて、御すゞりのふたにかみなど、いれてたまはせたれば、宰相のきみ、かきたまへといふを、なほ、そこになどいふほどに、かきくらし雨ふりて、神もおどろ〳〵しうなりたれば、物もおぼえず、たゞおろしにおろす。しきの御ざうしは、しとみをぞみかうしにまゐりわたしまどひしほどに、うたのかへりごともわすれぬ。いとひさしく鳴りて、すこしやむほ

どに、くらくなりぬ。たゞ今、なほその御返事奉らんとて、とりかゝるほどに、人々上達部など、神の事申しにまゐりたまひつれば、西おもてに出て、ものなどきこゆるほどにまぎれぬ。人はたましてねたらん人こそしらめとてやみぬ。大かた此の度にすぐせなき日なり。どうじて、いまは、いかで、さなんいきたりしとだに、人にきかせじなどぞわらふを、いまも、など、それいきたりし人どものいはざらん。されども、させじとおもふにこそあらめと、物しげにおぼしめしたるも、いとおかし。されどいまは、すさまじくなりにて侍るなりと申す。すさまじかるべき事かはなどのたまはせしかば、やみにき。

五月　櫻井驛

與太生

進みて、潔よき死を遂げむとは、いと易かれど、父のゆるさゞるを如何にかせむ。退いて、慈母に孝養を盡さむか。これはた、その志にあらず。さればとて、いわけなき身にて、柱石となりて、國家の傾くを支へむこと、いかに、これぞ、難しとだにも、いはるべきか。

わづかに千百の兵を擁して、眇たる千早窟の城により天下百萬の衆と戰ひて、其の膽を寒からしめし忠勇義烈も、身は一廷尉の卑に安んじて、而かも、天下の安危を一手にかけたりし壯圖宏略も、今は、あはせて、小楠公の手に托せられたり。ひとり、再び見ゆるとかなはざるべき、父のもとを辭するが悲しきためのみにて、其の歩遲々たるものならむや。あはれ、其の任は、堪へくるまじく重きが上に、其の途、きはめてはるかなり。千萬無量の感慨、つたなきふでの、いかでか盡し得べき。

太平紀の一節

楠正成、五月十六日に都を立ちて、五百餘騎にて、兵庫へぞ下りける。正成、是を最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が、今年十一歳にて供したりけるを、思ふ樣ありとて、櫻井の宿よ

り、河内へ返し遣すとて、庭訓を殘しけるは、獅子子を產みて三日を經る時、數千丈の石壁より是を擲く。其の子獅子の機分あれば、敎へざるに、中より跳返りて、死する事を得ずといへり。況や、汝、已に十歲に餘りぬ。一言耳に留らば、我敎誡に違ふ事なかれ。今度の合戰、天下の安否と思ふ間、今生にて、汝が顏を見んこと是を限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は、必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助らんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の、一人も死殘りてあらん程は、金剛山の邊に引籠りて、敵寄せ來らば、命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是を汝が第一の孝行ならんずると、泣々申し含めて、各、東西へ別れにけり。昔の百里奚は、穆公晋の國を伐し時、戰の利なからん事を鑒みて、其の將孟明視に向ひて、今を限の別を悲み、今の楠判官は、敵軍都の西に近づくと聞しより、國必ず滅びんことを愁へて、其の子正行を留めて、なき跡までの義を進む。彼は異國の良弼、是は吾朝の忠臣、時千載を隔つといへども、前聖後聖一揆にして、有り難かりける賢佐なり。

六月　菅家の靈

純陽の氣欝して、憤を雷に發す。菅公の如き聖賢、寃に依つて西鄙の塵を蒙る。公は怨まずといへども天これを憤り、しば〳〵、宮殿に霹靂す。法性房、勅に應じて都に出る時、加茂河の洪水止まつて陸地となる。其のよく天の怒を宥めん事必せり。

(百人一首一夕話のゑとき)



謹賀新年

明治卅五年一月一日

國光社編輯所員一同

二卷第一號　明治三十五年一月一日發行

一月分郵税共三錢五厘半年分拾九錢一年分卅六錢

短歌課題（各題五首以下）

文藝雜誌 四の緒

一月　竹馬　虎

俳句課題（各題五句以下）

一月　寒梅　車（冬結）

〆切毎月二十日限○用箋半紙半切各題別記

發行所　名古屋市伊勢町七七　四の緒發行所

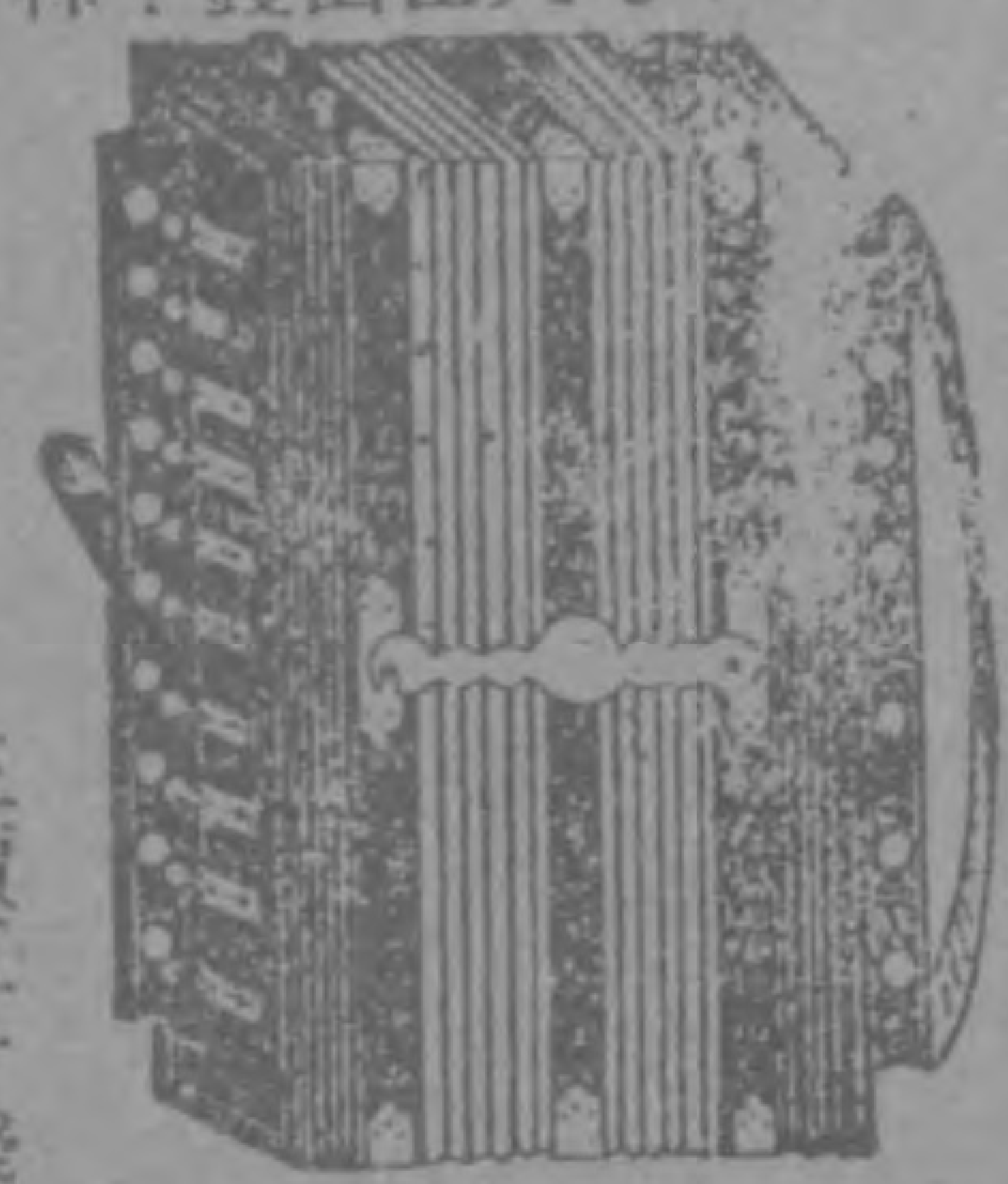


無師獨奏
紙腔琴
本器は習はずして獨奏し得る輕便美妙の音樂器なり●大形上製金十五圓●大形中製金九圓七十五錢●小形上製金五圓

卸し小賣

船來
手風琴
おろし小うり

手風琴は西洋樂器中最も輕便にして學び易く何人にても獨奏し得ると自在也三圓三圓五十錢四圓四圓五十錢五圓五圓五十錢六圓七圓八圓九圓十圓十二圓十五圓十八圓等各種



訂正增補
手風琴獨まなび
全二冊　正價五十錢　郵稅八錢



▲新式　▲樂器
陽琴
▼金貳圓七十錢　▼金四圓五十錢

陽琴は筑紫琴八雲琴の類にして至極輕便容易なる樂器なり

西川製風琴
一手販賣

音律正確保險附き十八圓廿圓廿七圓三十三圓三十七圓四十三圓四十八圓五十五圓六十五圓七十五圓八十五圓百圓百廿圓以上各種



銀笛
（原名フラヂオレット）



卅五錢七十錢八十錢九十錢

銀笛獨まなび
全一冊　正價十五錢　郵稅二錢

●●
西洋橫笛
橫笛獨まなび
全一冊　正價金貳拾錢　郵稅金四錢



上等金三十五錢以上貳圓迄

軍樂器
クラリオネット●バスアルトホン●ホロン●コルネット●カスタネット●トライアングル●シンバル●大太鼓●小太鼓●信號喇叭●譜面臺五線紙等各種



大聲蓄音器
大々的廉價

金十八圓金廿五圓金六十五圓以上金三百五拾圓迄各種

長歌清元義太夫聲色樂隊等御好に應ず本器は最新改良の器械なり既往行れし粗造器と同視する勿れ又廉價は弊店の特色なり



ピアノ　バイオリン　オルゴール　室内運動器　尺八　清笛　吹風琴　各種

學校用體操器械
ボールバット木銃啞鈴テニスマスクミット各種

教育玩具
座敷玉突空氣銃模型軍艦水雷艇帆船セーリングボートアルコール燃喞筒呼子ゼンマイ仕掛滊車滊船及人物動物鳥類其他幻燈地球儀等

●
日本遊戲唱歌
五編既刊　正價各十五錢　郵稅各二錢

●文部省檢定濟
大捷軍歌
全七冊　一冊金四錢宛　郵稅全部四錢

●明治音樂會編
學校唱歌
全二冊　正價金三十錢　郵稅金四錢

●教科適用
幼年唱歌
二編下卷中卷出版　正價各金二十錢　郵稅各金二錢

樂器本舖　十字屋
東京銀座三丁目二番地　電話新橋二百五十九